

---

# 俺と野球と奇跡 (パワポケ10)

yoriduki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と野球と奇跡（パワポケ10）

### 【NNコード】

N9481X

### 【作者名】

yoriduki

### 【あらすじ】

親に流されるままに親切高校に入学することになった俺。

中学の時から続けていた野球部に入り、仲間とともに甲子園を目指して

日々練習していた。

だが、その前には中学校の時の「俺にとってのライバル」が立ちはだかる…

稚拙な文章だけど、よかつたから見てってください！

一日か一日に一話更新しようと思つてますが、そろそろテストが近いし、受験もあるので、更新スピードが遅れるかもしれないのですがよろしくお願ひします。

## 第1話 「一体俺はなつなつてごく？」（前書き）

この作品は、ほとんどパワポケ10成分で構成されています。  
嫌な人は見ないでください。

## 第1話 「一体俺がひなつてこへ？」

「はあ、今日の練習も疲れたな……」

「そりでやんすね……」

そういうて、俺と親友の荷田君は最近住み始めた学校の寮へ戻つて行つた。

そして寮の部屋に着くと、

「おー、お前ら帰るのが遅ー…そりそりポテチ買つてーーー。」  
「え……」

先輩たちがいた。

俺達一年生はいつもこのよみうな先輩の雑務を過ごしながら生活してゐる日々だ。

とつあえずなぜこのよみうな生活をしてゐるか教えておいで。

2週間ほど前・・・・・

「そろそろ俺も高校ビートルか決めないとなあ……」  
「なら、この親切高校つてことはまだないつかしう。」

親切？変な名前だなあと、思いながら、もひこひむに尋ねた。

「それってどんな高校？」

「なんでも野球が強い全寮制の高校らしいわよ」

「俺野球は中学でやめるつて言わなかつた？」

「あれ、そうだったかしら、まあいいじゃない」

野球、野球か…

少し考え、俺は言った。

「うん、もう一度俺野球をやるよ」

そつ、中学の時に、倒せなかつたアイツを倒したくて…

「それじゃあ、ぬさん行つてへるよ  
「こつてうひしあこ」

「「」の高校バスでしかこれないんだな、しかも片道一時間だし…」

「本当に不便でやんすねえ。バスの本数も少ないでやんすし」

「え？君は？」

「おいら荷田でやんす。中学の時あんたの学校とも戦つたことがあるでやんすよ」

「荷田…あ、思い出したぞ、あの時のキャッチャーか。俺は西園寺 隼弥だ。よろしく」

「よろしくでやんす。そういえば、西園寺君も野球部に入るんでやんすか？」

「…ああ、もちろん」

そんな話をしてる間に俺たちは学校についた。

「えー、これから校長先生の話だ。よく聞くよつ」

「「」の親切高校では全寮制が（」」

だから、これから君たちは外に出る必要がないのです。なぜなら、ここには

君たちに必要なすべてがそろっているのですから

ガコン！

え…今の音つて何？まさか…門が閉まつた音？俺これからやつていけるかなあ…

球児移動中…

「俺が野球部の監督の車坂だ。ここでは親切なんて関係なしにビン  
バシやつていく。」

そのつもりだからしつかり覚悟しておけ！」

おい、親切はどこいった。責任問題とかいいのか。

そして今。

さつきの寮の部屋で毎日同室の先輩たちにじごかれている。  
荷田君がいるから俺一人だけじごかれてるわけじゃないからまだマ  
シだけど…

ちなみに同室の先輩は飯占キャプテンと北乃先輩だ。

俺、本当にこれからやつていけるのかなあ…

## 第1話 「一体俺がひなつてこへ？」（後書き）

yoridukiです。初投稿なので、間違った言葉、文脈などが  
あつたら指摘お願いします。

## 第2話 「ペラつて薄つペらつて、価値が低い感じするわ

あれはいつだつたか。きっと中3の春だつたはず。

公式の大会で上位に入り、次の大会であたつた相手がアイツだつた。アイツは俺と同じ投手で、4番だつた。

俺はアイツからヒットを打てず、逆にホームランを打たれて1・0で負けた。

そんな夢を見て俺は起きた。

「西園寺君、早く起きないと遅刻するでやんすよー。」

「え…あ、ああ、もうこんな時間か！」

急いで制服に着替えて寮を出る。なんとか朝のチャイムには、間に合つた。

…にしても懐かしい夢を見たな、俺。

そういうばー時間はなんだつたかな…

そつ思つて時間割を見てみると、

「H R 何するんでやんすかね？」

丁度隣から聞かれた。

「いや、なんで俺に聞くんだよ…」

「知つてそつでやんすから」

なんだそれ。

「今から校内で使つ紙幣を渡す

担任の大河内先生はそつ言つて、ペラとよばれる紙幣を渡してきた。

「先生、この学校でお金は使わないはずじゃ？」

「まあ待て田島、今から説明するから。

まず、これはこの学校で使つお金だ。購買で使つたり、100ペラ  
だせば一日間

だけだが、外に出ることができる。肝心のためる方法としては、ボ  
ランティアを

することだ。ボラ（ソラ）をしたら学校側からペラが支払われる。こ  
の200ペラ

はお試し用だな。言つとぐが、ペラを取引したりするのは御法度だ  
からな、解つ

たな？西園寺

「なんで俺に言つんですか！」

「お前入試の時点数低かつただろ

「なら、越後だつて」

「あいつも確かに点数が低かつたが、今寝てるだろ」

ぐう。

まあ、まあ、西園寺は200ペラを手に入れた！

「西園寺君は何で使つでやんすか？」

「やつだなあ……」

帰る途中に荷田君が聞いてきた。でもなあ…

「まあ今の所はためておへよ。何があるか解らないからね。  
「それが無難でやんすね」

「じゃ、まあ部屋でも入つて話でもしようつか」

ガチャ

「おひお前りー今日ペラ配布されたよな?100ペラよーせー。」

「……」

「あ、びついた?まさかもつ使つてたりしねえよな?」

「こや、やの……」

じゅうがないから北乃先輩に100ペラ渡した。  
すると隣の荷田君が話しかけてきた。

「…ホントに使つ」とこなつたでやんすね  
「言わないでくれ…」

越後アイツ大変だうな、先輩三人いたし。

適当に手を合わせておくか。

あー、もひずつとボランティアとしてやるつか。

「そりいえば、ここって男子校だと思つてたら森の奥に女子寮があるんでやんすね！」

「普通に平地でつながってるだろ、警備員さんがいるけどな」

「え、そうだったんでやんすか！」

「だからといって行くのはやめとけよ」

「なんでやんすか？」

「あそこには警備犬や警備員さんがいっぱいいるからな。怒られに行くなら止めはしない

けどな」

「そ、そなんでやんすか…」

「ほら分かつたら俺のパンツでも洗濯しつけー」

森か…そのまま壁をよじ登つて外にも出れそうだな。  
警備に見つかならなかつたらの話だけど。

### 第3話 「森の中の巨大女」

「はあ……疲れた……」

「昨日は部活のテスト、昨日は先輩のマッサージでもうべたくただつた。

「屋上にでも行って休むかな……」

てくてくと屋上に向かって歩き出す。  
そこでふいに足をとめた。

「音楽室から音? 一体誰が……」

まさか幽霊とも考えたけど、それはないだろ? な。  
としあえず少し見てみるか……ん?

「あれ、田島じゃないか」

「お、西園寺、どうしたんだ?」

「お前こそ何やってんだよ、ピアノなんか弾いて」

「俺今度ピアノのコンクールに出るんだよ。だから練習してんだ」

「そうなのか、がんばれよ」

「おう。今度またよかつたら聴いてくれよ

「ああ」

そして音楽室を出る。

あの暗い顔の田島がピアノ?

「ブツ」

聞こえてたらしく、あとで殴られた。

「うーん、いい風！屋上は気持ちいいな！」

ここからだと学校のいろんな場所が良く見えるな。確かに向いの方には女子寮があるな。

遠くて女子の姿は確認できないけど。

「それにこの森って相当広いんだなん？あそこ今何か動かなかつたか？」

少し行ってみよう

「はあはあっ！屋上からの場所まで相当遠いな！途中で警備員さんにつかりそうになつたし……！」

犬があそこにいる……！ヤバい、万事休すかつて、あれ？

「何かから逃げてないかあれ？」

もつ少し近づいてみると、今度はバンッと音がした。

「な、何なんだ？いつたい何が……」

さう近付くと、いきなり木の陰から女の子が出てきた。

「うわっ！」

互いに叫んだ。女の子はともかく俺が叫んだ理由？そんなの簡単だ。相手が185cmあれば誰でもじるだらう。

「あ、あんたウチの学校の男子……？」

「あ、うん。君は？」

「私もここに生徒。大江 おおえ 和那 かずな つていうんや。よろしくな」

「俺は西園寺。よろしく」

「それはそうと、なんでここにあるんや？ここは生徒禁止の場所やのに……」

「うう……」

た、確かに……

俺が屋上にいて見たものなんて知らなさうだけど……いや、もしかしてこの子か？

「俺は……少し用事で」

「用事いー？こんなとこにか？まさか女子寮田舎で……」

「ち、違うつてば！そういう君はどうなんだ？」

「う、うち？あの…武術やつてて」

「武術？あのバンッていつてたやつ？それなら学校でやればいいじゃないか」

「ウチ身体が大きいやろ？だから、身体振りまわすだけでも迷惑やねん」

「柔道とか空手とかつて、そんな身体激しく動かしたか？」

「いや…うちやつてるの槍術やから」

「やり？なんでやりなんか…もつと剣道とかにすればいいのに」

「ああ？剣？いいか槍つていうのはな、もともと~~~~~」

30分経過

「つていうことなんやぞ、分かつたか！」

「わ、分かりました…」

まさかこんなとこりで槍の話を長々と聞くことになるとは…

犬が来てたらどうしてたん…あれ？

30分もいたのに一向に犬がこないな、どうしたんだ？

「なあ」

「なに？」

「なんでこここんなに犬がこないんだ？」

「警備犬のこと？」

「ああ」

「そ、それは…ふ、普段一緒に遊んでるんやけど…さ、今日は来てないみ、みたいやな」

「うわー、急に拳動不審になつた。

まさかあいつ、いつつもあの犬を撃退してゐるのか…  
しかもそれを「遊び」と…これから逆らわないでおい!!…

「さあ次はあんたの用事やな」

「え? 言わないといけないの?」

「当たり前やろ… あ、もしかしてホントに女子寮目当て?」

「だから違うつて! 僕は屋上から森を見て、人影が見えたから來  
たんだよ」

「人影… まさかオバケ! ?」

「いや、ちがうだろ」

「あれ、オバケ信じてへんの?」

「まあな」

「ちなみにそれってどこからへんで動いたん?」

「ええつと… 屋上で見たのがあそこだから… もつとあつちの方かな」

「ええつ 本当に! ? やつぱりオバケやん! 」

「え、君じやないの?」

「私はすうとこないで?」

「じゃああれはこの子じやないのか… まさかオバケじやないよな?」

「俺の後ろでオバケが嫌いなのが、頭を抱えながら「うあー」って大  
江が叫んでいるが。」

「これは今度また調べる必要があるかな…」

「西園寺君ホントにどこ行つたでやんすか！洗濯ものを一人でやる羽目になつたで

やんす…」

「いいからさうさと手を動かせ！  
わーすいませんーでやんす」

荷田君は今日もじりかれている。

## 第4話 「チーメメイトと縁の髪の女のト」

前にあつた森の事がビリしても氣になるのでまた屋上に行く」とした。

まあ会えるかどうかは分からぬけど…

それにも、

「因数分解って何なんだよ。なんで勝手に分解するんだよ。自然のままにしておけよ。だから数学は嫌いなんだつて…ん?」

ガサガサツ

「やつぱり森の方で誰かがいるな。しかも…先生じゃなく女の子つぽいし」

場所を考えると大江ではないことが分かつた。  
残念ながら今日は部活があるからグラウンドにいかないと行けないんだけど。

「今度こそ尻尾をつかんでやるぞ」

そう思つて俺はグラウンドに向かつた。

練習の休憩時間に部室に入るとそこにはチームメイトの官取がいた。

「官取、何してんだそんなんじうりで？」

俺が話しかけると、

「いや、家のコツクが持つてきてくれた飴をなめてたんだ」「家のコツク？お前って金持ちだつたんだ」「ああ、うん…まあね。そうだ、君もいるかい？」  
「ああ、それじゃあ貰おうかな」

そういうつて俺は官取から飴を一粒貰つた。

特に普通の飴と変わりはないんだけどなあ…

おこしいのかな？

そう思つて食べてみても特に普通に売られている飴と特に差異はない  
かった。

「ふーん、結構普通の飴と変わりはないんだな

「そう？これ1粒1万円の飴なんだけど…君には合わなかつたかな

…

「い、1万円…？そりゃ言われるとなんか急におこしく感じられるよ

うな……

「ハハハ、調子がいい奴め」

「もし時間があつたら今度官取の家に連れてつてくれよ」

「まあ考えておくよ」

「おーい、監督から集合かかつたぞ」

チームメイトの越後がやつってきた。

「ああ、わかつた、いまいくよ」

集合された理由は単なるノックをするためだった。

「おーい、西園寺、そっちいつたぞー！」

「こんなの取れないって！ああ、奥の茂みの方に行つちやつたよ……」

……先輩のノック強

すぎるんだよなあ……先輩！茂みの方に行つてしまつたので取つてきます！

「せつせと取つてこいよ……」

そういう会話をしてから俺は茂みの方に向かつていつた。

そうして茂みに入った所で、俺は一人の女の子の声を聞いた。

「いつたー…なんで急にボールが

ボール?もしかして野球のボールか?いや待て、そもそもなぜここに女生徒?

ボールを探すついでに探してみるか。

ガサガサ。

するとそこにはボールを持った、緑色の髪の女の子がいた。

「あつ、やつぱり女の子だ!なんでここにいるんだよ…それにその手に持つてるのは

野球部のボールじゃないか!」

「あつやばい!見つかっちゃいましたよー!びつよつ…そ、そうだとこのボールで!

テヤッ!」

「ちよ、おま、この近距離で全力でボールを投げるなあ!つわああつ!」

「あつ、またまたヤバイです!ボールで氣絶させちゃいました!よし、逃げよう!」

あいつ、一体何なんだ…

「西園寺君、遅いでやんすよ!先輩がカンカンに怒つてやんす…って

びつじたでやんす、何があつたでやんすか!」

「へーん…」

そのまま俺は保健室に行つた。

桧垣先生に診てもらつたところ、幸い打ち身程度だったようで、特に何もなかつた。

なんでこうなつたか聞かれたが、女生徒のことを見つたらややこしくなるから言わなかつた。

「にしても無事でよかつたですねえ。」

「あ、はい、桧垣先生」

「そうだ、ちょっと飲んでほしい薬品があるんですが」「なんですか？危ない薬品とかじゃないですよね…」

「何、単なる精神安定剤ですよ。少し効果を確かめたくて」「まあいいですけど」

そして先生から渡された薬を飲んだ。  
むづ、特に何も変化はないけど…

まさかこれで超能力者とかにいきなりなつたりしないよな？

「じゃあ俺はこれで失礼します」

バタン

「彼は違つたようですね…」

保健室で何か聞こえたような気がしたけど、気にしないことにした。  
それより、あの女は一体何者だったんだろう？今度大江にでも聞い

てみよつかな...

## 第5話 「夏の公演試合」

「……」

先日のボールの痛みがまだ少し残ってる。

「あんな普通近距離でボールを投げるか？それよりあいつはあんまり何をしようとしたんだ？」

まあ気にしてもしょうがないと思い、荷田君と一人で昼食を取りに食堂へ向かった。

ここらの食堂の「はん上手いんだよな。

ただ、あの食堂のおばちゃんたまに無理やり食わせてくれるけど。それでもやつぱぱつぱつまつもんさつまつ。

「お、指田と田島じゃないか」

「お前らも駄飯か？西園寺と荷田」

「むしろここに時間に食堂に来て他にあらじとあるのか？」

「それもやつつか」

他にも適当に話をしながら昼食を食べて行く。  
ちなみにここはセルフです。

「あとはお茶と箸をひとつ……これでよしと」

指田の横に座る。

ふと、指田のまつを向いてみると、そこには大量の「はん」とおかずがあった。

いやいや待てよ、それ5人前はあるぞー？

…」「この腹の中ブラックホールにでもなつてゐんじやないか。

「あれ、どうしたんだ？」「飯食わないのか？」

「あ、ああ。今から食べるよ」

一緒に食べると、岩田が立つたので何かと思つて見てみると、おかわりしこいつてた。

（まだ食つのかよ…）

心中で思つた。「こんな漫画みたいに食つやつこるんだな…」。

「俺、すげい量たべるだろ？」「

「そんなに食つて毎から動けるのか？」

「うん。普段からこんなものだからね。けど、こんなに食つてこいつか身長が5m越したら

どうしよう…」

「ないない、ないからそんなの」

少し戦慄した。

もしさんな奴がいたら野球じゃなくボクサーとかになれよ。ケンカだつたら絶対まけないだろうなあ…

「ホントに？ 身長めちゃくちゃでつかくなつたりしない？」「

「ああ、そんなことないからビビん食え」

「うそ」

遠くから聞いてた田島と荷田は思つた。

「なんかアホつぽい会話だな…」

「やうでやんすね…」

「おーい、全員集合！今から明日の試合のオーダーを発表する。」  
「はい、監督！」

あ、そういうえば明日は公式の試合だつて。  
まあどうせ一年生の俺たちは、あつたとしてもベンチ入りがいいと  
こだらうけど。

そういう間で監督が選手を読み上げた。

「……！今読み上げたメンバーがスタメンだ！今からベンチ入りを

発表する！」

「新時代」の構成とその歴史的背景

「入つてくれ、でやんす！」

11

212

「18番！越後！20番！田島！以上がベンチだ」

104

「越後と田島に先を越されたでやんすー!?」

悪いな 西園寺 免強では負けでても野球では負けないぜ！」

こと思ひたどね

「それでもベンチ入りはやつぱりすごいよ。次は俺たちも入つてや

卷之三

もつと練習しなくちゃな……！

翌日。

（地方大会一回戦）

「俺たちはベンチに入つてないけど、一生懸命観客席で応援するや

！」

「やんすー！」

カキーン！カキーン！カキーン！

「ええ、先輩達けつゝやるでやんすねー！」

「え、あ、うん。そうだな」

俺の心の中でも覗いたのか？

そういうふうしてる間に決着はついた。勿論けつゝの圧勝だ。

「へえ、高校になつたら地元の新聞記者もくるんだな」

「美人の女性に質問されてるでやんすー！先輩たち羨ましいでやんす

！」

「せーいかよ」

取材が終わった先輩たちが一いつぢへ来た。

「よつお前、

「あ、キャプテン」

「しつかり俺たちのプレーを見ていたか？」

「もちろんです！」

（言わないと殴られるしな……）

「そうか。だけど応援が小さかつたな。学校へ戻つたら即反省会だな」

スタスタ…

「……最悪でやんすね」

「……うん」

さらにその翌日。

俺の高校の野球人生はここから始まつたのかも知れない。

（地方大会一回戦）

「よし！今日戦う相手は分かってるな？キャプテン」

「ウス、監督！」

「今日の相手はあの星英高校だ。去年にとんでもない投手が入部したが、

スピードが早いだけで、変化球は対して曲がらない。ビビりうずバットを短く持つて

行け！」

「ウス！」

観客席にて。

「おい、あれ天道じゃないか！？」

「ホントか！？官取！」

「ああ、西園寺。あれは天道だよ」

「地元にこんな奴がいたなんて…最悪でやんす」

「確かに…あんな奴がいたら俺たち甲子園に行けないかもな」

「うん…」

「何言つてんだ、荷田、官取、吉田…」

「な、なんでやんすか！？」

「あいつは俺たちが三年間戦つてく相手だろ？弱気になつてじりする…」

「そりだよなあ…うん、西園寺の言つ通りだ」

（天道…中学では負けたが、高校ではお前を倒して見せる…）

「よし、打つぞ…相手はただの一年だ、ババババ」とはない

「あ、飯占キャプテンが打つでやんすよー。  
「がんばれキャプテン！」

ビュッ！  
ズバーン！

「な、なんて早さだ、152km！？」んなの打てるわけねえ…」

結果 親切0 - 2 星英

星英ベンチにて

「おい、天道。お前5本もヒット打たれてるじゃないか  
「すみません監督」  
「これからは頼むぞ。この学校のエースを背負つてくんだからなー！  
「はー！」

「おこ……お前ひ。今田の試合。あれは一体何なんだ?」

「…………」

「おこ、西園寺。お前から野球を抜いたら何が残る?……答えひー。」

「え、ええと……じみであります!」

「よし、よくわかつてゐじやねえか!なら、1、2年はグランプリ50周してこー!」

「はー!」

「3年はこれで引退だ。あとで締めの一言葉を頼む」

「はー」

「いれで、飯占キャプテンともおなじでねえでやさすな」  
「ああ、わうだな」

「…………」

毎日殴られたからなあ……もと解放されると黙つて涙がでてくる

が

さて、次のキャプテンは誰になるのかね?

## 第6話 「真キャプテンは…」

「全員集合ー！」

監督の指示のもと、練習をしてた部員が一斉に集まる。今日はあの負けた試合の日の後だ。ついに次期キャプテンとか決まったのかな？まさかいきなり俺とかじゃないよな？

「…西園寺君、それはないでやんすよ」

「か、顔に出てたー…」

「むしろ聞こえて下せこいつて言つてゐるへりこの顔だったでやんす、

そ、そつか。俺つてそんなに顔に出やすいタイプだったのか。

「あ、監督の話が始まるだー！」

「…話を逸らしたでやんすね」

「ついでに…」

「一年生はこれから甲子園を田指して頑張れ。俺たちは引退するが応援してるからな。

一年はあの天道と二年間戦うことになる。苦しげだらうが負けるな。短い間だったが、

今まで楽しかったぞ」

飯占元キャプテンが引退の言葉を告げた。

…中々いいことをいうなあ。

そして、それに次期キャプテンの基宗が答えた。

「はい！先輩の意思をしつかりと継ぎ、頑張りますー。」

「よし、いい返事だ。…後は任せたぞ」

そういうて三年生は引退していった。

「よし、それじゃあ各自練習に戻れ！」

「「ウス！」」

各自練習に戻る。

それじゃ俺も練習に…ってん？

「どうしたんですか？基宗キャプテン？」

「いや、何。さつき監督にな、『キャプテンになつたなら、新人の育成もやれ』と

言われてな。まずお前から育成もしようと思つてな」

「はあ…」

一体なんで俺なんだ？もしかして見込みがあるのか…？

……んな訳ないな。単に田についたからなんだろ。

「よし、じゃ始めるとするか」

「え、今からですか！？」

「ああ」

今から何するつもりだよ……監督に言われたのさしげじゃなかつたのか？

キャプテンどんどん用具持つてきてるし……

あの人前からやりたくてウズウズしてたんだろうな。

うん、そりにちがいない。

きっとゲームにしたらマジドサインティーストになるだろひつな。

「どうした？ 始めるぜ」

「あ、はい」

「今からバットとグローブを渡す。俺がボールを投げるから赤い玉

だつたら打て。

白い球なら捕るんだ

「わかりました」

さて、と……あれは……白一

打つ  
捕る

「おー、白の時はほとるんだー！」

「す、すこません！」

「あ、気を取り直して……赤！」

打つ  
捕る

「おい、赤の時は打つんだ！」

「す、すいません！」

その後も何回か続いた。

「結果は……三十球中十八球！まだまだ練習をする必要があるな  
「今度は別のメニューをするんですか？」  
「ああ、そうだな」  
「後……ひとつ質問していいですか？」  
「なんだ？」  
「これ……役に立つんですか？試合中にバットとグローブ同時に持つ  
」と無いですし……」  
「……」

沈黙が続く。

まさか…」Jの人なんにも考へてなかつたのか…?

「西園寺」

「は、はい？」

「それを決めるのは俺じゃない。いつかはJにがきつと殴り立つ日が来るだろ。」

だから今田の感覚を忘れるんじゃないぞ」

「は、はあ…」

「それじゃあな」

スタスター…

本当になんにも考へてなかつたようだ。  
しうがない、俺もそろそろ寮に戻るつかな…ん? あれば?

ブンッ…ブンッ…

「ん? どうした? 西園寺。俺の素振りなんか見て楽しいのか?」

「いや、そういう訳じゃないけど。もつそろそろ練習の時間終わりだぞ、越後」

「俺はもう少し練習するぜ。早く上手くなりたいからな。どうだ? 一緒にやらないか?」

「うーん…」

正直疲れてるけど…Jにいつといひで頑張ってるからJにひは野球  
うまこのかな。

「俺もやうせてもひひよ。早く上手くなりたいからな。」

「やれやれだぜ」

「なんで俺今やれやれって言われたんだ？」

「まあ、いいからやるわ！」

なんなんだか…

「俺と一打席勝負しないか？」

今、俺はマウンドに立つて立てる。

俺は球を投げる。越後がバットを振る。そのバットは球の少し下を行き、空を振った。

なまじうつこいつと云なつてゐるかと云つて、始まりは越後のこの言葉

だった。

この言葉に俺はＹＥＳと答え、コイツと勝負することになった。

俺は一球目を投げる。球は大きく外にいった。

（やつぱりこれくらいじゃ振つてくれないか：）

俺の持ち球は140km前半のストレートとスライダー、決め球のカーブだ。

正直に言つと、中学の時に他の学校から推薦が来てい、投球には自信がある。

推薦蹴つて、この親切学校にはいったんだけど。

1ストライク1ボール：

俺は三球目を投げる。今までのストレートとは違い、少しスピードを緩めたカーブだ。

「くつ…」

越後はタイミングがずれたようだ、またもバットは空を振った。

「さすがだな、西園寺…けど…勝つのは俺だ…」

四球目、五球目と投げる、が全てストライクゾーンには入らなかつた。

2ストライク3ボール…！

「これでラストだな…越後…！」

投げる。もちろん、ど真ん中直球だ。越後はそれを捉えた。

が、当たり所が悪かったようだ。

打った球は真上に飛んで、落ちてきた。

「キャッチャーフライ（捕飛）だな。この勝負はお前の勝ちか… や  
れやれだぜ。俺ももつと練習しなく  
ちゃな」

「勝つたからボテチくらこは奢つてくれよ~」

「う… やれやれだぜ」

購買に行つたらポテチが売り切れてた。

越後が代わりに買つてきたお菓子は非常に辛いお菓子だった。

あいつは口をつぶつて買つてたから選んで買つたわけじゃ無いんだ  
が…

俺が辛いの苦手と知つていたのか？ 嫌がらせだろこれ…

あのお菓子は畠田にあげた。そしたらいきなり一氣食いした。すげえ。

## 第7話 「緑の髪の女の子＝トラブルメーカー？」

今、俺は屋上に向かつて歩いている。  
あそこは人が来ないし、風も気持ちいいし、休むのにうつてつけなんだよなあ。

今日は基宗さんがキャプテンになつてから数日後だ。

「はあ……疲れた……ん？ 前も言つてなかつたか？」

そして、ここに来てまずやることは一つ。あの人影いたりしないかな…と見ることだ。

「いたよー。」

あの森の人影は緑色の髪の女子だったのか…ん、どんどん森の奥に進んでいくな。今日は練習休みだし…ついててみるか。

「では、こいつできますよ」

ガチャガチャ、バタン

ふうふ。この森の奥に旧校舎があつたのか。

アイツはこの旧校舎の裏にある扉を通して出て行っちゃつたけど…

「たぶんこれ、外につながつてゐるだろ? なあ…確かめてみるか」

扉のドアノブに手をかけて、回す。

あ、あれ? 回らないぞ?

「これ、カギかかつてゐるー?」

え、じゃあアイツどうやつてここに通りつたんだ?

まさか、この学校の理事長の娘で、このカギを持つてたとか…  
いや、それだつたら正門からでるか。

「どうしようか…」

けどまあ、アイツも長くとも3時間くらいで帰つてくるよな。  
個人的にはボールの恨みもあるから、この扉を開かないよつこして  
封印して  
やりたいけど…

それじゃこの扉をひきひきって開けたとか聞けないし、何だか面白そうだ。

「ふいー、疲れたよー。今回ばかりは遠出だつたから、帰つてく  
るのにもひと苦労  
ですよ。けど今回は大量に買つてしまつたー。これならしづかへ町に  
いかなくてもいい  
でしょー。」

「おい…」

「え、え、誰ー？」

「いつたい何時間待つたと思つてー。もう夕方ださ。帰つてくる  
のが遅いんじや  
ないか？」

「…」

「にしても、このドアの鍵をお前なんで持つてるんだ? セレヒくん  
…ん?」

「これとこの荷物を持って、そこに立つて  
「い、こつか?」

カメラで撮られた。

「え？」

「はい、証拠写真。これであなたも共犯者ですよ」

ちよ、おまー？ しかもドアの位置がいつの間にか俺の後ろに！？

「私の写真は無いのでもしろ首謀者として扱われるかも」

「ひ、ひでえ～」

「では、手に持ったものを返してみる」

「は、はい」

「私は高科

たかしな

奈桜。

皆からはナオって呼ばれます。あなたは？」

「西園寺…」

「西園寺君ですね、覚えましたよー…ようじくねー…」

「あ、ああ

「じゃあ、失礼します！」

スタスタ…

も、もしかして俺はとんでもないやつと知り合になってしまったんではないのか？

よろしくって、何なんだ？ 何をだ？

……

「むついい、帰れりつ…」

「ああ…」  
「どうしたんだやんすか？」  
「いや、少し前になんかとんでもないやつと知り合になってしまつたんだ」  
「それって誰でやんす？越後でやんすか？」  
「いや、越後もとんでもないけど、越後じやなこよ」  
「あ、いいかでやんす。それじゃあ先にグラウンドに行つてゐるやんすよ」  
「ああ」

ホントにあいつはなんだったんだ? 今度また聞いただくなへりゃならないな。

会えたらだけど。

「西園寺、先に行つてゐるぜー。」

「ああ、越後」

「西園寺君ー先に行つてますよー。」

「ああ、田嶋」

なんでみんな俺に声をかけるんだ?

「西園寺君ー先に行つてますよー。」

「分かつた、つてちよつと待てー。」

ガシツ

「アウツー!」

「高科、なんでお前がここにこるんだ?」

「ここは廊下ですよ。生徒がいても問題はありませんです」

「いや、問題だらけだからな。女子生徒がここにこるのはおかしいからな」

「いやー、堂々としてればバレないもんだねー」

なんでここにこつばれないんだ?

「そればせうと、なんでここにこるんだ?」

「男子校舎の中は女子生徒も興味津津ですからね。そんな彼女達に真実を提供するため、

正々堂々こいつそり忍びこんでるわけですよ

「正々堂々と、こいつそりつて言葉は普通同時に使わないからな」

「それで、西園寺君は私の味方ですか？それとも敵ですか？」

いや、敵にきまつてゐるだろ。

「俺がトラブルメーカーの味方をしたところで何か俺に得があるのか？」

「むむつ敵なんだ！ならばこひこはあなたにも共犯になつてもうう必要がります！」

はつ？

ガシッ！

「おい、俺は練習があるんだ！離せ！」

「いえいえ、こんな面白い事は他人と共有しなくてはいけませんから」

「お前は何をいつているんだ！？」

スタタタタタタ…

やばい、練習に遅れてしまつ…あ、あれは大河内先生！

「おい、お前ら廊下を走る…女子生徒？そこの一入止まれ！」

スタタタタタタ…

「そんなこと言われて止まる西園寺ではないのですよ！」

「俺の名前を出すな！」

「なに、西園寺だと…」

「違います、先生誤解です…」

本気でやばいと思しながら高科を見ると…ワックスを持っていた。

「ワックスアタック！」

「うわ、こいつワックスぶちまけやがった！」

「ぐわっ…」

ツルッ！

「せ、先生えー！」

「あはははははは…」

「笑つてる場合じゃない！俺を巻き添えにするな…」

「あはははははは！次行つてみよー…」

「行くなあー…」

もちろんこの後怒られました。なぜか俺だけ。高科は逃げ切った。  
くわ…あいつめ…今度会つたら覚えてろよ…

## 第8話 「やつしょ場所が「ひひひ」変わるから題名付けて」

「おー、西園寺」

「はい、何ですか監督？」

「少し他の学校に行って偵察についてくれ」

「はい、分かりました。」

とこうじで、俺は今、荷田君と他の学校の偵察に行ってい。もちろん偵察というのを、相手の野球部のHースとかの弱点を探つたりすることだ。

「ホントにバスで片道1時間は長いでやんすね  
「ううつて交通は不便だよな」

どうでもいい話をしながら他の学校を見学しに行く。にしても久しぶりに外に出て見たら全く知らない製品とかニユースが流れてる。

…たつたの数カ月で町つて変わるんだな。

「おお、これは最新版のアニメのフィギュアでやんすー早速買つで  
やんすー…」

「…」

荷田君は楽しそうだ。

近くの栽培高校や、タクシー高校などの情報を分析する。

けつじゅめんせじせいな。

にしてもタクシー高校か。レーシングの授業とかあるみたいだけど、なんか楽しそうだな。

「おこりもやつてみたいでやんす！」

「どうやれば俺は考へてることが顔に出やすこうだ。…いや、むしろあつちの洞察眼がおかしいのか？」

「とりあえず一通りの学校の偵察終わったな」「おいら、少し買いたいものがあるから少し寄つていいでやんすか？」

「だめだよ、一本バスに乗るのが遅れたら次のバスまで時間がかかるから」

「仕方ないでやんすね…ん？奥から来るのは…天道じゃないでやんすか？」

確かに天道だ。しかも彼女を連れている。なんともムカツクやつだ。

「…よつ」

「うん？誰、君たち？」

「…お前の敵だ。前戦った親切高校の生徒だよ」

「覚えてないなあ。最近結構試合したし」

「俺は試合に出てなかつたからな。俺は西園寺 卓弥だ、覚えておけ！」

「そんなライバル宣言されても。俺そういう事何回もされたるからいちいち覚えられな

いんだよ。」

「ねえ、天道君。もういきましょ？」

「ああ、そうだな若菜。それじゃまたいつか、新月高校の人！」

スタスター…

「…新月高校じゃなくて親切高校でやんす。隣にいたのは彼女でやんすよね？羨ましいでやんす…」

「あいつ、甲子園に出てのテートとはいい御身分だな」「ホントでやんす！」

そうして、俺達はまた歩き出す。

まあ、そうしてバスに乗ったんだけど…

「なんでお前がここにいるんだよ！」

「まあまあ、いいじゃないですか。ナオっちも少し外に出でたんですよ」

高科の奴が一緒に乗つてやがった。

「せういえば、お前ってなんでおそこの鍵を持つてるんだ？」

「あそこってあの旧校舎の扉のことですか？」

「うん。やっぱりあそこ旧校舎だったのか…」

「まあ旧校舎のことはまた次回話すとしましてですね、あの扉はナオっちが偶然見つけた物なんです。」

「偶然？」

「うん。 じいじが偶然あんな扉を見つけたのか。 なんとも運がいい奴…あれ？ それでもあの鍵のことば説明がつかないぞ？」

「うん。あの扉は偶然見つけたんですよ。扉の鍵が腐つてて普通に通れたので、ナオっちが新しく鍵をつけなおしました。」

「つけなおした？」

「やつだよ。血狂であるよ?『工作が上手いんだな、ナホ』って書つてくれてもいい

レバテクニクス

「相棒か使いたいっていながら貸してあげてもいいですよ」  
「誰が相棒だ？」

勝手にこんなトラブルメーカーの相棒にされてたまるか。

「まあ確かに使つたら退部になれそうですね！」

なせ書ひながら言う? そういえはお前は何部なんだ?」

そのことを指摘すると、

「そんなことせんじだつにならぬでよー。」

堂々と言われた。

まあ、セーラー服の話題で話すのが嫌だったので、高科と別れた。

数日後。

「夏の甲子園一回戦、星英高校勝ちました！」

テレビです。

「ちっ、やっぱあいつ強えな」

「そりゃそうでやんす。あつちは超高校生球のピッチャーでやんすからね」

宮取と荷田が話す。

あいつ…そのまま甲子園優勝とかしないよな？

「そりゃあれば高科、お前天道相手にライバル宣言したんだろ？」

「え、田島、誰からそれを？」

「おいらでやんす！」

荷田君……口軽いな。

「当たり前だろ！あつちが超高校生だからと言つて、相手は同じ人間なんだ。戦う前から

“どうしてどうあるーー”

「…すげえなお前。けど、お前の嘘うそとまつともだ。よし、俺

も今日から

天道のライバルだ！」

「俺も俺も！」

「田島に越後…」

（なんか俺が天道に認められたライバルってことになってるけど…  
まあいいか）

部屋にて。

「ハア～」

「どうしたの、荷田君？」

「いや、一回外に出るといこうと買いたいものが増えるでやんす

「例えば？」

「この本を見てくれでやんす」

そうじつて本を見せられた。

「あ、これは知つてゐるぞ！ガンダーロボだろ？あれ、けど、なんか少しちがくないか？」

「これはガンダーロボはガンダーロボでやんすけど、ダイナミック  
ガンダーロボなんで

せんす!

「だ、だいなみつくガンダーロボ?」

「それでせんす！普通のカンターラボと違つてあります……」

わ 分かっただから！ほ 他には？他には舒しいものないの？

「ウダマーユラ?」

なんだそれ。  
それは始めて聞いたぞ？

「アーティストの才能」

「も、もう分かつた、分かつたから勘弁してくれ！」

なんだ、もういいんでせんすか?」からかが楽しいと、るなのに

「お、俺は別に楽しくないんだが…」

「やうでやうすか？まあもひつねつとくらい話につきあつてくれ、

二二

ダレカタスケテクレ――――――――

## 第9話 「大江と神条」

特にやる「」ことがないから森を「」つらつらと見る「」とした。  
ホントは「」で自主練習とかやるべきなんだろ「」など、なんかやる  
気になれないしなあ。

「うん、空氣がおいしい」

学校の中と「」え、ここは森。

空氣がおいしいことに変わりはない。

最近は高科のやつに振りまわされていたからな。

「…あいつ狙つてやつてるんだじゃないか？」

気のせいだらうとは思うけど数が数。

バスの中で会えば、男子校舎の中でも会う。

あれ以外にもなぜかあいつは野球部の部室で会つたりした。

しかも今の所100%の確率で最後に大河内先生が来ることになる。

「トラブルメーカーが自分でトラブルを引き寄せでどうあるんだか」

そういうえばここから辺つて大江のいた場所の近くだつたな。  
ちょっと寄つてみてもいいかな… いるかどうか分からぬけど。

テクテク…

「？」

おかしい、急に警備犬がこなくなつたぞ？

「キャウン、キャウンー！」

！

犬の鳴き声だ！

何事かと思い、鳴き声のした所に向かつて、

「おまえ新入りやろ？まだウチに向かつてるのは100年早いわ  
！」

犬の足を持つている大江と、足を持たれて空中で宙ぶらりんになつてゐる犬がいた。

そして大江と目があつた。

「…」  
「…」  
「キャウンー！」

どいつよ。

ものすゞく氣まとい。こんな時どうすればいいんだ？

親や学校からこんな時どいつしろと畠わなかつたぞ。

おい、学校。これからりゅあんといいつこいつ時の対応法を教える。

「や、やあ大江。」機嫌麗しゅ「…」

「あ、あはは…」

「キヤウン！」

「ど、どりあえずその犬を、離したら、どう、ですか？」

なんか敬語になつてしまつた。

「あ、う、うん」

パツ

急いで犬が逃げる。さすがにあれは警備犬も逃げるな…

「お前、普段からこんなことしてるとか？」

「いや、そういうわけじゃないんやけど…」

「ふーん…」

「そ、それはそうと、今日ほんとに向しに来たん？まさかウチに余  
いに来てくれたん？」

「まあそつこいことにしておくれよ」

「あはは、嘘でもこつてくれるとつれしいなあ。けど、そんなこと  
言つたら彼女悲し  
むで？」

「俺彼女いないんだけど」

いたら他の人に血漬じてるし。

「えーっ、こないん?なんだ、いると思つたわ」

「どうせどうみてそう思つたんだ?」

「いや、なんとなくやナビ…なんかいそうやつたから」

彼女いない歴=年齢ツス。

「で、ここにきててくれたのはいいナビ、なにもあることないで?」

「いや、単に空氣とか吸いに来ただけだから」

「あ、そんなん?まあ確かに空氣はおいしけビ…警備員さんとかに見つかるリスクとか

考えてないん?」

「やつこいつ詰じやないんだけどな

まあ確かにここに来れるまでに何回も見つかりかけたけど。

「それに、ウチ、実はな。こいつもここに来てるとばれてて、たまに自治会が

やつてくんねん

「自治会?」

「あれ、あんた知らんの?」

「教室にいるときほほとんど寝てて聞いてないんだ」

「まあ、簡単にこいつと、風紀の取り締まりつちゅーひとやな

そんのがいたのか。

「やつこいつは普段白い制服着てるから…分かった?」

ああ、あこつらか。あのこちこちころなことに注意していく奴ら

か。

あいつらが何で一回かりたくなつたんだけ... セーフティとか。  
ん? あれも自治会の奴らかな?

「なあ、大江?」

「ん、なんや?」

「あれ自治会じゃないのか?」

「ん...! あれ紫杏やないか! あんた、あつちで隠れとけ!」

「お、おひ!」

急いで隠れる。紫杏? いつたいどんなやつなんだ?

スタスタ...

「や、やあ紫杏」

「またいるのかカズ。あんまり」に来るなといつてんだろ?」

あいつカズって呼ばれているんだな。

「でも校舎で身体振りまわしたら怒られるし...」

「それは絶対やらないといけないのか?」

「いや、そうじゃないんやけどさ...」

「まあいい。それよつさつき男子生徒が」にまぎれていなかつた  
か?」

「い、いや、気のせいぢやうん?」

「せうか、それならいいんだ。それじやあ私はもういくぞ。あと、  
その男子生徒。

お前もあんまりここに来るんぢやない。たまたま見逃してると、次  
はないぞ」

バレてんのかい。

「紫杏行つたからもう出でてもいいと黙つで?」

「…見つかつてたからあんまし意味無いと思つけどな」

「けど顔はハツキリと見られてないから、まだいんやない?」

そ、そういうものか?ハツキリ見られなかつたらセーフつて…

「とりあえずあの紫杏つてやつは何者なんだ?」

「紫杏のこと?アイツは生徒会のトップやつとるんや。男女で校舎が別れてるから、女子の生徒会トップハツヒになるな。ウチらと同じ一年や。あ、そういえばアンタにまだ私のこと一年つて言つてなかつたっけ?」

「そういえば言つてなかつたな。雰囲気でだいたい分かつたけど。この身長を生かしてバスケとかバレーすればいいのに。いや、すでにもう勧誘されて入つてるか?」

「それで、本名は神条 紫杏。私の数少ない友達や」

「お前あんな堅物そなのが友達なのか。見た目でいつたらアイツの方が友達少なさうな気がするけどな!」

「それ、私の前で言つた?実はウチ、そんな氣い長い方じやないね

「んで?」

「す、すまん」

「ええ、ええよ。武術やつてて185cm、そんな奴の脅しは怖  
われる。

「まあえけどな。紫杏が生徒会に入った時、作業をするときに力  
仕事をする人が  
いないのに気づいたらしいんや。それまでは先生がやつてくれた  
らしきんやけど、

それじゃダメだと紫杏が言つたらしくて、私が手伝つてになつた  
んや」

「その時に仲良くなつた、つて事だな」

「いや、その前から森で知り合つてはいた  
「で、生徒会の関係で仲良くなつた、と」

「やつて」と

森での出会いから発達した友情…なんだそりや。

「あと、お前つてそんなに友達少ないの? いつして話してる分には  
そんな友達が少ない

ように思えないんだが」

「いやあ、この身長といつもはつちやけてるせいか、あんまり女子  
とは仲良くなくて。

でも、男子とはホントは話すの苦手なんや」

そうなのか? いつして話してると普通に見えるんだが…

実はホントの一番の友達は警備犬…ゲフングフン、こんなこと考  
えてるのがバレたら

大変なことになりそうだからやめておいつ。

「で、なんで男子が苦手なんだ？」

「え…それ言わなくちゃあかん?」

「いや、別に言いたくなかったらいいんだけどな。ただ的好奇心だよ」

「好奇心は猫を殺すつて言葉、知らんの?」

「そこで使う言葉なのか、それ!?」

え、なに、俺殺されるの? ゆっくりしんでいいでね、ついてことなの! ?俺! ?

「まあそれは冗談としてな」

「冗談にしてはタチが悪いぞ…」

「ならアメリカンジョーク」

「言葉を換えても意味が変わらなかつたら一緒にだろ!」

「まあええからええから。実はウチ、昔武装した高校生数人に襲われたことがあるんや。

生意気だからつて。それで大怪我して、一年間入院。これでも、あんたより一年上なんや

で?」

「そ、そんなことがあつたのか…」

あつと中学生で女不良集団のトシップとかだつたんだろ? うん、そうにちがいない。

「あ、いつとくねじウチが小6の頃の話やからな?」

「…」

ちょ、ちょつとここつに対する考え方を改めないといけないようだ。そんなに怖いやつだったのか。まあ…普通に話してると、普通に話してる時はただの面

白いやつなんだけど。

「あ、それじゃあウチ桧垣先生に呼ばれてたから行くわ」

「え、桧垣先生って男子の方の先生なのか？」

「さすがに先生は男女共通やから…」

「そりだつたのか…」

「それじゃあ、ウチもういくわ」

「ああ」

桧垣先生ねえ…ん? なんで怪我もしてない大江が呼ばれるんだ?  
やつぱり超能力者…そんなことはないな。

今日も森にやつてきた。

昨日、大江と別れるときに「明日はウチ！」でおらんと、言つてたので、

俺が森をハナハナの理由は別にある

それじゃあなんで俺が森をうろついているのか。  
もちろん女子寮……ではなく、外に出るためだ。中じゃ暇なので。

テクテク

獸道を歩く。しばらく歩くと、壁が見えた。

「さあ、とにかく高いところへはいきません」

壁にたどりついた俺は、その壁を見上げた。  
うん、やっぱ高いな。3mは軽くあるかな?

え？ なんで高科の作った扉を使わないか、だつて？

やつぱり自分の力でやらなくちゃね。

で、まあ本題に戻るけど、ロープとかいろいろ持ってきたから、なんとか登れそうだけど…

「おお、外に出れたぞ！」

まあ実際こんなことしなくても偵察とかで外出はできるけど。  
今回は完璧フリーだからな。

おつと、大声を出したらせつかく出れたのに警備員さんに見つかってしまう。

## 一応、周りを見て：

11

やばい。外国人っぽい方にめちゃくちゃ見られてる。

備英語の成績1なんだけど  
ちなみに学年最下位から2番目  
最下位は越後。

「あ、はい……」  
「もしもし、アナタ、この学校の生徒ですか？」

よかつた、日本語喋れるんだ。しかも発音も上手いし。

「Wow!」」れはラッキーです。私、フリーの記者で、竹内ミー<sup>ナ</sup>、  
いいます。

この学校を調べたくて、ここに来たなんですが… 入らせててくれなくて困つてたんですね。

：協力してくれますか？」

こ、こういう時協力しなかつたらマズくなるような…  
けど、こういうときって法律的に大丈夫なのか？

「車で町まで送つてあげますよ?」

「よろこんで」

移動手段は必要だもんね。

え、法律？なにそれ、おいしいの？

「それじゃあ」の車に乗つてトヤー

はい

0

「私、悪い人にみえますか？」

いや、全く見えないけど。むしろ天然つて感じがするな。いや、猫を被つてるだけとか？

「まあ、いいか。俺は西園寺 卓弥。親切高校一年です」

「それじゃあ一つだけ質問します。…あ、簡単な質問ですよ？」

「え、一つ？」

「ハイ」

「一体この人は何しに来たんだ？…たつたのひとつで意味あるのかな？それに俺が答えられるかどうかも分からないのに。」

「「」の学校をどう思いますか？」

「ずいぶんとアバウトだな。

「ずいぶんとアバウトですね」

おっと、声に出してしまった。

「なら、もう少し具体的に。「」の学校での生活は楽しいですか？もし、困つてることどうあつたら聞かせて下さい」

田島の暗い顔や、越後のあた…ゲフンゲフン、うん、学校のことだつたな。

「特には無いんですけど…」

「本当にですか？」

な、なんかこいつ、本当にへって言わされたら怖いな。

「い、いや…あ、そうだー交通の便が悪いのと、情報が外から中々入つてこないことが

ちょっと」

「それだけですか？」

「ま、まだ！？」

「ま、まあこれくらいです」

「そうですか、ご協力感謝します」

「そ、それだけでいいんですか？」

「ハイ」

なんだ、もつと学校の細かいこと」今まで聞かれると思つたんだけど。

「そういえば、なんでこの親切高校のことを取材してるんですか？」

「取材、とは違うんですけど、実は事件がありまして」

「じ、事件…？」

「そんなのあつたつけ？」

もしあつたら、俺ら知らされてるんじゃないのか？」

「まあ、時間が少ないので細かい」とは言えませんが…」の学校、おかしい、思いませんか？」

「え、どこが？」

特に不自由はないんだが。あ、男子寮と女子寮が別々になつてると

ことか？

「気づきませんか… わたしも、情報量が少ない、言つてしましましたよね？」

「あ、はい」

「実は情報が外に来るのも少ないんです。確かに、学校のホームページや、政府に送つている情報は正しいんですが… 必要最低限のものしか送つてないんですね」

そ、それって… どうこうことだ？

分数のかけ算が理解できない俺にとつて、これは理解してほしいぞ。

「だから私が一部調べたんですが、この学校、内部におかしい空間があるんですよ。しかも、普通は行けないような所に。」

「……」

「しかもこの学校、町と遠いせいであまり政府は関心せぬ、ヘリや船までこれるよう海岸も近くにあつたりする。最近はオオガミとジャジメントといつ会社が戦争とか

していますが、この学校はそれに関わっている可能性があるんです」

えつと… どうこうことだ？

「それのせいかどうかは分かりませんが、実は5年前位にここで行方不明者がでてるんです。できればその人たちのリストとかも欲しいんですけど… 西園寺さん、頼めますか？」

そういう所には間違いないとつたリストがあるんです

「お、俺！… はい、出来る限りのことならまあ手伝います

なんの話かよく聞いてなかつたが。

「 もうですか。おつとんちんじんへんでおひじんをあましょ。」

それじゅ、

また後日あらへ伺います」

「 分かりました」

やつまつて、俺は車を降りた。

…何の話か分からぬけど、まあいじ最近の生徒のリストをもういふ  
ばいいんだな?  
ま、それより今は、

「遊ぶや——つ——」

寮に帰つた後、たまたまゲットしたガンダーロボのフイギュアを荷  
田君にあげたら

めちゃくちゃ喜んでた。お礼に200ペラくれた。そんないいも

の  
だ  
つ  
た  
の  
か  
な  
?

（補足）

きっと原作とは違つかもしれないけど、そこはあしからず。

### 野球部関係

主人公…野球の腕はそこそこあるヤツ。ただ、高校に入つてからはゲームをする人の手腕しだい。とにかく頭が悪い。高校生で因数分解が出来ない。

荷田君…野球部の中では頭がいい方。学年でみると平均的。メガネをかけていて、主人公ととても仲がいい。あと忘れてはいけないのが非常にマニア。

越後…野球部の中で一番バカ。学年でも一番バカ。どうやって入試に合格したかは謎。なぜか野球のルールは細かいところまで覚えている。野球センスは素晴らしい。やれやれだぜ　が口癖。

田島……顔が暗い。頭はいい。野球は上手い。……それくらいしか印象ないなあ。

岩田……いつも腹をすかせている、大きくて馬鹿なヤツ。食べ物をくれる人には誰にでもついていく。パワーがあるから野球では頼りになる。

官取……嘘つき。学力は普通。いいかげん学力で判断するのやめようかな。嘘つきといふか、ほら吹き。ただ、努力家ではあるので実力はある。ていうか一粒一万円の飴つてなんなんだよ…

北乃……先輩1。実家は相当金持ち。ゲーム中ではいろいろ邪魔してくる。布団には落書きするわ、缶を投げてくるわ……、とにかくうざい。

基宗……先輩2。主人公で色々実験してくる。ほんとやめてほしいぜ・・

飯占……先輩3。元キャプテン。名前が「いいじめ」だからどんな性格かは解るはず。

## 補足2

第九話までの出てきたキャラまとめ。

主人公…補足1を読め

荷田…補足1を読め

越後…補足1 (r y)

岩田… (r y)

田島、かんど (r y)

先輩方 (r y)

大河内先生…30代後半くらいの熱血教師。主人公たちのことをよく見てくれる人気のある教師。主人公たちの担任でもある。

車坂監督…と同じくらいの年なのに、こつちは40後半に見えるルックス。老けてる。相当熱血。

母…主人公の母。…それ以外に説明欲しい?

桧垣先生…変な髪の毛の形をした変人。全てを科学的にみる。恋も

科学的に調べた。他にもいろいろやつたがまだ言つことができない。

大江 和那… 槍が大好きで、ケンカしたら大の男3人くらいには勝てる。3年生には身長が伸びて、190になっちゃうよ。ちなみにパワポケ10以降の作品では普通の軍隊に勝てるほど強くなっている。

神条 紫杏… 頭も賢く、判断力もあるが、予想外の事態には弱い。このようなことから大物になるのだが…俺の作品ではどうなることやら。登場回数がふえたらしいね。しあーんと調べると結構件数がある。

高科 奈桜… スーパートラブルメーカー。自分でトラブルを作り、引き寄せる。常に落ち着きが無く、好奇心を携帯して。緑色の髪だが、パワポケでは普通。結構俺の好きなキャラ。こいつの登場回数は増えるだろう。にしても名前読みづらいよね。最初何て読むか分からなかつた。

食堂のおばちゃん… 登場回数はたぶんこの作品では1回だけ。

天道… 超高校生級の最強ピッチャー。最高球速Max162キロ。それ、日本最高記録じゃないの？監督は変化球は曲がらない、とか言つても、3球種も投げれるから。そもそも打撃センスだけでもヤバイから。本名は天道 テンドウ 翔馬 ショウマ。

の彼女… 本名は御室 みむろ 若菜 わかな。かなりの美形。今の所はこの説明だけでいいや。

## 第1-1話 「俺と悪夢の練習」

とつあえず、ミーナちゃんは生徒のリストがほしにって言つてたけど…

一体どうしたらいいか俺には見当がつかないな。  
校長にでも頼んでみるか？まあ無理だろうけど。

「おい、西園寺。練習行こうぜ！」

「ああ分かった。今行くよ」

またあとで考えるか。別に今じゃなくてもいいわけだし。

「あの…」

「ん、何だ？」

「またあの練習をやるんですか？」

「いや、やる内容は別だ」

また俺はキャプテンと一緒に練習をする羽目になつてこる。

……今度はひりやんと考えてこるよな？

「今日は他の学校の練習メニューを参考にしてみた」

「あ、それなら大丈夫ですね」

「ああ、ぬかりはない」

なんだ、まともね？じゃないか。

前言撤回。どうしてこうなった。

まず、手首におもりが入ったリストバンド。

足にタイヤをつけて手にいろいろ持たされている。

「それからうわさ飛びでグラウンドを回るんだ」

「本気で言つてますか」

「あたりまえだろう」

本気で何考えてんだ。

「あの……」れつて本当に他の学校の奴を参考にしたんですね？

「ああ、もういるんだ。まあ一部はそのまま採用をせてもいいたがな

全部だる。」  
「絶対全部だる。とりあえずやるしかないのかなあ……

つてなんか  
音が聞こえないか？

グルルルルルル……

この森でよく聞くまるで警備犬のよつた声……

「あと、俺のアレンジも一つ加えさせてもらつたぞ」  
「ま、間違いなく先輩のアレンジってあれですよね？」  
「ああ、知らんな。それじゃあ始めるぞ」  
「え、ちよ、知らんなつて！それに始めるつていわれてもまだ準備  
が」  
「もつ犬が追いかけてきてるが？」

「」  
「」

「無理だあああああ……」

「あ、こらーちゃんといつぞ飛びで、持つてる物を離すなー。」

むちやを訴つた！あ、もつ犬がそこには……

「少しお前には厳しかつたか」

「あんなの誰にでも無理ですよ」

「わつか? 越後あたりなら普通にこなしそうだが

俺と越後をいつしょにするな。

それに越後でも無理だつ。無論、頭脳的な意味で。

「それじゃあ、こいつの練習法も試しておくか」

「え、まだあつたんですか?」

(こ)の人ホントに暇人なんだなあ……)

「キャプテン、西園寺君がキャプテンのことを暇人だと思つてゐるで  
やんす!」

「わあ、荷田君一体どこから來たんだ!」

「……荷田、それは本当か?」

「本当にやんす! オイラは西園寺君の考へてゐるこどが分かるんでや  
んす!」

「西園寺……」

「そんなことは考へてません! 荷田君が勝手に考へてゐるだけで  
す!」

思つてはいたけど……そんなこと言へるわけないだろ?。

「なら確かめるか。ここに × が書かれているカードがある。

西園寺に引いてもらつから荷田は何を引いたか当ててくれ

「分かりましたーでやんす

いや、さすがに荷田君でも無理だな。しかもだんだん練習関係なくなつてゐるし……

まあいいか、これを引いて……あれ? 「?」?

(キャプテ  
(監つなよ?)

? じ。なんかセレーニカ? こんなのが分かるわけ…

「キャプテンもひどいでやんすな。ひいたのは? のカードでやんす!」

「せつ、俺がよく他のカードを渡した」と云つたな  
「相手が西園寺君でやんすからね」

結果・俺の弱点=荷田君。

「つまり西園寺は俺を暇人と思っていたわけだな?」

「つづー、それはそうかもしねないですけど……そつだー早く新しい練習を

試しましょ!」

「話を逸らしたな」

「話を逸らしたでやんすね

グッ……

「それじゃあおこりは練習もじるでやんす」

「ああ、しかつてやれよ。……西園寺」

「は、はこつー」

「さつきの件は後で話す。それじゃあ次の練習はこのイヤホンをつけてくれ。」

「これですか？」

得になんにも聞こえないぞ？いや、なにか聞こえて

（お前は野球が上手くなる）

（お前は野球がとても上手くなる）

な、なんだ？一体何なんだこれは？

（お前の周りはライバルだ！）

（お前は野球の練習がしたくなる！）

や、やばい。半分洗脳じゃないのかこれ！？

（お前は～）

（お前は～）

（お前は～！）

（お前は～！）

こ、これ以上はマズイ！

そう思つて俺はイヤホンをはずした。

「あ、まだ終わっていないのにイヤホンをはずしてはダメだろ」

「これって洗脳じゃないですか！」

「何言つてる。これは俺が考えた練習法、催眠式の気合注入法だ」「催眠式の時点でダメじゃないですか」

なんでこの人はこいつこいつとしかできないんだらうか…

もつともとみな練習は考えれないのか？

「とつあえず今日はもう帰りますよー疲れたし」

「ああ、練習はもつ終わっていいぞ。練習はな  
「練習は？」

「そうだ。次はなぜお前が俺を暇人と思っていたかを小一時間聞く  
必要がある。

さあこい」

え、ちょっと……やっぱ怒られる」とになるのか……

薄暗い部屋の中、キャプテンと一緒につて話をした。とても怖かつ  
た。

## 第1-2話 「屋上での出来事」

「せんと。屋上に行つてみるか

最近俺は屋上に行つて身体を休めることが日課となつてゐる。  
なんてつたつて風が気持ちいいし……ん?

「また高科のやつ來てるのか」

「どれ、ちゅうと会こに行つてやるか。  
別に暇だし。

「つて、あれ?」

「アイツビ」行つた? 少し田を離したすき」……

「誰かをお探しですか?」

「ああ。常にカメラとトラブルを携帯していて、落ち着きのない女  
の子を探して

いるんだ。しかも男子校舎で、だ」

「そんな人居るわけないじゃないですか。少し熱もあるんじゃな  
いですか?」

「田の前にいるだろ? お前だお前!」

「私の場合は + 好奇心ですよ」

あ、トラブルを常に携帯していることは認めるのか。

にしても、ここにどうやつてここに来たんだ?  
わざわざまでトにいたのこものす"く速いな。

「ふつふつふ。ナオっちがここにこんなに速くきた」とびっくりしてるかもしだす。

「なんが、ナオっちの隠密術をなめてはいけませんよ」

「なんでだ?」

「実は昔に出会ったプロの情報屋のお姉さんに教えてもらったのです。『ふふふ、筋

がいいわね、ナオ』と言われましたよ」

だれだ、こいつにこんなややこしいのを教えたのは……

「あ、あそこにそのお姉さんがいますよー!」

「ハア!?」

あ、あの金髪でコートを着た人か?ってか、そもそもなんで学校にいるんだ。不法侵入だろ。

「あのお姉さんす」といんすよ。とってもケンカが強いんです。私の目の前で

暴走族を一人で倒してましたよ。素手で

「それ、本当に人間か?……って、あれ?さっきの人どこにいったんだ?」

「後ろにいるわよ」

え?……と思いながら後ろを見たら

そこには金髪の人気がいなかつた。

あれ？さつきの声は高科……でもなく、俺の知り合いにもそんな声の奴はない。

「私はれっきとした人間よ。素手で暴走族を倒したからって人外扱いしないで欲しいわね」

「だ、誰だ！？」

「だから、そのお姉さんですよ」

今度も後ろから声が聞こえてきた。  
後ろを振り向くと

やつぱりいなかつた。

「え、ビームいるんだ？」

だからそこにはいるじゃないですか

ガガの言ひ通りよ  
私はここにいねね

福井市立図書館

この問題は、どうして解くべきですか？

「しおのがほーわな、そろそろ姿を隠せてあがむわー

そういうて、お姉さんと呼ばれる人物は俺の後ろからでてきた。

いやいや、その方向さつき俺が向いていた方向ですよ？

「単にあなたが振り向くと同時に反対側に移動しただけよ」

だからそこにはいつたじやないですか。何を聞いてたんで

ああ、なるほどー……つて、なるかあ！つていつたら、隠密術つて

分かつてゐるけど……

「にしても、この男はあの男と雰囲気が非常に似ているわね」「あの男つて……お姉さん彼氏いたんですか！？」

「違つわよ。確かに好きではあつたけど、仕事の時の固定客だった男よ」

「その人となんで俺が雰囲気似てるんですか？えーと……」

「お姉さんでいいわよ」

「お、お姉さん？」

なんか呼びにくくな。それにこの人年齢いくつ……

「ハハハ……」

「人の年齢を探るのはやめた方がいいわよ？」

「は、はいっ！」

「それで質問の答えなんだけど。そんなこと言われても私は分から  
ないわ。

ただ、野球をやつてバカっぽいところが似てるからかしら。」「  
人をバカっぽいとは失礼な……」

まあ実際馬鹿だからしじうがないんだけど。

「まああなたはデータで見たところ粗鷹馬鹿だつたけどね」

「なぜ知ってる！？」

「ナオから聞いたでしょ。私は情報屋よ。いろんなことを知つて  
いるわ。」

じょ、情報屋つてこわいな。みんなこんなのか？  
むしろこんなことができるなら政府のスパイでもやりやあいいのに。

「それで、お姉さん？」

「なに、ナオ？」

「お姉さんはなんでここに来たんですか？」

「それはもちろん仕事よ。」*ヒ*で調べて欲しいことがあるって言わ  
れたからね。

まあもう終わつたけど

「そつなんですか」

……そだーこの人にミーナさんが言つてた情報を頼めばいいんじ  
やないか？

もしかしたらお金がかかるかもしれないけどさ。

「あ、お、お姉さ　」

「お姉さんならもう行つちゃいましたよ？」

「え？」

撤退するのはやつ！

そ、そういうばここ屋上だよな？　あの人どつから帰つたんだ？  
まさか、飛び降りた……とか。

「それにしても、なんで高科はここに来たんだ？」

「下から西園寺君が見えたので。それと……屋上からの景色からを  
見たかったので」

屋上？上からの眺めを見たかつたつてことか？

「それで、こつから見て分かつたことがあります。この学園にはま  
だナオつちが知らない  
ことがいっぱいあることが分かりました」

「そつか。でも……」*ヒ*は男子校舎つて事を忘れるなよ

何度言つても入つてきそつだけどなあ。

先生たちもさぞ苦労してるだろう。

「そういえば、外に行つてるのはですね」

「まだ何も聞いてないぞ」

「あれ、聞くんじゃないんですか？」

…………やつこいつにじとくか。

「まさか図星ですか？かわいいですね」

「つ、つるとい」

「それでですね、外に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてるのはただ買い物に行つてのは

買い物？そんなの購買でいくらでもできるだろ。」

そこまで面倒なことをしてまで外に買い物に行くのか。

「購買部にもいろいろあるけど、やっぱり外の方が品数が多いし、新商品とかもあるから。」

「それらを買つてきて、寮の皆さんにあげるんですよ。」

「じづかい稼ぎか？」

「違いますよ。寮の皆さんにあげたら、生活が華やかになりますから」「華やか？」

「はー。周りが楽しかったら自分も楽しくなるでしょ？だからあたしが楽しい空間を作り出していくだけですよ」

ふーん。これで扉と鍵のことについて、高科の理由も聞いたからだ  
いたい全部  
聞いたことになるかな。

「どうした？」

高科が周りを見回していたから聞いてみた。

「そろそろあの先生が来るころかと」

「大河内先生が来るのは決定事項なのか？」

「いや、いつもくるから」

まさかそんなわけ

テクテク……

あちやつたよ。しょうがない、高科と隠れるか。

「高科！ じつちにこい！」

「えつ？」

ダキッ

（ちょ、ちょっとー？）

（静かにしてるよ。多分大河内先生もすぐビニカに行くと思つから）

テクテク……

（……）

（こしても本当に来るんだなあ。）

テクテク……

「そろそろ行つたか？お前トラブルメーカーでトラブルを呼ぶ体质なのか？本当に迷惑なヤツ……ん？」

「……」

どうしたんだ？

「おーい、高科？」

「戻る」

え？

「はあ？ ちょ、ちょっと？」

「戻ります、それでは」

「あ、ああ」

タタタタタタ……

せっかく上手くのがれたのに帰るのかよ。なんなんだいittたい……  
けど、なんかビックリした顔してたけど、あれは一体？

## 第1-3話 「秋季大会終了後」

「おー、サーード！打球をしつかりとりやがれ！」  
「は、はいっ！」

現在、ノックをやつしている。しかもとても強烈なやつだ。  
原因は監督がとつてもとつても怒つてるからだ。  
じゃあなぜ監督が怒つているかを説明しよう。

時間は少し戻つて秋季大会。

俺たちは一回戦を勝つて、二回戦の試合の途中だった。  
俺たちは、という言葉を使つたが、やっぱり俺はベンチ外。

「くつそー、こどこそ俺がベンチ入りしてやる」

「ハハハ、悪いな西園寺！また俺と田島がベンチ入りで」

「おい、ベンチうるさい！3年がいなくなつたからつてたるみすぎだぞ」

「す、すいません監督」

「分かつたならいい」

カキーン！カキーン！

「あーあの野郎、俺が田を離したすきに」

「あ、先輩がめつた打ちにされてるでやんすー」

平面高校 6・4 親切高校

「おい、格下に負けるとはどうこうことだ……基宗ー。」

「はーー……油断、してました」

「お前らには本当に愛想が尽きた。ここで一発お前殴りたいが、俺の拳が痛いだけだ。

だから今から全員ぶつ倒れるまで地獄のノックだ！」

「うつこい」とである。

「あ……試合に出でない俺までなんでやられたるんだよ。つと、余計なこと考へてたらHマーしきやつた。」

「おこ西園寺一なにほーつとしきんだー。ノッカー、もつとあこつに強いのを浴びせて

やれ！」

「は、はい！」

（「うつや打つ方も大変だぞ……」）

「あの試合に負けてからずいぶんと練習が厳しくなつたでやんすね」

「仕方ないだろ、あんな負け方したんだから」

「それでやんすかね？おいらにはただのハツ挡たりに見えるでやんす」

「

まあ半分くらいはそうかもしけないけど。

とりあえず先輩の洗濯物などを早く片付けないといけないので、ちやつちやと手を動かす。

すると越後が話しかけてきた。

「やういえば知つてるか？星英が秋季大会優勝決めたんだつてよ」

「あれつもつそんなん日だつたのか？負けると一気に興味が無くなるな」

「越後も暇なんでやんすね」

「来年にそなえて情報収集だよ。全く、やれやれだぜ」

「そついえば夏の星英高校は準決勝で止まつたらしいな」

「そついえばそつでやすね。まあ負けたのは天道がリリーフで出で

くる前に点が

取られたらしこからだやんすナビ」

こんな話をしながら俺たちは洗濯を終え、寮に帰った。

自室に戻つた俺は暇なので他の部屋に遊びに行つてみる」と云つた。そつこええば、俺つて他の部屋の奴の所に遊びに行つたこと無いな……

とつあえず、越後の部屋に遊びに行くことにした。

本題に入るのはいいが、荷田君。お前何教えてんだ。

「何か足が速くなる方法知らないか？」

「足？」

「ああ」

なんで急に足の速さ? ロイシ! そんな足遅い方じゃないだろ。むしろ早かつたはず……

「なんで急にそんな」ときくんだ? お前は十分速いだろ?

「いや、もっと速くなりたいんだよ」

「そうか。うーん……」

といふかそんな方法があつたら俺が逆に知りたいな。  
何か無いかな……あ、そうだ!

「お、何かひらめいたか?」

「ああ。これから語尾にシユツーでつけてみたらどうだ?」

「どういうことだよ」

「なんか速そうじゃね?」

普通に考えたら全く意味分からなーいが。さすがの越後もこれは

「やれやれだぜ、シユツー!」

「はやつー! もうやつ始めてるー!」

言つた通り越後は語尾にシユツーでつけていた。  
そんなので速くなるわけないだろ。

「なんか、足だけじゃなく全てが速くなつた気がするぜ、シコツー。」

「気がするだけだろ。……」

「そんなことないぜー。シコツー。せり見て見る、シコツー。身体が軽いぜ、シコツー。」

シコツー。シコツー。つてひるねこ。教えるとじやなかつた。

「あつがとう西園寺、シコツー。これでしまはらへ練習させてもらひや、シコツー！」

そんなので感謝されるとほ、感謝の重要さが減つた気がする。

「わつこー……俺は帰るわ」

「ああ、それじやあな、シコツー。」

部屋から出た後も後ろからシコツー。つて声が聞こえた。  
あいつ、本当に馬鹿だな。

後日、ベースランニングのタイムをはかつたのだが、越後は逆に遅くなつたらしく。

なんかシコツー。つていつた回数が少なかつたからとか言つてた。

やつぱ馬鹿だな……あいつ。

## 第14話 「森で迷った……」

とつあえず俺は今、森を歩いている。暇なので、大江にでも会いに行こうかと思つたのだ。ところが、

「あれ？ 今日はいないみたいだな」

そう、いなかつたのである。

「なんだ、今日はいないのか……」

しうがないので、この付近を見渡してみる。しかし、ここは地面が固く、周りの木の葉つっぱがちぎり取られている。

そういえば前に大江が言つてたな。

ここで落ちてくる木の葉をつかみ取る……だったか？いや、握りつぶす？

まあそんなところだらう。そして、この硬い地面は強く踏んだ後だらうな。

すじこ練習を重ねているのが良く解る。

「まあ、ここにいても得にすること無こし……もう行くか」「ほつ、一体どこに行くんだ？」

大江では無い声が響く。

この声……前にも一回聴いたぞ。確か、

「神条？」

「む？私は名乗った覚えがないのだが。カズと一緒にいた男子生徒まあ名乗つたど」いか姿も見せてなかつたんだけどさ。いや、もしかして見られていたのかな？」

「なら一応名乗つとくよ。俺は」

「野球部の二二二だらつ？私は監督生だから生徒の名前は知つてゐる。それに

しても、前に私は言わなかつたか？もつこには来るなど」

う。そういうふうしてたな。けどそんなことは気にならない。

「私自身は別にいいんだが、こゝは女子寮の近く。あまつこには来る」とがれ

ば、少し反省してもらわなければな」

「は、反省？」

何を反省するひて言つんだ？あ、テストとか？

「まあ仮の顔も二度までとこづからな。こゝは見逃してやうやく。…」

…にしても君も

不幸だな。私はあの日以来ここに来てなかつたところのこ、君とまた遭遇したからな」

「なにい、じゃあお前は毎回ここに来てるわけじゃないのかー？」

まじかい。俺もあの日以来、来てなかつたんだが……

「本当だつたらすでに規則違反で反省室に連れてかれているぞ。ただ、お前とはなにか古い縁を感じるな」

「なんじゅやそりゅ

古い縁つて何だ。こんなヤツと縁があつても邪魔なだけだな。

「それじゃあ俺は帰るかな」

「まあ待て。一つ頼みがある」

「？」

「一体なんだ？」

「この偉い監督生さんが一般ピーポーの俺に頼み」と?  
しかも男子で全く関わったことのない俺に?

なんかとても嫌な予感がした。

「まあ、そんな悪い事じゃない。実はだな、最近女子生徒が男子校舎とかに忍び込んでいるんだが……そいつを見つけたら捕まえといってくれ。ちなみに顔写真だ」

そう言われて渡された顔写真を見る。

予想はついてたが

(高科じゃねえかこれ!)

「どうした? コイツ知り合いだよって感じの顔して」

「ま、まさか。なんで俺が女生徒と知り合いなんだよ」

「それもそうだな。それで、そいつが最近男子校舎の方に行つて、

カメラで写真を

撮つたりとか、いろいろやる上に、なかなか捕まらないんだ」

そりや そうだらうつな。あんな情報屋から隠密術教えてもらひつているんだもんな。

「ま、話はこれだけだ。悪かったな、手間を取らせて。もうこれ以上会うことがない事を願っているよ」

「つちとして、もう会いたくないよ。

そう願うのだった。

……あれ？俺今どこにいるんだ？

今は夜である。

「ヤバイ、完璧に道に迷ってしまった。こっちはたしか海岸の方だけど、帰り道が分からぬい」

「……」  
「ショウガナイから再び歩き出す。ああ、これは食事の時間に間に合わないか……」

「そんなとき、向こうから人の気配がした。」

（誰か来た！？隠れないと……って間に合わない！）

ガサガサ

そこには、長い髪の毛で、とても知的そうな雰囲気の女の子がいた。この学校の制服を着ているつってことは、この学校の生徒なんだろう。

「なぜ男子生徒がここに？立ち入り禁止のはずだが」

（うつ、やばいぞ）

「じ、実は帰り道が分からなくなってしまったんだ」「帰り道？じゃあ、そもそもどこに行こうとしてたんだ？」

そりやそりや。ここから女子寮は……すぐそばみたいだし。とまあず、今日のことを話してみるか。

「……なんだか信じがたいな。まあ、確かに証拠品も持ってるからホントのことだらうけど」

証拠品とは、神条からもひつた高科の写真だ。いや、なんで返さなかつた俺？今はそのおかげで助かつてるけど。

「セレニに誰かいるんですの？」

「この声は？」

「セレニの茂みに隠れて！」

この女の子に言われて、俺は茂みに隠れた。そのとたん、先生が現れた。

「まあ、天月さん。またあなたでしたの」

「すみません。気分がすぐれないで、夜風にあたりたかつたんですね」

「規則は規則。あなたは成績が優秀なんだから、規則さえ守ればす

ぐにでも監督生

になれるのに」

「すみません」

「だいたいあなたはいつも」

ぐどぐどぐどぐど

がみがみがみがみ

30分が経過した。

説教が長いな……早くどこかに行つてくれないかな?

「つと、こんな説教は後回しです。この森に不審者が紛れたようなので、天月さん、

あなたも早く寮に戻りなさい」

「分かりました」

テクテク……

「もう出てきても大丈夫」

「ふつ、助かつたよ」

それでもなんで俺を助けてくれたんだ?

「俺だけ隠れてしまつて」めん

「気にするな。私はいつものことだから。さつき先生が言っていた  
不審者は君のことだろう？もし君が捕まっていたらとんでもない事になつていた  
「た、たしかに……」

捕まつていたら野球部を退部することになつただろうな。そう考えるとここで助けてくれたのは、本当にありがたい。

「これに懲りたら、もう森の中に入るのはやめといた方がいい」「分かつたよ」

「……それでは」「あ、ちょっと待つて！俺は西園寺。一年生だけど、君は？」

うん、助けてもらつたのに、自己紹介をしないのは失礼だ。

「私は天月 五十鈴。私も一年生。」

そしてお互いやろしく、と言い合つ。  
……笑うとかわいいな。

「まあここは学校は男子と女子が別々になつてゐるから、もう会つことはないかも知れな  
いけど。それでは」

そういつて彼女は去つて行つた。

「それにしても、こんな時間に抜け出して、何してたんだろう？」

そう考えていたら、大変な事実に気がついた。

俺、ビューゼって帰らう。

ガサガサ

また草むらが！？

「あれ、こんな所で何しているんですか？」

「……お前にそ何しているんだ、高科」

トラブルメーカーがやつてきた。なぜここに？

「質問に質問で返すのは良くないと思いますよ。まあいいですけど、私は単なる散歩

です

「嘘だろ」

「よく分かりましたね」

「これが散歩なんてほとんどなさそうだからな。

そもそも夜に散歩はないだろ。

「暇だから男子寮にでも忍び込もうと思つてたんですよ」

「なぜこんな夜に?」

「楽しそうだからですよ。ただそれだけです。まあ、もひめそぢへ  
れいので帰ろうと

思つてましたが。それで、西園寺君はなんで」

「……道に迷つた」

恥ずかしいが、じょうがないので言つてみる。  
ついでに神条から渡された写真の事を言つてみると、

「まあ生徒会のほうから田をつけられていますからね」

と、言われた。

「じょうがないので校舎の方向だけ教えてあげますよ」

「それは信じていいんだよな?」

「さすがにこんな夜まで迷つている人に変な方向教えたりしません  
よ」

それなりにいんだが……どうも信用できない。

あ、そうだ。

「そういえば、お前なんであのとき歸つたんだ?」

「へへ、いつ?」

「屋上で会つたときだよ」

すると、なぜか少し照れくしゃみしていった。

うん?俺、何かしたか?

「まあ気にしないで下さい。それより、方向はありますよ」

「あ、ああ」

はぐらかされてしまつたが、今は帰る方が先なので、教えてもらつた方向に行くことにする。

高科に教えてもらつた方向に行くと、旧校舎についた。  
……校舎は校舎でも、さすがにそれは違うだろう。  
やっぱりあいつとは付き合わない方がいいかな？

## 第1-5話 「再度森へ」

さーと。今度は大江いるかね？

前回と同じように俺は森を歩いていた。暇だから。別に俺が女好きってわけではない。

ただ……

今度は迷子にならないようにしないとな。

「あの後、帰った時の時間が11時だったからなあ」

そのおかげで寮に入るのも一苦労、飯は食えないで大変だった。俺が帰った時に荷田君が、お菓子と一緒に食べよう、と誘ってくれたのが非常に心に染みた。

そう考えている間に、俺はいつもの場所まで着いた。だが、また大江の姿は無かつた。

「あれ？ またいないのか……」

むう、アイツそんなに来ることがないのかな？ しうがない、また不審者と思われる前に帰るとするか。

「……そうだ！」

考えたら俺は一度も女子寮を見たことが無いな。  
一回くらい見ておくか。

いや、別に俺が女好きってわけじゃないよ?ほんとだよ?  
わざわざ言つたけど。

そうして少し歩くと、そこには校舎があった。  
ただ、これ以上近づくとバレそうなので、それ以上は近づかない。

「……おお、これが女子寮か」

なんか不思議な気分になる。  
何人かの女子生徒とはあつたけど、本当にこの学校には女子生徒が  
いるというのを  
あらためて認識した。

そのとおり。

「大江さんーあなたはどうしてそつやつてすぐに備品を壊してしま  
うんですか?」  
「はあ、えろいすんません」  
「その言葉づかいもそつ。もう少ししゃんと喋れないの?」  
「はい、申し訳ありません!」  
「……あなた、ふやけてるの?ガミガミガミガミ」

この声は、天月と会つた時の先生と、大江の声だ。  
なにか怒られているようだけど、ここからじや上手く聞きとられな

い。

も少しあづき寄るか。

（はあ、一体どないせえちゅうねん……おつー？）

「せ、先生！」

「ガミガミ……はい？ どうしました？ 大江さん」

「きゅ、急に腹が痛くなつたんで……後で改めて怒られますんで、失礼します」

タタタタタタ……

「あ、大江さん！？……本当にダメな子ですね」

ガサガサガサ……

ワンワン！（あ、馬鹿な人間がいるぜ）

ワン！（おい、もう一人来るぞ）

ワ……ワン！（い、この匂いは…）

キヤ、キヤン！（悪魔だ、悪魔が来るぞ、逃げるーーー！）

ん？なんかあづちの方で犬が逃げてないか？  
あ、大江がこづちに来た。

「やあ、西園寺君。今日はどうしたんや？」

「いや、暇だから話相手でも探してこつちに来たんだけど、見当たらなかつたから

こつちに來たんだ」

「……こつちは女子寮しかないはずやねんけど」

「！」誤解だ！」「

確かに怪しまれるのも無理はない。

「はあ、にしても西園寺君、あんた危ない」といひやつたなあ

「何が？」

「いじらへん、あたしの友達多いねんで？」

まさかさつきの犬は……

深く考へない方がいいな。

ワン……（誰が友達だよ、あんなに首を絞めつけてきたりするくせに）

ギロッ

キヤ、キヤン！（に、逃げひー）

「おい、大江。お前、今すこい睨んでなかつたか？」

「え、嫌やなあ。そんな目しつらんで？」

たぶんあつちで草がガサガサ言つてたから、俺以外の何かを睨んだ  
んだろうけど。

今ここにいるとしたら犬か警備員さん。

まさか警備員さんを睨んだりはしないから……犬しかいなけど。

まさか人間以外にも睨んだりするのは効くのか?  
ちょっと聞いてみるか。

「なあ、大江」

「ん、何?」

「お前がやつていた槍つてさ、睨んだりするのも武器なのか?」「だからー、睨んでないつてば。あたし、女の子やで? そんな人なんか睨まんて」

人?なら、動物に対しては睨むと「う」とか。

「つまり、犬に対してはするつてことだよな」

「確かに犬は人じやないけど……分かつた、降参や、降参!..」

「なんだ、意外とあつさり認めるんだな」

「これ以上言つたつてどうせ無駄やろ?」

そりやそうかもしれないが。

「で、それつて槍の練習の賜物なのか?」

「槍とはあんまり関係ないけど、要は気迫やな

「気迫?」

それこそ女の子が使う言葉なのか?  
にしても気迫つて……

「結局どうやるんだ?」

「なんや、あんた覚えたいのか。けど、教えられへんな  
「なんでだ?」

「これくらい教えてくれたらいいのに。」

別に減るものでもないだろ。」  
そう思いながら話を続ける。

「これは古武術の技やからな。教えてもらおうと思たら、金とねで、金!」

「金なんて持つてゐ訳ないだろ」

ペラならあるが、残念ながら手持ちが少ない。

「そういう訳で、もし教えてほしかつたらまた別の機会やな  
「あともう一つ。睨みつけるだけなのに、それも古武術の技なのか  
?」

「教えられへんなあ」

ケチだなあ。まあいいけど。

「他にも重い荷物を軽く持つとかいろいろあるけどな」

なんだそれ、本当に古武術なのか?  
なんだか気になるけど……本人が教えるのは金になると言つてゐるし、  
しううがないな。

すると、向こうから人がやつてきた。

「カズ、あんたこんなとこにいたの。紫杏が呼んでるわよ、早く  
戻りましょ

「ああ、分かつた。すぐ戻るわ」

話し方にたぶん同学年だろ。

眼鏡をかけていて、少し気が弱そうだけだ。

「で、あんたの隣にいる「イイツはだれ？」

「前言撤回。『イイツ』とか呼ばれる時点では、もう『氣』が弱くないのが分かる。

むしろ、『』の感じはめちゃくちゃ『氣』が強いな。

「『』には同じ学年の西園寺ちゅー奴や。よろしくうしたつてや」「ふーん。なんで『』にいるわけ?しかも私、男子つて嫌いなんだけど」

なぜか睨まれた。しかも、なんか酷い事言われてるし。

「ま、それじゃあ私先に行つてるから」

そう言つて彼女は校舎の方へ行つた。

「ま、まあ付き合いにくいかもしれんけどよりじゅつしたつてや。あ、名前の方は浜野 朱里つて言つから」

そして、大江は浜野の後をつけついつた。

誰もいなくなつたから、俺も帰るか。  
これから練習あるしな。

## 第16話 「練習後」

「よし、次はカーブの投げ込みだ」  
「はい！」

今は練習中である。さつきの会話を見て分かるように、俺は変化球重視の練習だ。

天道には速球では敵わないが、こつちは変化・技術で勝負と、言つたところか。

ちなみに、キャッチャーは荷田君がしてくれている。

「にしても、西園寺君のカーブは良く曲がるでやんすね」「まあ俺の一番の武器だからな」

中一の頃からずっと練習してきた変化球だ。  
なかなか打たれない自信はある。

「じつせなり、もつといこ変化球にする気はないか？」

監督が言つてきた。

「いこ変化球だつて？そりや良くしたいにあまつてゐね……」

「どうこい」とですか？」

「例えば、そのカーブをスローカーブにしたりするんだ。お前にはそういう才能がある  
から、出来ると思うんだが、じつする？」

うーん、スローカーブか……

「ニヤ、セツボウニヤシテモモトア」

怪我したら嫌だからな。

「なあ、西園寺。今日暇か?」

「なんだ越後？部活終わった後なら暇だけど、何か用か？」

練習で何を覚えてくれないか?」「

練習か……そこそこ疲れてるけど、まあいいかな。

俺たちは素振りを続ける。

にしても越後、やっぱりフォームきれいだなあ。

1991-2000

「よし、一回休憩するか」

さすがに練習後に連続で素振りをするのはきつい。  
よく体力持つな。俺もまだまだ練習の必要があるな。

「どうだ、また俺と勝負しないか?」

越後から誘われた。

とはいっても、そんな俺の手持ちをポンポン見せたくない。

「いや、今回ははやめとくよ。疲れてるしな」

「そうか、なら俺が相手になつてやるよ」

そういうて奥から現れたのは田島だった。

いつから見てたんだか……さつさと出てきたらよかつたのに。

「まあ俺も練習で疲れてるから本気ではないけどな  
「別にいいぜ」

そういうて越後はバッターBOXへ、田島はマウンドの方へ歩く。

.....

二人が対峙する。

個人的な意見ではあるが、俺は越後が勝つと思う。

確かに田島は制球力もあり、球種もある。が、越後は今日の素振り  
を見ていると、

なかなかに調子がよくなつた。

ビュッ!

田島がボールを投げる。そのボールは越後のバットの先を掠めた。  
ガシャン！と、バックネットにボールがあたる。

（なんだ、田島も調子がよれそうだな。なら、この勝負、どっちが勝つか分からんな）

だが、案外早くその時が訪れた。  
田島はカーブで内角低めを狙う。

「来た　！」

越後は狙つてたと言わんばかりに、いや、狙っていたんだろう。  
バットを勢いよくふり、そのバットは見事にボールを捉えた。

カキーン！

快音とともに、ボールは飛んでいく。

（……レフトオーバーって所か。）

勝因としては、素振りの前に越後から頼まれたカーブを打つ練習だ  
ろうな。

それがなければまだ分からなかつた。

「ちえ、打たれちまつたか」

「俺の勝ちだな！もちろん俺が勝つたから。ボテチくらいはおじつで  
くれよ」

おい、それ前に俺が言つたセリフ。

「ぐ……まあいいだらう」

「わい、これからどうする?」

「どうあると言われてもな……特にする「ことは無いんだが。  
まあ暗くなつてきたから寮に戻るとあるかな。

「俺は戻るけど。一人はだらう?」

「俺は戻るぜ。田嶋は?」

「まだ残つて自主練するよ」

とこ「」と、俺と越後は寮に戻ることにした。

越後の部屋にて。

「なあ……越後。なんでお前つて野球をやり始めたんだ?」

「俺か?」

いや、名前で呼んだし、「」はお前しかいないから。

「やつぱり、野球は楽しいからかな」

笑つて越後は答える。

そりやそりや。じゃなけりや、越後も俺もここにはいないだらう。

「それに」

それに？それ以外に何かあるのか？

「他のスポーツはルールが理解しにくいだろ」

これは予想外の答えが来た。

お父さんが野球をやつていたとか、近くに野球が好きな人がいるとかなら分かるが、

「……なんじやそりや」

「だつて、サッカーとか意味が分からなくないか？」

しかもサッカーが分かりにくいと来たか。ラグビーとか普段やらな  
いスポーツなら  
ともかく、サッカーだ。

「手を使っちゃいけないのに、一部の奴は手を使つてゐるし。そも  
そもなんでゴール

したら一点追加なんだ？」

「そこからかよー」

大声を出してしまった。

けど、無理もないと思う。こんなやつ人生の中で初めて見たからな。

「じゃあなんで野球は理解できるんだ？振り逃げとかフィルダース  
チヨイスとかを

理解するのに時間かかつたんじゃないか？」

「何言つてゐんだ西園寺。あんなの覚えるの簡単だろ?」

……はあ?

ああ、そうか。

こいつ、本当に野球バカなんだ。

とりあえず越後の先輩が帰つてきたので俺は自分の部屋に戻つた。

そろそろ寒くなってきたな。もつ秋も終わつて冬休みが始まるとか。

……時間が過るのが早く感じるな。

## 第17話 「ポテチは20ペタあります」

「朝でやんすー起きるでやんすよー。」

そんな声を聞き、俺は身体をゆくつと起ります。  
どうせならここで美女少女が起きてくれたらいいのに……まあそんなことはないけどね。

「ん……荷田君、もう朝?」「だから、朝でやんす、つて言つたはずでやんすけど

あ、そりゃそ'だ。

今日は日曜日だけ、これから部活があるのか。

そして俺は一段ベットから出で、ゴーフォームに着替える。  
そのまま荷田君と一緒に食堂の方へ移動する。

「おはよー」

「ああ、おはよう

途中で止留つたチームメイトに挨拶を交わしながら、俺と荷田君は席に座る。

「西園寺君は人参が嫌いなんやんすか?」

「そうだけど、なんで?」

「いつも最初の方にそれだけ食べてるからでやんす」

なるほど。俺は最初に嫌いなものを食べる癖があったのか。

自分で気付かなかつたなあ……どうでもいいけど。

「な、荷田君はマッショルーム嫌いなの？最初に食べてるけど」「オイラは先に好きなものを食べるんでやんす」

……どうでもいいか。

「ま、俺は先に部屋に戻るよ」

「待つてくれでやんす！今食べ終わるから、でやんすー。」

「準備できた？」  
「オッケーでやんす！」

寮で自分のグラブとか持つしていく最中である。  
うーん、そろそろグラブがボロボロになってきたな。  
新しいのに買い替えたいけど……600ペラかかるし。

「はあ、今日の練習かつたりいなあ  
「どうしたんです？北乃先輩」

……嫌な予感がする。実は先日、「こんな」とがあった。

それは寮の付近を歩いていたときである。

「はあ、練習かつたりいなあ」

「だから、といつて練習をわびしちゃ監督に怒られるでやんすよ」

「俺は大丈夫なんだよ」

何が大丈夫なんだろ？

まあいいや、さつとグラウンドに向かうか。

「うつ！ いててて！」

「ど、どつしたんですか？」

「急に膝が痛みだしてきたよー。これじゃ今日の練習は無理だー。」

はあ？

そんなはずないだろ。単に休みたいだけだろ？

「ちょ、ちょっと。北乃先輩、さすがにわびしちゃダメですよ」

「ああ？ ならこの状態で練習に行けって言つのか？」

「い、いや……」

んな無茶苦茶な。

だから野球が下手なんじや…… ゲフンゲフン。

荷田君がいるところでこれは危ないな。

「それじゃ、監督に今日休むって言つてこてくれ」

え、と一人で不満を言うが、もちろん先輩には通用しない。

「わ、分かりました……」

ちゃんと帰りにはホテル買つて」へも

こんなことがあったのだ。

やつやの言葉が、「部活めんどくさい」という意味なので、たぶん  
今回も同じだね。)

(どうにかならない?)  
(黙りでんすね)

そしてあの言葉が出る。

「うん……」

「……………」「ひつたんですね？」

「なんだよお前、先輩が痛みを訴えてるんだから、もう少ししないのかよ」

本当に痛みがあるのなら、もつとやうこつ顔をしてくれ。

それに、そんな事を言わないだろ。

俺は心底めんべくせいながりも、先輩の話を聞くこととした。

「……まあいい。俺は急性胃腸炎にかかつたので練習には行けない

「まあそんな感じでしようけど

「まあそんな感じでしようけど

バキ！

殴られた。お、親にも殴られた事無いの！

……嘘です。もう先輩にも何回殴られた事か。

まあそれはおいといて、

「俺はテーマパークに行つてぐる」とするよ。可愛にキャラクターたちと一緒に

遊んでくるぜ。それじゃあ監督に言つててくれよ

はあ……どうせ俺らが監督に殴られるんだろうな。  
いいかげんにしてほしいよ。

「分かつたでやんす。ナビ、お金はあるんでやんすか？」

確かに。お金は全部取り上げられてるはずだし、そもそもこの時間、  
バスは無いはず。

「ひつやつて行くんだるひへ、

ま、まさか、かの呪文 一ツ……

「俺は特別な携帯を持つてゐるからな。そいつくんは別にひつひつでもなるんだよ」

なんだ、ルー じやないのか。期待したのに。

(西園寺君)

(なんだ、荷田君?)

(それは無いでやんす。ゲームのやり過ぎでやんす)

(……)

突つ込まれた。

「それじゃ、俺は行つてくのぢや」

「あ、はい」

そつとつて先輩は携帯で誰かと話し始めた。  
おつと、練習の時間が始まるな。急がないと。

「……ということで、北乃先輩が休むそうですね」

「分かった」

さつきの先輩のことを言つと、監督は考え込み始めた。

（北乃の奴、俺をなめてるな？）

「それじゃあ俺たちは練習に戻ります

「待て」

監督に止められた。

ああ……やつぱりこうなるのか。  
だいたい分かつてはいたけど。

「北乃の代わりの練習をお前らがやれ。まずはランニング10周!」

「はい……」

「声が小さい!」

「はい!」

トホホ……と俺たち一人はグラウンドを走る羽目になつた。

後日、北乃先輩が監督に怒られていた。

……あれ？ 大丈夫なんじゃなかつたのかな？  
けど、なんかいい氣味だ。

（そりでやんすね！）

荷田君に突つ込むのはもうやめよ！

## 第18話 「掃除」

「あはは、それでさあ～」「え、そつなんでやんすか！？.」

俺と荷田君は、一人で会話しながら部屋へ向かう。この会話は単なる世間話です。

ガチャ

部室の扉をあけると、そこにはとんでもない臭いが漂っていた。とつあえず、とてもくさい臭いだ。

「な、なんでやんすか！？」の臭いは  
「一体どこのからー？」

おぞるおぞる近づいてみる。

だが、どこのその原因があるかは全く分からない。一体どこの……？

「お、何やつてんだ西園寺」「つづー.」「どつした、越後、つてこの臭いは？」

越後と田島がやつて来た。後ろを見ると面取と畠田もいる。とつあえずこの4人は異常に氣づいたようだ。

「お、おこ西園寺。一体こればどつことじだ？」

田島が聞いてきた。

と、言われてもねえ。

「俺もよく知らないんだけど、今部屋に入つたらこんな臭いが漂つてたんだよ」

「そうか……2週間程前から変な臭いがしてたのは知つてたが、急にこんな強くなると

はな」

気づいてんなら捨ててくれよ……

そう言いたかつたが、とりあえず抑えることにした。

とりあえず今はこの問題を片づけることが先だからな。

「とりあえずこの臭いの原因に心当たりのある奴いないのか?」

「それが分かつたら苦労しないでやんすよ……」

あ、そりやそーカ。

ならもう、これは我慢して探すしかないな。

「ま、それじゃあ他の人が来る前にやるか

「やれやれだぜ」

「腹減つた」

ということで、俺たちは掃除することになった。

ちなみに、2人目の言葉は越後、3人目は岩田である。

「おい、これなんだ?」

その越後の声に全員が振り向く。  
しかし、越後が持つてゐる物は臭いの原因ではなかつた。  
だが、それは俺らが全く見たことのないものだつた。

「越後、それなんだ?」

聞いてみる。

「だから俺が聞いてるんだつて。なあ田島これなんだ?」「俺がこの中で一番学力高そうだから判断したんだろうが、俺もしらないぜ」

ちなみに、その越後が持つてゐるものとはピンク色の花だつた。  
チユーリップとかではなく、俺たちが知つてゐる物ではなかつた。  
けど、見た感じ毒がありそうでもなかつた。

「ああ……腹減つた。それ食べてもいいかな?」

「いや、危ない、危ないから。こんな所にある花だぞ」

「そうか……なら頂きます」

そういつて畠田は「」の謎の花?草?を食べ始めた。

「ちょ!危ないって!」

毒でも入つてたらどうする。入つてなさそつだけど。

ムシャムシャ……

「味の方はどうでやんすか?」

「うん、なかなかいける。力がついた感じ」

「へえ、それはいいな」

「いじにもう一個あるから、官取もいつとくでやんすか?」

「いや、俺はいじよ……」

まだあつたのか。それより早くお前ら探せよ……

「うん? おこ、いじのロッカーから変な臭いがしないか?」

そう言つて田島が指したロッカーからは確かに変な臭いがした。  
「これはビン?」  
「これはビン?」

「た、たしかにこれはやれやれだぜ……」

「いじの中には何があるんでやんすかね?」

それじゃ開けるぞ、といつ田島の声でそのロッカーは開いた。  
それと同時にものすいじの悪臭がロッカーから出ってきた。

「いじ、これはすごい臭いだ!」

「早く誰かこの原因の物体を外に出せー!」

上から岩田、官取だ。

とりあえずいじの物体はなんなのか確認してみる。

「「」、これは……シャツ？」

「あ、汗だ……汗を吸つたアンダーシャツが発酵してるものす」「、臭いを出しちゃうんだ」

「うあえず名前でも書いてないか……あれ?このタグの所に名前があるだ?」

「えつと……」「、だ?」

「これ荷田君のじゃないか!」

「オ、オイラのシャツでやんすか!？あ、そういうえば前にシャツが一枚無くなつてたでやんす!..」

「お前のだつたのか……」

「うあえず早く」、れ处分しきよ」

「嫌でやんす!..」、なつたりも「れはオイラのじゃないでやんす!..」

「何言つてゐんだ君は!..」

意味のわからぬ理屈だな!..」「供でももつチヨイまともな轟四つ  
ぞ。

「いいから捨てろよ」

「しようがないでやんすねえ~、捨ててやるでやんす」

「ああ、有難い!..」、つて「これはもともと荷田君のだろ!..」

「それじゃ行つてくるでやんすよ」

そう言つて荷田君は外へ行つた。  
たぶん焼却炉にでも行つたのだろう!..「それで一件落着、あれ?まだ

臭いが……？

「お、おい。まだ何か臭いが残つてないか？」

「越後、お前もか。気のせいだよな？」

越後と田島もまだ臭いを感じるらしい。  
ま、まだあるのか！？

「あ……もしかして」

「なにか心当たりがあるのか？」  
田島

そう言つて岩田は一つのロッカーに手を伸ばした。  
そのロッカーが開くと

「うわ、臭つ！！」

岩田以外の全員が一步後ろへ引いた。

い、一体これは？

「俺が昔おなかが空いた時の為に取つて置いたおにぎりだ。前探し  
て無かつたけど、  
こんなところにあつたのか」

そこには真つ黒になつてゐるおにぎりがあつた。  
きつとものすゞくカビが繁殖しているんだらう。

「い、岩田。いいから早くそれを捨ててくれー。  
分かつた」

越後の頼みにより、岩田は窓のまつた歩いて行つた。

……窓？窓つて扉の反対側だよ？ビルでここの？

「アーレフ」

ピローン……

掛け声とともに若田のおにぎりは放物線を描いていった。  
臭いが一気に和らぐ。

「おにぎりが糸を引いていきれいだつたね」

「全然きれいじゃないから」

「ア……とも疲れた。もともと寮に戻るか。

後日。またこんな事が無いように自分のロッカーを掃除していくと、  
パソコンとペラが見つかった。超嬉しかった。

第18話 「掃除」（後書き）

パソコン = ドリンクです。

## 第1-9話 「窓の外には」

朝、起きて外を見て見たら雪が降っていた。  
ああ、もう一ヶ月か。

「西園寺君、起きたでやんすか？ わたしと学校に行くでやんす。」

俺は荷田君とともに、自分の教室へ向かつた。

「なあ、西園寺。お前は冬休みに家に帰るのか？」  
「ああ。越後はどうなんだ？」  
「もちろん一回帰るぜ」

一人で冬休みのことを話す。

ちなみに、荷田と田島は別のクラスだ。

「そろそろ先生が来るでやんす！ 一人とも席に座るでやんすよ」  
「オッケー、分かった」

そう言つて俺たちは席へ座つた。

すると間もなく大河内先生が教室へはいつてきた。

「おはよう、今日は朝寒かつたが、風邪を引かなかつたか?」

「大丈夫でやんす!」

そんな社交辞令を交わしながら、1時間目のH.R.が始まる。

「どうあえず今日のH.R.は冬休みのことについて話すぞ。冬休みは

2週間で、その間は

家に各自帰宅してもらつていい。これは1学期の最初に話したな?」

「はい」

ああ、実家に帰つたらよつやくゆつくりできるな。

寮じや先輩たちがいてゆつくりできないからな。

いつもマッシュサージしろとか言つてくるし……

「2週間とは言つたが、別にきつちり2週間休まなくてもいい。その前に帰つてきても

別にいいぞ」

「な、なんでこんなとこに早く帰つてくる必要があるんだやんすか!」

「冬休みになつたら分かるや」

そう先生は意味深な発言をした。

荷田君の言つとおり、ここに早く帰つてくる生徒なんているのか? そんなわけないだろ?」

とりあえず後で質問してみるか。

「それじやあ今から冬休みについての注意と、少しだけ授業を行つ

「え、授業もするでやんすか！？」

「ああ

授業をするのか。なら、俺は寝るとするかな。

学校終了後。

「そこで越後がさ～」

「何やつてるんでやんすかね、越後は」

荷田君と一人で寮へ向かう。  
すると奥から監督がやつてきた。

「お、いいところにいるじゃないか。荷田と西園寺」

「どうしたんですか？監督」

「実はだな、天気予報でこれから大雪になるそつだ。俺としては練習がしたいんだがな、

学校側が今日は練習を中止したと云つてきやがったんだ。だからそれを1年連中に云えて

おいてくれ

「分かりました」

やつた！今日は練習休みなのか。

久々の練習休み……かな？最近何回も休んでる気がしなくもないが。

「どうあるでやんすか、西園寺君へ特に部屋でやる」ともないでやんすけど

「やうだなあ……」

購買でトランプを買つてくるのもいいけど、普通に話をしてもいいだけでもいいかな。

「ま、適当に話でもしようか」

「分かつたでやんす！それなら部屋でトランプを用意するでやんす！」

人の話を無視するやつだ。将来口クな大人にならないぞ。

「俺は少し寄り道して帰るよ」

「どこに行くんでやんすか？」

「ちょっと外に」

俺は子供のころから雪が好きだった。

もともと住んでこないと云が、雪が降りにくく地域だったからそのせいかもしれない。

「なかなか降つてゐな……」

「どうせなら」荷田君や越後たけと雪合戦でもしたらよかつたかも知れない。

今から呼んでよいかな……お?

「あれは、高科?」

奥の方でこそそしぬながら歩いていた。いや、むしろ正々堂々と。なんだか良くな解らない歩き方だ。

「暇だからついていつてみるか」

にしても寮の方に向かって走つてゐるナビを向かへてゐるんだらうなあ。

「はあ~、ここも開かないですよ」

そう言いながら高科は男子寮の窓を調べている。  
誰かにバレたらどうするんだ。

「けど、セツビービー」かは開いてるはずだから頑張つて探しします！」

「何を探すんだ？」

「セツビーすみません！窓があつたら入りたくなる病気なんですね！許して下さい！」

なんじやそりや。そんな病気初めて聞いたぞ。一体「コイツは何を言つてるんだ。

「つて……なんだ、西園寺君か」

「なんだとはなんだ。先に言つておくが、男子寮の1階の窓は1年生で毎日締めてるから

開いてることは無いと思つた」

ちなみにセツビー雪の関係で締めたばつかりだからな。そつそつ開いてるとは無いだろ？

「えへ、なら、じたなことしても無駄じやない。損しました……」

「さらに言つと、今日は雪が降るとかで部活も休みだから、生徒も寮にわんさかこるわ」

さすがにその中に入るのは気が引けるだろ？

「そこには分かつてるから大丈夫

「何が大丈夫なんだ！？」

「コ、コイツ、分かつてて入るとか質が悪い……  
まあいいか、たぶん高科もそろそろ帰るだろ？」

「それじゃ、俺はもう戻るぞ」

「…………」

何か言いたそうな高科がこっちを見ている。  
……何だ？ 何があるのか？

「どうした？ 早く帰らないと大河内先生に見つかるぞ？」  
「そ、それもそうなんですが……」  
「どうした？ 何かまずい事でもあるのか？」  
「いや、別にそういう訳じゃないんですけど……」

もつと意味が分からん。

「まあいいや、今度こそ俺は帰るぞ」

「え、あ……」

「どうしたのか？ 用があるなら言つてくれよ」

なんか拳動不審だな。いつもと様子がおかしいのは気のせいか？

「い、いや、特に用は残つてないですよ。それではシーコーアゲイ  
ンです！」

タタタタタタ……

行つてしまつた。結局何なんだ？

何も言わずに去つて行つたけど……何か言いたそうにしてたな。

「森に生えてたキノコでも食つたのか？」

行つてしまつた奴のこと考えてもしょうがないか。  
雪でもみながらゆつくり部屋に戻るとしようかね。

部屋に帰つたら、荷田君がせびしそうに俺を待つていた。  
ああ……トランプの事忘れてたよ……

## 第20話 「実家に帰る」

「ただいま

「あら、おかえり」

実家に帰ってきた。そう、ついに冬休みになつたのだ。  
ようやくこれで羽が伸びせるのだ。

「もう、帰るのなら連絡の一つでもいれなさいよ」

「いあん、次からは気をつけるよ」

とはいっても、連絡するときは学校内の公衆電話を使わないといけない。

携帯電話は中継するところが無く、公衆電話も一台しかないのめつたに使えない。

さらに言うと冬休みに入りかける時は全員が使いたがるので、並んだら1時間ほど

かかるのだ。

そんなことあるべからざら……ねえ。

「にしても、なんか雰囲気が変わったわねえ。全寮制の学校だったからかしら?」

「そんなに変わった?」

「ええ

「どうか。そんなに変わったのか。

ま、とりあえずテレビでも見てのんびり過ごすかな。  
なので、俺は机の上にあつたリモコンをとり、スイッチを点けた。

「……あれ? 何だこの番組?」

「ああ、その番組視聴率いいのよ。あなたがいないときに始まつたの」

「ふーん」

新聞のテレビ欄を確認してみると、そこには俺が全く知らないものしか流れていなかつた。

ニュースとかは変わつていないが、ゴールデンタイムはすごいぶんと変わつた。

……見たいものはないな。

俺はテレビのスイッチを消した。

「あれ? テレビ見ないの?」

「うん。見たい番組が無かつたから」

しうがないのでパソコンを使つたり、本を読んだりする。が、全部途中でやめてしまつた。どうにもやる気が起こらない。

……本当に家に帰つてきたんだよな、俺?

そんな時、電話がかかってきた。

荷田君からだ。

「やあ」

「西園寺君でやんすか? オイラ、先生が言つてた意味が分かつてきただでやんす」

「ああ、俺も分かつたよ」

そう、どうせ寮に帰つたらこれらは全部見ることが出来ないのだ。だからやることがなく、暇でしようがない」

「オイラ、年が明けたらすぐ帰るでやんす。西園寺君せひあるで  
やんすか?」

「俺もそうするよ。とつあえず今は……ボールでも投げ込んでや  
かな」

「おお、それはナイスアイデアでやんす!」

うん、それ以外やることないしね。

数日後。年が明けた。

(ああ、暇だ。早く学校に戻つて練習したいなあ)

「お、また大神電機の株が上がつているな。NONAKIの株も上  
がつてゐる」

「あなた!子供が帰つてきてるのに株なんて見ててどうするの」

「あ、いや。そうだな……」

なんだか家に居づらいな。

「そ、そうだ。年も開けたから、おみくじでも引きに行つてくるよ

「あらそつ? いつひらつしゃー」

俺は街へ出た。適当にプログラしながら神社の方へ行つてお参りを

する。

すると、最近はやりの射的おみくじがあった。

「一回五百円だよ、その兄ちゃんやつていかないか?」

誘われた。

一回五百円とは高いなあ……と思いつつ、やってみる事とした。

「弾は五発だ。頑張れよ」

おつかやんに応援されながら最初の弾を発射する。

残念ながら的には当たらず外れてしまった。

あと4発。

ちつちやい的は一発で大吉になる。だが、当てにく。

おおきい的は連続であてれば大吉にはなるが……当てやすい。

どちらを狙うべきか。

「ま、俺が狙うのは勿論こっちだ!」

そういうてちつちやい的をねらいに行く。

2発目、3発目と撃つが、当たらない。

(あいつを天道だと思え………)

ポン!

勢によく発射された弾は、そのちつかやい的に当たった。

「よし。」

「ほら、よくあたつたな」

「これで今年は天道に勝てそうな気がする。  
まあ最後の弾を外して結果は吉だつたけど。

「それくらいがちょうどいいんだよな」

けつして負け惜しみではない。

とりあえずおっちゃんから賞品のグラブも貰つたし、家に帰るか。

「ただいま

「おかえり。おみくじどうだった?」

「吉だつたよ」

「それはまたいいわねえ」

ほらやつぱり。大吉なんて欲張らない方がいいんだ。  
ま、そんなことよつ学校に行く準備をしないと。

俺は一階へあがり、荷物を用意した。

「あれ、あんたもういくの?」

「うん、そろそろ練習したいから」

「それなら止めなけど……」

よし。忘れ物は無いな。思い残す」とは……むしろ学校にあるかも。

「それじゃあ行つてくれるよ」

バタン。

俺は家を出る。

「もう少しゆづくらしてけばいいのよ。にしても、手がかからなくていいわねえ」

親切高校行きのバス乗り場へ向かう。  
途中で面白いものを見つけた。

「あれは……少年野球か。俺もあんな頃があったのか

小さい頃は、ボールを投げてもなかなかストライクゾーンに入らなかつた。

スピードも全くなかつたし。

「さてと、そろそろ行くか……え！？」

奥から天道とその彼女がやつてきた。

天道の方は俺に気づかずそのまま横を通り抜けていく。

「よお。 今日もホールドといい御身分だな」

「え？ 君だれ？」

忘れてやがる。本当に面白紹介してくれる奴が多いのか、単に忘れているだけなのか。  
どちらにしてもムカツクな。

「前にも面白紹介したんだけどな」

「それで、君も勝負するのか？」

しょ、勝負？ なんか変な方向に進んだが、望むところだ。  
俺はピッチャーだが、こいつの球を打つて見せる！  
と、思ったのだが。

「はー、それじゃあこのマッチトを使つてね」

そういうて、天道の彼女から渡されたのはキャッチチャーのマッチトだつた。  
待てよ。なんでマッチト？

「おい、普通勝負つて言つたら一球勝負のことじやないのか！」

「そりやそりやだけど、ここにはキャッチチャーがいないから。俺がボールを投げるから、

それで君が勝敗を判断してくれ」

なんじやそりや。

しそうがないのでとりあえず構える。

奥から天道がゆっくりと足をあげ、ボールを投げてくる。

「ピュッ！…

さつ毛の話しかななどとは裏腹に、とんでもない球威のストレートがきた。

そのスピードに俺はボールを落としてしまった。

「あ……」

「気にしないでいいよ。普通は俺のボールを捕れないから」

くつー

「お、覚えてるよー」

最高の負け犬のセリフだった。

「あ、名前……」

「別にその他大勢なんだからいいじゃない」

「それもそうか。それじゃ、デートの続きをしようか」

「ちくしょっぺ、ちくしょっぺー！」

「なんだか西園寺君、気合が入ってるでやんすね。何かあったんでやんすかね……」

「 さあ？」

奥で田島と荷田君が何か話している。  
とりあえず、天道に投げ勝つためにもつと練習しないといけないな。

学校に戻ってきて数日。

天道の一件があつてから、最近は練習にとても集中している。

「最近頑張ってるでやんすね」

「うん。でも、天道に勝つためにはもつと頑張らないとなー。」

「せりやせりでやんすけど。怪我だけはしないよつとするでやんすよ」

荷田君に言われた。

どうやら俺は怪我でもしそうな勢いで練習してるらしい。

ただ、それくらいしないと天道に勝てる気がしない。

「ま、なにかあればオイラに相談してほしいでやんす。少しほ役に立つと思つでやんすよ」

「ありがとう。じゃあ早速投げ込みしたいから、受けてくれる?」「今日でやんす!」

こつして、しばらく俺は荷田君と練習を続けた。  
凡人でも勝てることを天道に示さないとな。

「そういえば最近西園寺君は速球を投げるときに何かクセがあるで  
やんすね」

「せり? 普通に投げてるだけなんだけど……」

何か癖があるらしい。

もし、横回転がかかつるとかだつたら嫌だなあ。

つまり軽い球つて事だから。

「ノビがいいとか、なんだか早く見えるやんすー。」

「え、本当にー?」

あれが原因かもしれない。

最近買った本の中に、『投げろー・ジャイロボール』という本があった。

もしかしたらジャイロボールに近くなっているのかもしれない。

「もし、高校生でジャイロボールを完璧にマスターできたら凄いでやんす!」

「今度、また練習してみるよ」

荷田君が心を読んで会話してるからなにか話のテンポがおかしい気がするが、そこはまあ気にしない事にする。

「それじゃあとりあえず今日はーーいら辺で切り上げるとするか

「そつでやんすね」

荷田君は立ち上がり、俺の方へ駆け寄つてくる。

俺は荷田君が来たのを見て、一緒に部室の方へ戻った。

部室に戻ると、官取がいた。

「ん、官取何してんのだ？」

「いや、さ。実は監督に渡したいものがあつて探していたんだけど居なくてさ」

そう言つた官取の手には、紙に包まれていたが一日で監督の好物だといふことが分かつた。

……「イツ。

まあ俺も数回やつたことがあるから人のことは言えないのだが。

「外の方にいなかつたんでやんすか？」

「それがいなかつたんだよ。グラウンドの方はだいたい探したんだけどさ」

そ、そこまでして渡しに行くのか。

こいつ最低だな。

俺も人のこと言えないけど。

その時、部室の扉が開いた。

ガチャ

「ああ、腹減つた」

「今日の練習はハードだつたな。やれやれだぜ」

岩田と越後がやつてきた。

「ん？ 官取。それ食べ物？」

「いや、そただけどお前にあげないからな」

岩田が物欲しそうに官取が持つているものを見つめる。

官取が一歩引くが、岩田がジリリ、と寄りてくれる。

「いやいやいや、お前のじやないからなー!?

「うん。分かってるよ。ありがと!」

「ありがとー!?

哀れだな、官取。

残念ながらそれは岩田によつて食べられる羽田になる。周りで見ていた越後とかは腹を抱えて大笑いしている。

「それじゃあいだきまーす

「あーーー!」

パクッ

食べられてしまった。

結構あれ高そうな奴だつたな。不憫なヤツ。

「おいしかったよ。まだ他に持つてないの?」

「あつたとしてもこれ以上はあげないからな……トホホ

官取は少し涙目になりながら寮に戻る準備を進めている。俺はもう用意したので寮に向かうことにした。

「それじゃあ先に帰つてるよ、荷田君」

「分かったでやんす!」

俺は扉を開け、外に出た。

普段通りの道を歩く。ただ、普段聴かない声が聞こえた。

「…………こと…………です…………督…………」

「この声は…………北乃先輩？ 塀越しに話をしているみたいで、何を言つていろかは良く解らない。

少し近づいてみると、塀越しならバレないだろう。

「まだまだあんなものじゃ足りんな」

「僕にあんなことじといて、ただで済むと思つてるんですか？」

監督もいるようだ。

あんなことじといて、前の先輩が怒られたことを語つてゐるのか？

もしかしたらそれ以外にも何かあったのかもしれないけど。

「いつも監督には差し入れをさせてもらつてますよね。それに、機材の方も提供してるし」

「ふうん。たまに機材が新品になつてたのは不思議だつたけど、北乃先輩がやつてたのか。

あ、だからいつも練習サボつても俺は大丈夫つて言つてたのか。

「フフフ、そういうことですよ、監督」

「つまりお前の親御さんや、お前が俺の為に死んでくれてるってことだらう？ ありがたいことじゃないか」

「へー？」

わお、そりゃびっくり。なんという解釈。

「俺は頭が悪くてな。つまり、俺の為にやさしくしてくれてるわけだ

「あ、いや

「こつとくけどな、北乃。俺はお前のことを過小評価はしていいないつもりだ」

急に何をいいだすんだ?この監督は。

「俺らが甲子園に行くためには、お前のようなパワーを持つ選手が必要なんだ!だから、しつかりとその存在を後輩にも見せ付けてくれ!頼んだぞ」「急にそんなこと言われても……けど、頑張りますよ俺!」

あ、なるほど。上手く言いつぐめたわけだな。

「あ、それとな

まだ続きがあるのか。今度は何だ?

「俺らが甲子園に行くためには対天道用の最新のバッティングマシンが必要だ。親御さんによ

ろじく言つといてくれ

おい、監督。

いい話に付け込んで何をいつてるんだ。

まあ練習機材が良くなるなら俺はいいけどさ。

「はい、分かりました！親に言つておきまゆー。」

タタタタタタ……

北乃先輩はどつかに言つたようだ。  
さて、俺も帰るか

「おい、そこにいるのは誰だ？」

おう、ばれてたのか。や、ヤバイな、どうじょ。  
しうがないので姿を見せる。

「お前そこで何をしてた？」

これは素直に言つた方がいいのか？それとも見ないふりをした方が  
いいのか？

……見てないことにしよう。

「いえ、何も！たまたま通りかかっただけです！」  
「よし、それなら行け。さっきのことは黙つてね」  
「はい！」

ま、だいたいしうなるのは分かつてたけどね。

後日。

なんかめちゃくちゃ高級そうな機械が野球部に届いた。  
北乃先輩……なんかいろいろと見直したよ。

## 第22話 「テストとその後 前編」

「どうですか？」の学校は

理事長が一人の人物に話しかける。

「誠に素晴らしいです。この国で失われつつある規律や精神が、この学校が防波堤である

ことを確信いたしました！」

「校長先生、文部科学省の人もこのように言ってくれますぞ」

「どうやらこの人は文部科学省の人らしい。

「はい、ありがとうございます」

文部科学省の人は、ただし……と述べた。

「この学校は共学校ですよね？ これでは、少々実態に問題があるかと」

理事長はこれについて答える。

「わが校のオリジナルの制度なんだが、気に入らなかつたかね？」

「個人の意見としてはともかく、上方に言つとなるとちょっと……」

「そもそもこの学校は戦前の英國パブリックスクールをモチーフとしたもので、そもそも

男子しかいなかつたのだよ。そもそも学問は男の

」

「ああ、分かります、分かります」

理事長の言葉を文部科学省の人気が遮る。

そして、

「昔はそういう時代でしたからね。ですが、今は男女同権の時代でして」

「その考え方自体が間違つておるー若い男女が、せ、席を同じくするなど！」

理事長は興奮する。

その様子を見た校長は、まあまあと声をかけた。

「それで、教育委員会は現状の改善を要求するのですかな？」

「はい、そういうことです」

「わしは、わしはいたさか不愉快だ！校長先生、あとは任せました」

スタスタスタ……

理事長はどこかへ行つてしまつた。

「理事長は強固な教育理念を持つてますから」

「その、ぶれない姿勢は誠に結構なのですが。……で、大丈夫でしょうか？」

「ま、こいつ日が来るのは予想してましたから。一応用意はしてましたよ」

「今から小テストを返すぞ、そこで寝てる一人、起きる

大河内先生の声だ。

寝ているのは越後と俺だ。

「ん、むにゅ……。今から何するんですか？」

「テスト返しだ。ちやんと起きておけ」

そうだ、少し前に数学の小テストを行っていたな。  
結構自信あるけど……

「勝負だ、分かつてるよな！越後！」

「ああ、このテストは自信があるからな。負けたら焼きそばパンだ

ぜ？」

「どうせなら牛乳もつけようぜ」

「望むところだ！」

「いいから、早く取りに来い越後。お前の番だ」

先生に言われ越後はテストを取りに行く。

俺も名字の最初が『さ』なのですぐに呼ばれるだろう。  
俺は先生に呼ばれる前に立ち上がり、ゆっくりと歩く。

「お、西園寺。今回は頑張ったな」

「もちろん。俺が監督生特有の白い制服を着るのもすぐですよ」

「ハハ、頼むぞ」

先生から解答用紙を貰う。

そこには7点の文字があった。

……よし！7点、これなら勝つたな。

「どうだ、西園寺？ 勝負するか？」

自分の席に戻るとそこには余裕たっぷりの越後が話しかけてきた。  
こいつも自信があるようだ。

だが、ここで勝負から逃げるような俺ではない！

「そんなこと訊かなくても分かるだろ？ さあ、勝負だ！」

そう言つて、俺たちは構える。手に解答用紙を持つて。

他の生徒があもしろそうだと、と言わんばかりにこちらを見ている。  
ある意味、俺たちの対決はクラスの名物にもなつていた。

「こっせーのせー！」

掛け声とともに俺たちはテストを机に叩きつけ、相手の点数を確認する。

そこには6の数字があった。

「うわ、西園寺に負けた！」

「どうだ越後！ これが俺の実力だ！」

越後はゆっくりと崩れ落ちた。

ふふふ、どうだ越後。

「負けたよ。だけど、次は負けないからな！」

「残念ながらそれは無いな。次の時は俺はもつと賢くなっているからな」

「いや、こんどは勝つて見せる！」

このやりとりを遠くで見ていた荷田君はあきれた。

このテスト、50点満点であり、中学校レベルの問題も含まれていたからだ。

分数ができるにとつて、一次方程式や二平方の定理は無理だろうが、単純な式の計算も10点ほどあつたはずだ。

逆に一体どこを正解したのか？

荷田君は疑問に思った。

その7点のテストを見てみる。

さらにあきれた。正解してる部分は中一でならう部分が2点。他の高校で習つた部分なのだが、相当難しい場所だった。だが、西園寺君はカシニングをするよつなやつではない。

つまり？

5点はあてずっぽうだ。

次に越後の方を確認する。一いちひは、単純な計算を6点だった。

「……むしろ越後の方が頭いいでやんす」

「ちゅうりん」の言葉はあの一人に聞こえたよつて言つた。

その後、俺は食堂に行き、越後に焼きそばパンと牛乳を齧つてもらった。

れど、どこで食べよつかな？

- 1、教室で食べる。
- 2、部屋で食べる。
- 3、どこか探す。

1は……誰かに見られながら食べるのにはなあ。2は、北乃先輩がいたら食べられるし。

ここは3かな。

廊下を歩いていい場所を探す。  
そこである場所を考えた。

「屋上にでも行つてみるか！」

階段が偶然近くにあったので、屋上に向かって歩く。

テクテクテクテク……

屋上の扉を開けて、外の空気を吸う。

ただ、今は2月でとても寒い。

「まあいいか、動くのもめんどくさい」

そういって俺は食べ始める。

うん。食堂の焼きそばパンは絶品だ。

モグモグ。

すぐに全部食べ終わってしまった。  
さて、まだ小腹が減ってるんだが、戻るとするか。練習もあるし…  
…ん?

ガサガサガサ…

高科だ。

アイツ……俺に見つかり過ぎだろ。練習あるけど、行ってみると  
にするか。

## 第22話 「テストとその後 前編」（後書き）

yoridukiです。初めて前編後編に分けてみたけど、全く意味がないと思いました。……どうでもいい後書きだ。

俺は今、階段を下りて森の方に向かっている。  
森の方で高科を見つけたからだ。

方向からしてきっと、あの扉の方に向かつたんだろうけど……

「今日は何しに行つたんだ？」

まあ行けば分かるか。

とりあえず森についたのでここから先は気をつけて行く。  
じやないと犬とかにやられる危険性があるからだ。

ガサガサガサ……

整備されていない獣道を歩く。

數十分歩くと、目的地に着いた。

ただ、高科はもう扉をでて行つてしまつたようだ。

「なんだ、もう出て行つたのか。何をするのか聞こひと思つたのに

……

しうがないのでグラウンドに行くことにある。

まあ、今日は練習時間が短かつたはずなので、また後でくるとしよ  
う。

という訳で再度ここに来てみた。

途中で北乃先輩に捕まつたが、まあ何なく切り抜けられた。  
ちなみに、北乃先輩からはジュースを投げられた。  
まあ俺のナイスクヤッチによつてなんとかなつたけどね。

「……にしても遅いな」

扉の様子とかを見るに、まだ帰つてきてはいはずだ。  
だが、練習は2時間ちょっとだったので、森を行つたり来たりした  
時間を含めると3時間  
近くになる。

外でじんだけ買つているんだか。

「ふあ～」

急にあくびが出てしまつた。

そういえば昨日は睡眠時間が少なかつたな。無論、北乃先輩のいびきがうるさくて眠れなかつたんだが。

「いかん、寝ちゃだめだ」

そう思つてはいるものの、睡魔は確実にやつてきていた。「、」、こんなところひで寝たら風邪を引いてしまう。

「ナヒだ、スクワットでもしたら………………」

結局寝てしまつた。

だいたい1時間後くらいたつだろうか。

ガチャリ。

高科は戻つてきた。

ここから高科視点

「ふう〜、今回も外に行つてみたけど……」この新商品、意気地がないですねえ」

とりあえず戻りますか

そこへ参った高科は、女子寮へ帰る道に身体を向ける

「つて、ふえ！？」

「これは一体!? なんとも情けない声を出してしまつたけど、これは一体!?

高科の目線の先には壁にもたれかかって、まるで死んでいるような西園寺がいた。

「や、西園寺君……！？」

指でつついてみると特に返事もなかつた。  
一体なんでこいつなつたかが全く分からぬ。  
じじくへんに腰をしけたこともないし……

慌てていると、西園寺君の方から呼吸音が聞こえてきた。

「スー……」

「ね、寝ているだけ……？」

なんだ。寝ているだけですか。心配して損しましたよ。

……やつだ。心配せられたんだから、お礼をしなくちゃね。

やつ。西園寺は西園寺の前に座る。

やつ。これはこんな所で寝てる西園寺が悪いんですよ。

……

（JRから西園寺視点（もとの形）

じぱりくたつた。

「ふあ……」

ん、俺は少し寝てしまつたよつだ。  
それで、高科は来てたのかな？

俺はゆりくつ身体を起しじ、周りを見回してみる。  
向ひの方に、何かから逃げてゐるよつな高科がいた。  
何か袋を持って。

一体どうしたんだ？

「おこ、高科ー。」

この言葉を聞いて、高科の身体が一瞬ビクッ！と跳ねる。

「え、あ、西園寺君、もつ起きたの？」

「どうしたんだ? そんな詰まつたよつた言ひ方をして  
「あ、いや……ちょっと」

なんだか俺と距離を置いている。  
むづ、何か悪いことしたか俺?

「もしかして、外で何か事故でも起つたのか? 高科ならやつそつ  
だもんな」

「まさか! あたしはそんなへやをしないですよー。」

なんだかムキになつて否定されてしまった。  
じゃあこの微妙な距離感はなんなんだ?

「……」

なぜか高科は斜め上を向いている。  
怪しそう。絶対何か隠している。

「なあ、高科。何かないのか?」  
「へー? あ、そ、そうですね……」

高科は考え込み始めた。

いや、なんで考へる必要があるんだ?

「なら、これで許してもいいことにしちゃうー。せー、これー」  
「これは?」

俺は高科から小包を貰つた。

やけにきれいにラッピングをねてるけど……何だ?

「さっき外で買つてきたお菓子ですよ、お菓子ー。」

「ああ、やうなのか。確かに甘い臭いがするな。ちなみに、返せと言つてももう戻せないが

「らな」

「別にいいですよ」

どんなお菓子なんだろ。部屋に持つてつても面倒だし、後で食べ  
るか。

「それじゃ、あたしはこれで退散しますね！」

「あ、もう行くのか？」

「行かなくなしてす」「行かないと行かなくなしてす！」

タタタタタタタタ

なんだかよく解らないことを言つて行つてしまつた。  
最近なんだかおかしいな。今度会つたら訊いてみるか。  
それより今は……

「お菓子だ！」

なになに、シールが貼つてあるぞ。

「えつど、S-t Valentine?なんだこれ、セット ヴ  
アルエンチン?」

どつかの店の名前かな？中身はチョコレートのようだけど。

とりあえず食べてみる。程良い甘みが口の中に広がった。うん、チヨコレート食べたのな

んて久しぶりだな。

ま、感謝するか。

食べた後に俺は寮へ帰った。  
すると、荷田君にめちゃくちゃ笑われた。鏡を見て来いと言われた  
ので、言ひとおりに  
してみると、油性ペンで顔に落書きされていた。

……今日のおかしい態度はこれだったのか。

第23話 「テストとその後 後編」（後書き）

yoridukiです。

実はこの11月からテストが5つ＆受験勉強が合い重なつて、  
更新速度が劇的に遅くなります。申し訳ありません。

12月からはまた頑張りたいと思います。

あと、このキャラの出番すくねーだろ「コルマー」という方は、  
感想の方に宜しくお願ひします。  
頑張つて検討はしてみます。

## 第24話 「でシ」

その男は、崖で”何か”をやっていた。

その動きは、非常に洗練され、なんとも無駄のない動きだった。

……シユツ！ ……シユツ！

その男は親切高校の教師であった。

その動きを見ていた俺は、不思議と身体が疼く つてことはない

が。

あれは拳法かな？なんで先生が拳法をしているんだ？

話は数日前に遡る。

「ねえ、パトラッショ田君。俺、もう疲れたよ……」

「誰がパトラッショ田でやんすか！そんなこと言わずに真面目に授業を受けるでやんす！」

んな事言わてもなあ。そもそも先生が何を言つてるかも分からな

いじ。

「じつせ生物の授業受けても受けなへても一緒にまだよ……

「と、まあパ田君は俺の心が読めるから何言ってるかわかるよね?」「パ田つて誰でやんすか。まあ質問の答えとしては分かるでやんすよ。だからと言つて

授業をないがじひしてひめだめでやんすよ

「じつせりパ田君は真面目なようだ。

いや、もしかしたら俺が不面目なのかな?

ああ……むつ寝よつかな。

「結局寝るでやんすか

「まあね。ほらあれを見てみろよ。越後だつてあんなにやすりかで寝ているんだよ?」

俺の指先にほぐすすりすやすりと開いてこる越後がいた。だから成績が伸びないんだよ。

俺が言えた事じゃないけどな。

「それこ、元にじつせ俺が授業聞いたつて理解できないしな」「いつも思うでやんすが、西園寺君や越後、吉田たちじつせりがこの学校に入学したんでやんすか?」

「……ほめられてしまった。こせ、照れるなあ。

「……ほめてないでやんすよ

パ田君が何か言つてゐるが聞こえなことにある。

「もつ任せんでやんす。……そつこえれば生物の善先生つて個性的な顔してゐでやんすよね」

……俺は寝ますよーっと。

バシッ！

叩かれた。

「ちゃんと人の話を聞くでやんすー！」

「パ田君も俺と話したら点数下げられるんじやないか？」

「まあ話をしたら確かに怒られるでやんすけどね」

ほりやつぱりそつだ。ならこれ以上俺に触らないでくれ……

「いいから見るーでやんす」

「はいはい分かつたよ。まあ確かに個性的ではあるけど」

確かに善先生の顔はスルーできないな。ん?なんだあれ?おでこに

……傷?

「昔の怪我でやんすかね?」

「いや、焼印つぽいけど」

……  
どつかで見たことあるな……  
一体なんだつけ。

「うーん、あー思い出したでやんす！あれば拳法の映画でやんすー…」「あ、そうだそうだ。拳法の映画にそういう人出てたな。」

そう、金粉の人と闘うシーンが印象的な映画だつたはずだ。  
けど、あの人そんな映画に出てたのかな？

「そ、それは無いでやんすよー。」

「なんで？パ田君」

「そういう人はそれ相応のオーラがあるはずでやんす！それに顔だつて」

顔は失礼だと思うんだが。

まああの顔であれば……ちょっととな。

いやいや、人を見た目で判断するのは良くない！つてじつちゃんが言つてたような気がする。

「もしかして……」

「無いでやんす！そんなの絶対にあつてはダメでやんす！」

「やけに否定するな……」

実はパ田君のおじいちゃん……つてわけはないな。

そしてその数日後。

「いくよ、荷田君ー」「  
「オッケーでやんすー！」

カキーン！

俺たちはノックの練習をしていた。

「もひー球いくよー」

「OKでやんす！」

カキーン！

荷田君はキャッチャーなのにノックをしているのには突っ込まないでほしい。

つと、ちょっと遠くに飛ばしそうだ。

「あ、いつたでやん……す！？」

「やばい！」

なんと俺が打った打球は荷田君の上を越えて、その奥にいた善先生の方に向かつて行つた。

やばい、先生は気づいてない！

「先生！ボールが！」

大声で叫ぶも善先生には届かなかつたのか、こつちを振り向かないで歩き続ける。

もうだめだ、そう思つた時。

パシッ！

素手なんとまきれいにキャッチをした。

……え？

「西園寺君返すでシよー。」

善先生から俺に返球が来た。  
ノーバンで。

おい。俺今ホームベースに立ってたよな？で、善先生はだいたいレ  
フトの奥深く。どうや  
つてここまでノーバン返球できたんだ！？

「す、す、す、善先生！きれいな返球でやんす！

まあいいか。

にしても善先生は森の方に入つてピリリと行くんだろう？  
あとでつけてみるか。

そして現在に至る。

そう、善先生が崖で拳法らしきものの練習をしていた。  
少しすると、善先生が手を止める。  
あ、一旦休憩するのかな？

「ふうひ……。」

.....

しばらく沈黙が続く。

「 そこ見てる者、でてんでシー。」

「えつー。」

「 あそこから50m離れていたの? 一体どうことだ? 後ろに田もりにいるのか? 」

「 隠れても無駄でシ。ここのは分かってるのでシ」

「 僕です。先生」

「 しうがないので顔を見せる。」

「 なんだ、これから面白くなりそうだつたの? 」  
「 もしかしてここから海の水を割る……とか期待したけど、それがこ  
無理だな。」

「 いへりできたとしても三へりだね! 」

「 君は……西園寺君。なぜ公ン公ソ隠れて拳法の練習を見てたでシ  
? 」

「 やつぱり拳法なのか。」

「 偶然通つただけですよ。でも、拳法をやるなとビックリしまし  
た」

「 ……なんで拳法つて知つてるでシー? 」

「 こや、わざ自分で言つてましたよ  
え? 」

「 こや、わざ自分で言つてましたよ  
え? 」

うん。普通に言つてた。自爆したんだな。

「……。ま、まずいでシ。ダメでシよ。絶対此の事を他の人に言つてはダメでシよ!」

「は、はい」

どうしてだ？なんか秘密があるのかな？  
ま、どうでもいいけど。

「約束でしょ！約束を破つたら評定を下げるでしょー。」「分かりました」

タタタタタタタタ  
.....

「そう言つて善先生はどうかに行つてしまつた。  
なんだ、もつと話を聞かせてくれたらよかつたの」。  
まあ、話したくなさそうだったけど。

「生物の評価……俺はこれ以上下がり様無いんだけどな」

少し自分自身に悲しくなりながら、俺は寮へ帰った。

「えー、だからこのDNAは 」

今日も善先生の授業を受けている。

DNAって言われてもねえ。俺には何が何だか分からない。そんなことよりあの空を見てよ。今日は雲ひとつない空だ。

「西園寺君。変なこと考えてないで授業に参加するでやんす」

荷田君に注意された。

まあ変な事を考えていたのは自覚していた。  
今さらだけど何考えてるんだ、俺。

「つまり、このトロメアが……なのでシ」

そういうえば善先生のでシって語尾。

あれ珍しいな。なんとも不思議な語尾だ。

……結局俺は授業を受ける気がないらし。

しうがない、いつものようにバラバラ漫画を描いくとか。

「ふーん、けつこう絵が上手いんでやんすね」

いきなり隣の荷田君がこちらを向いてきた。

そりゃそうだ。俺は何年間いつしてパラパラ漫画を描いてきたと思つてゐる。

小学校のころからずっとひそひそて描いてゐるのだ。

「やー、やあんと授業を受けるでシ」

「……はー（でやんす）」

怒られてしまつた。

そのまま荷田君は前を向くが、俺は結局描くことをやめない。

うーん、何を描こうかな？

普段は野球を描いてるけど、これは趣向を変えてサッカー……いや、バスケでもいいかな。

「……やー。真面目に授業受けるでシ。次は無いでシよ?」

おお、怖い怖い。拳法をやつてる人の脅しが怖いよ。  
けど、2度あることは3度ある……そんな命知らずな事はやめておくか。

しづがないので俺はパラパラ漫画を描くのをやめた。

黙々と授業を受ける。

キーンゴーンカーンゴーン。

終わりのチャイムが鳴つた。

ああ、やっと終わったよ。長かったなあ。  
頭が痛い……

「それじゃあ今日の授業はここまでシ

そうこうして善先生は教室を出て行く。

そういうば、前回のあの話。あの秘密結団聞いてないな。  
ちょっと聞いてみるか。

俺は廊下に出て善先生に近づく。

「善先生」

「ん、何だ君でシか。……何か用でシか?」

善先生は少し警戒しながらもさういちに身体を向けた。

よし、話は聞いてくれそうだな。

「わついえばあの拳法の話はどうなったんですか?」  
「…………せ、生物の評価点を下げるでシよ!」

やつぱりそう来たか。

でも、それは俺に通用しない!

「俺、今生物は最低ですか?」  
「…………わ、分かったでシ。そのかわり、絶対に約束は守るで

シよ!」

「俺も男ですから」

俺が一步上回ったようだ。

なんにせよ、これで先生がなぜ拳法をしているかが分かるな。

先生はため息を一回つく。そして話を始めた。

「とある山奥に……いくつもの頂を越えたその先にある古の寺院、その寺より出でたる僧、吐ぐ息は砂塵を巻き起こし、打ち出す拳は岩をも碎き、脚を踏みならせば大地は揺れ動くと、いう寺院、その名を『少森寺』。一歩踏み入れれば、死ぬまで出ることの叶わぬ場所」

「よく出てこられましたね」

先生はそんなんす」といふにいたのか。にわかに信じられないけど。

「いや、昔の話でシ。今はそこまで厳しくないのでシ。とにかく、そんな伝説の残る寺で、私は修業をしたのでシ」

「なるほど」

「先日のあれは、少森寺にいた頃の修行でシ。あの寺を抜けてからも1日に1回は練習をしないと落ち着かないのでシ。あの山を下りてから10年も経つというのに……でシ」

そのまま先生は続ける。

「私が最初入門した当時は初歩の修行にも全くついていけず、たった1杯の飯さえ喉を通らなかつたでシ。それでも自分を変えるため、数々の苦行を乗り越え、ついに私は……」

「あの、ひょっとして言こながう結構喋りますよね」

中々に長い。もつと短い話だと思つてた。  
それに、次の授業も始まりそうだしな。

「……お、思わず口が滑りそうだったでシ。これ以上は誰にも  
言つてはいけないのでシ」

む、これ以上は聞かせてくれなさそうだ。  
なら、ちょっとせこいが

「まあまあいいじゃないですか。じゃないとみんなにも話したくな  
っちゃいますね。ショーシン  
ジのハナシ！」

これを言つたら先生も続きを聞かせてくれるだろ？。

「ぐつ！……なかなかにせこい手を使つでシね。……分かつたでシ。  
昼休みに屋上にくるでシ」

以外に簡単に折れてくれたな。  
ま、昼休みに屋上に行くとするかな。

「きたでシね。不本意ながら、続きを離すでシ」

「それで、苦行を乗り越えてどうなったんですか？」

「私は得たのでシ。その実力を師匠に認められたものだけが挑戦できる、『少森寺ハ連闘』の

権利を」

「ハ連闘……8人の僧と闘うんですね」

「そ、そうだし。何で分かつたでシ?」

「名前から想像しました」

「……!…」

いや、名前がそのままだし。

むしろ分からぬ人の方が少ないんじやないか。

「と、とにかく私は少森寺の達人たちと試合をすることになつたんでし。しかし、それが行われる前日に……」

「前日に?」

「一体何があつたんだ。

「怖かつたのでシ。かつては生きて帰つてくる」とすら難しいと言われたこの試練。万が一のことがあつたらと考えてしまつて……!…」

逃げ出した訳か。

まあそりやそだよな。そんな言い伝えがあるならねえ。

「その翌日に寺がどうなったかは分からぬでシ。ただ、ひたすらに山を下りて、たどりついた

先が

「この親切高校だつたんですね」

「そうでシ。……今でも夢に見るでシ。あの時、逃げださなかつたら、八連闘をしていたら。もしも負けていたら……」

んなこと今さら後悔してもなあ。

「しかたないじゃありませんか。死んだら元も子もないですし」「そ、どうぞ」

「アリですよ。先生は」の教師として立派に生きていた。それでいいじゃないですか。誰にも恥じぬ」とは無いと思こますよ」

うん、自分がいいまとめ方だ。

「……有難うでシ、西園寺君。」このことを話したのは君が初めてでシ。逃げたことで卑怯者と思われるのが嫌で、誰にも言えなかつたでシ。まさか、君みたいな学力の子に教えられるとは」

が、学力は関係ないだろう！？  
ひでえ。

「でも、なんだかすつきりしたでシ。」

「生意氣ですいません」

「いや……本当に楽になつたでシ。おかげで今夜はいい夢えお見れやつでシ」

キンコーンカーンコーン。

「おっヒ、鳴ったでシね。それじゃあ行くでシー。」  
「はー」

善先生は校舎の方に戻つて行つた。

にしても、あの顔で拳法か。……似合わないなあ。

## 第25話 「少森寺」（後書き）

結局前と更新頻度が変わってない気がするけど、サボってるだけです。

## 第26話 「黒い塊」（前書き）

もし脱字や誤字、その他諸々指摘があつたら宜しくお願いします。

俺たちは今日も練習があった。

「はあ、今日も練習があるでやんす」

「やれやれだぜ」

「まあそんなこと叫ばねえで頑張ろ」

毎日のようにある練習に嫌気がさしながらも、俺たちはグラウンドへ向かった。

とは言つても、この学校に入れば、否が応でも部活に入らなければならぬいため、結局

どの部活でも毎日練習漬けになる。

しかも一年生は雑用ばかりなので嫌気がさすのは当然だ。

……まあ野球部はその中でもとりわけきついのだが。

「しょうがない、西園寺。練習終わったら自主練に付き合つてくれ

よ

「ああいこよ

もちろん雑用だけじゃつまらないのさ、俺たち一年生はいつも自主練している。

疲れてる時は無理だけど、少しでも早く上手くなりたいからな。

「それじゃあ一人とも早く行くでやんすー！」

おっと、早く行かないと練習に遅れてしまつた。

俺たちは少し早足でグラウンドに向かった。

「どうだ？ 今日も俺と練習しないか？」  
「またですか？」

最初がキャプテンの言葉。次が俺の言葉だ。  
どうも基宗キャプテンは俺を実験台にするのが好きなようだ。  
頼むから笑顔で話しかけないでほしい。  
前にやつたあの練習、あれでどれだけ酷い目にあつたか覚えてるんだからな。

そのせいでキャプテンの笑顔は悪魔の顔にしか見えない。

「まあまあ、実験台になるくらいこいつじゃないか」  
「だんだん本音が出てますよー？」

実験台。

もつ元壁に殺る気まんまだな。

「結局何を言つても俺はやらされたことになるんですね？」  
「なんだ、よく解つてゐじやないか」

もつ元壁に殺る気まんまだなこので俺は覚悟を決め、先輩についてこへりと

にした。

さて、今日は一体何をするんだろうか。  
また無茶苦茶なものなのか、やる意味が分からぬものをするのだろうか。

そろそろまたもな練習をしてほしー。

「それじゃあここでしばらくここで待つてくれ

そう言われて待たされた場所は、グラウンドの中でも人が少ない場所だった。

どうもその新しい練習法は広い場所を使うらしい。

遠くで見ている越後や田島は何が起るんだろうかといひを見ていた、  
宮取や荷田は  
こっちを見て手を合わせている。  
確實に御愁傷様、と考えているな。

しばらくすると奥から基宗キャラブテンがバッティングマシンを持つてきた。

それだけ聞いたら普通だと思つたが、やつぱり普通ではなかつた。

では、どうがおかしいのか？

数だ。なぜかバッティングマシンを5台持つてきている。  
今から何をするんだ？ 一回で5個の球を一気に打つとか？  
それとも、高速で連続バッティングとか。

だが、そのバッティングマシンは、俺を囲むように設置された。

今そのバッティングマシンを起動させたら間違いなく俺は危険な目に遭うだろ？

「で、このバッティングマシンは一体何ですか？」

「ふふふ、聞いて驚くな。実はこの中には鉄球が入ってるんだ。野球のボールじゃないぞ」

……ワンモアプレーーズ。

「実はだな、とある本を読んでいたんだが、木にぶら下げた鉄球をバットで打つという練習法があるらしいんだ。だから、俺はそれを守備面で使ってみようと思つ」

やつぱりとんでもない発想だつた。

この人、勉強は出来る方なのに、なぜこいつは無茶な事を簡単に思いつけるのか。

その発想力がすごい。これこそまさに『発想の暴力』だな。

「これを平氣で捕れるようになれば、きっとお前はどんな球でも平氣で捕れるようになる

はずだ」

「その発想は危険だつていいかげん氣づきません？」

「知らんな」

ひ、ひでえ。

この人……あれだな、将来はマッジサイエンティストだな。にしても、なんか俺落ち着いてるな。自分でもびっくりするほどだ。たぶんもう諦めてるからなのだろうけど。

「キャ、キャブテン？」

「何だ？」

「今さら思って直す……なんてことはないかなー、と」

一応訊いては見るが、ただの時間稼ぎだとこいつのは自分でも自覚していた。

常識的に考えて、間違いなく怪我するだら。運が悪かったら眞界行きかもしれない。

「何を馬鹿な事を考へてるんだ、やつをやめ」

俺の言つた言葉は馬鹿げていたらしい。

うーん、俺は馬鹿な事じやないと思うんだが。  
皆はびつ題つかな？むしろ俺の方が正しい気がする。

ぐつ、何か助かる術はないのか……

「そ、そうだキャブテン！」

「まだ何かあるのか。早くしてくれ」

キャブテンはバッティングマシンの調整をしていく。

とりあえず話しかけたものの、話す内容は考へていない。  
くそ、何か、何でもいいからないのか！

その瞬間奥でこつちを見ていた田島たちと田が合つた。

「あの、他の田島や荷田君たちはずやらせないんですか？」「もちろんお前が成功したらやせらせるつもりだ」

あ、成功したらやるのか。

あこつらのためにも頑張つてやつてみよつが。

俺の苦労を分からせてやらないことな……じゃなくてー。

今はこの場を切り抜ける方法を見つけなこと。

いや、無理だとこつのは分かってるナビ。

どうやらバッティングマシンの調整が終わつたよつで、基原キャプテンはゆつくつと腰を上げる。

話しかけるなりこねがラストチャンス！

「キャプテン、なんで鉄球でやるんですか？」  
「やついえばそつだな……」

お、これはいけるか？

あまり意味が無いよつな『』がするが。

「あれじやないか？鉄球は重いから、ちやんと離せなこよつことこじことじやないか？」

「なら、打つときはなんで鉄球なんですか？」

キャプテンは黙る。

そのまま少し考えるべぶりを見せてこるが、これは『なぜ鉄球のか』を考えてはいな  
いだろ？。

わつと考へてこるのは『じつ反論するか』だ。

しづくへると基原キャプテンは顔を上げた。

「別にそんな」とはいんじやないか？」

うわあい。

キャプテンは目先のことしか興味が無いようだ。

しうがない、俺も男だ。覚悟を決めるか。

「お、いい顔だな。それじゃあやるか」

「はい」

そう言つてキャプテンはスイッチを入れる。

さて、どうするか。

キャプテンはなかなか遠い場所に正5角形状にバッティングマシンを設置している。

近距離に設置してくれていなければまだマシだが、それでもヤバイ状況極まりない。

だが、俺はやつてやる！

とりあえず両手にグローブを持ち、前から飛んできた鉄球を受ける。その次に右から来た鉄球を使い慣れない右手でキャッチすると同時に、

俺の左腕はガクツと下がった。

て、鉄球重つ！

なんとか左のグローブから鉄球を落とし、右手の鉄球を落とす。

（よし、次！）

そう考えた矢先、いきなり右後ろと左後ろから一斉に音がした。ふりむくと高めの位置に鉄球があつたので伏せることで直撃は回避

したが、残念ながら

伏せた瞬間に左から足元めがけて鉄球が飛んできた。

「ぐつー。」

脚がふらつき、急いで体勢を立て直すが、時すでに遅し。最初前にあつたマシンから勢いよく鉄球が飛んでくる。ついでに後ろや右からも。

「うおおおおおおーーー黒い塊が飛んでくるううううーーー。」

…………その後は思い出したくもない。

「いや、災難でやんすね」  
「ほんとだよ……トホホ」

不幸中の幸い、打ち身程度で済んだ。もうあの人付き合いたくない……  
いつか殺されそうだからな。

## 第27話 「その男の回復力」

「よし、今から練習をするぞ!」「ハイ!」

学校の授業が終了し、グラウンドでユニフォームに着替えた俺たちは、基督教徒の会団のもの、練習を始めた。

2年生は肩慣らしにキヤッチボール、1年生はグラウンドの周りをランニングしていく。普段、監督が来ていない時はこのようなメニューから始まる。まあ普段通りランニングしていた訳なんだが……

「ファイトだファイトだ親切高!」

タタタタタタ……

俺は掛け声をいいながら走る。

「ファイトだファイトだ親切高!」

タタタタタタ……

官取は掛け声をいいながら走る。

「ファイトだファイトだ親切高！」

タタタタタタタタ……

謎の外人が掛け声をいいながら走る。つてちょっと待て！

「誰だあんた！…どつから入つてきた！」

「オウ！自己紹介が遅れました。ワタシ、野球の伝道師アルベルト、  
イイマース！」

いやいやいや、自己紹介とかそういう問題じゃなくて。  
しかも野球の伝道師だつて？意味が分からん。

まあどうでもいいが日本語上手いな。

たぶん日本に来てからしばらくたつてるんだろう。

「で、その不法侵入者のアルベルトさんがこの学校に何の用ですか  
？」

「オウ、あやうく用事を忘れそうでした！」

どうやら用事があるらしい。

つまり、誰かの親……？こんな金髪天パの外国人が？  
あ、新しい英語の先生とか。  
にしてもこんな遠いところによく来たな。

「で、その用事って一体？職員室とかになら案内しますが

「いや、それはダイジョウブデーズ！それじゃあいつもの事ができ  
ませーン！」

「い、いつも？」

いつもって何だいつもって。

実は毎回この学校に忍び込んでたりしないよな。

「それじゃあ今から野球のことを教えてあげマース！」「え、野球！？」

なら監督が新しく呼んだのかな？

どうせよ教えてくれるのならありがたいが。

そしてアルベルトがそこへんにあったボールを拾い、1年生と少し距離をとる。

（おー、これどうなつてるんだ？）

官取に訊かれた。

と言われても俺が知るはずもない。

（まあいいんじゃないか？）

とつあえず官取に返事をしておぐ。

「それじゃあ今から投球の極意を教えマース！」

アルベルトが左足を高く上げ、踏みこんでから腕を思い切り振った。それはなんともきれいなフォームだった。

ビシュ！

「へえ…すご~くきれいなフォームですね！見直しました！」

そう言つて俺はアルベルトの方を見た。

だが、そこにはさつきと違つてなぜか腕を押さえついて、なにか困つたような表情をしていた。

一体どうしたんだ?

「アウチ……」

「?」

「手の骨が折れました。きゅ、救急車を呼んでくだサイイ」

……たつた一回投げただけで?

「は、早くお願ひシマース」

そ、そうだ。先に救急車を呼ぶのが先だな。

丁度よく監督が出てきたのでそのことを伝えると、じょじょにして救急車がやってきた。

まあそのまま外人さんは運ばれていったのだが……

何がしたかったのだろ?。

その数日後。

「遅いでやんすよー今から練習が始まるでやんす！」

「ああ、悪い悪い、ちょっと森の方に行つてたんだ」

「わつちゅうとマシな嘘をつけないでやんすかねえ」

本当なんだけど。

まあいいか、今日は何をするんだろうな。

「そういえば前の外人なんだつたんだろうな」

「ああ、そういえばそうだな」

「本当にやれやれなやつだつたぜ」

やれやれなやつって何なんだ。

突っ込みたいが、無視することにしよう。

「まあ実力はすごかつたでやんすけど」

「まあか一回投球しただけで腕が折れるなんてね。そつそつ、あん  
なやつだつたけな？」

俺は向こうの塀の方を指さす。

たまたまそれっぽいやつが塀をよじ登つてきたから言つたんだけど、  
あのよじ登つてきた

男、先日あいつじゃないか！

「おい、西園寺。あれ先日のやつじゃないのか？」

「……そうだな」

うわ、もう骨折から回復したのか。なんという回復力。あ、監督が気づいてあの外人に近付いて行つたぞ。

「おい、部外者は出て行け。じゃないと

バキ！

監督が殴られた！？あ、一発でノックダウンした。監督大丈夫かなあ……じゃなくて！

あの外人 アルベルトさんがこっちに近付いてくる。

「ハロー、先日のボーイたち！今日も野球を教えに  
いや、それよりもなんで監督を殴つたんですか！？  
「あれば正当防衛」テース」

び、どう考えても過剰防衛……というか殴つただけだろ。

「まあまあ、今日はちゃんと教えますから落ち着いて下サイイ  
「普通落ちつけられるか！」  
「今日はバッティング指導シマース」

無視された。くそう。

今度はアルベルトさんがバットを探して周りを見回す。そしてバットを見つけたのか、  
どつかに歩き、戻つてくるが、その手には何もなかつた。

バッティングはどうしたのか訊こうと思つたが、先にあっちから口を開いた。

「ソーリー……さっき殴ったせいで指の骨が折れてしまいまシタ。救急車をお願いしまス……」

そこで俺はある結論にたどりついた。

この人、イタイイタイ病にかかっている＆馬鹿なんじやないかと。もしそうなら、意味不明な事をして骨が折れるのも理解できる。理解したくもないが。

結局しようがないので救急車を呼んだ。

はあ、もう来ないでほしい……

その数日後。

「おい、西園寺」

「なんですか？ 大河内先生」

「校長先生がお前の事を呼んでいた。だから校長室に行つて来い」「え！？」

お、俺何かやつたか？

後ろから荷田君や越後がジト目で見てくるが俺にも何が何だか分からぬ。

しょうがないので校長室に向かつ。

「失礼しま  
！？」

そこにいたのは、校長先生と、あの外人だった。

「おお、西園寺君か。この男は君の知り合いか？さつきから君を呼んでるらしいんだが」

「全く知りません！」

知つてゐるつていつちやあ知つてゐるんだが。  
骨が良く折れるくらいしか知らないけど。

考えたら俺こいつに名前を教えた覚えないぞ！？  
なんでこいつは俺の名前を知つてゐるんだ。

後ろでオーノー！そんなはずはありまセーンーとか何か言つてゐるが  
無視しておこづ。

「それじゃあこの男はつまみだしていいんだね？」

「はい」

「それは酷いデース！せつかくだから野球の極意を教えマース！」

そう言つてアルベルトさんはまた投手のポーズをし始めた。  
どうせまた骨が折れるんじゃないのか。

本人もそのことが分かつてそうだし、やらなきやいいのに。

だが、今回は少し違つた。

投手の動作をした際、アルベルトさんの足が机に当たつて校長先生に思い切りぶつかつた。

「うわっ……け、警備員ー！」の男を捕まえろ！」

校長先生がそのままと警備員が集まつてきて、アルベルトさんを取り囲んだ。

そのアルベルトさんはホワイ！？と言つてはが当たり前だつ。そして窓を突き破つてそのまま逃げてつた。

あ、転んだ。

今度は外の警備員さんに追つかれられてるな。  
お、けど……どうやら逃げ切つたみたいだな。

……

「結局あの人何者だつたんだろう……」

俺の言葉は校長室に空しく響いた。

## 第27話 「その男の回復力」（後書き）

いまやら考えてみたけど、文の最初に空白を空けるの忘れてた……  
といつあえずそろそろ一年生が終わりそつた雰囲気。

春が来た。

この『春』、といつのは別に彼女が出来たとかいつのではなく、単純な意味で春になつたということだ。

もう4月に入り、今日から俺はついに2年生だ。

「どうしたんでやんすか? 浮かない顔して」

「いや……昨日先輩が言つてたことなんだけど」

「ああ、あの」とやんすか

少しだけ話は遡る。

「おひ、お前うーせーと部屋に帰つてきたか

「は、はー。北乃先輩」

いや、部屋にいるといつも先輩にじーかれるからか、ぐるんをラブラしてゐるだけなんだが。

まあこんなことは言えたもんじやない。

「北乃先輩、何かあるんでやんすか？」

荷田君が不審そうに、そして不安そうな顔で訊いた。

「いや、別にねえよ。ただ、そろそろ学年が上がつて部屋の割り当ても変わるから、挨拶くらいは、と思つただけだよ」

「や、やうでやんすか」

ほつ、と荷田君は安心した様子だ。

確かに先輩にやつと帰つてきたかと言われるときせ、毎回なにかパシラれるからな。

にしておもひつ1年経つのか。随分と早く感じるな。これでよつやく練習も少しましになるだろ？

「この1年間、お前らなんかと一緒に大丈夫かと最初は思つたよ。でも、まあ楽しかつたぞ。お前らも次の後輩と上手くやれよ」

ああ、よつやく毎晩のハイキヤマッサージから解放されると細いつと本当にほつとするな。

来年からは後輩からも入つてくる。しつかりしないことな。

「ちやんと忘れずに部費も貢つておさよ」

ああ、そつだな。ちやんと部費も貢つておかな」と……つて、ん？一体どこに渡せばいいんだ？

「先輩。部費つて誰が会計してるんですか？」

「そりいえばそりでやんすね。特にそういう人を見なかつたでやんす」

荷田君が相槌を入れる。

「管理なんか誰もしてねえよ。あれは上級生が下級生からもりつボーナスみてえなもんだ」

あ、なるほどボーナスボーナス、つてはあ！？

「いいか、お前らも全部使わずに少しほはベンチにドリンクとかを残しておけよ」

「は、はあ……」

でも……本当にこれでいいのかなあ？

そして現在。

「確かに気が引けるでやんすけど、別にいいんじやないでやんすか？」

別に荷田君はたいしてなんとも思つてないし。

たぶん、荷田君はそんなことよりあることに興味が湧いてるのだろう

う。

「やうでやんす。そんなことよつクラス分けでやんすー。」  
「まあたしかにそつちにも興味はあるけどね」

俺たちはそれぞれのクラス分けの紙が貼つてある教室の前まで歩いた。

えつと俺のは……あ、あつたあつた。

とりあえずクラスメイトも確認しておぐか おつー。

「今年も荷田君と一緒にだね」

「そつみみたいでやんすね。越後や田島、官取に岩田もこるでやんす！」

野球部3馬鹿トリオがいた。

3馬鹿トリオとは、岩田と越後と俺だ。  
ちなみに全員分数ができない。

どうやって学校に入ったの？といつのは秘密。

「とりあえず教室に入るでやんすー。」

ガララ、と扉を開けて近くに誰かいいか探す。  
すでに田島と官取が来ていた。

「よお、お前らも一緒にクラスか  
「ああ、そつみみたいだな」

田島が話しかけてきた。

「にしても、何かおかしくないか？」

「あ、やつぱり？」

そう、クラス分けの張り紙によるとこのクラスは男子が16人だ。  
1年生の時は1クラス32人だったのに。

なら、クラス数を単純に増やしただけなのか？

否、机の数はやつぱり32個ある。

俺たちはそんな話をしてもしょうがない事に気づき、他の話をし始めた。

しばらくすると、担任の先生がやつてきた。

「どうやら今年も大河内先生らしい。」

「おはよう。とりあえず俺が担任の大河内だ。朝のHRを始めるぞ。」

「その前に、なんでこんなに席が空いてるでやんす？」

ナイス質問だ、荷田君。

「それはだな、今からここに女生徒が入ってくるからだ。こいつはと  
してはとても不本意  
だが……」

全然不本意じやないでやんすーと叫ぶ荷田君。

ふつと、今日から本当の意味での共学校になるのか。  
ま、どうせ変わらない日常+女子だろ。  
あまり俺には関係ないだろうな。

「それじゃあ今から女生徒を入れるぞ」

そういうて先生は廊下の方に向かつて入れ、と言つた。

さつき関係無いとは言つたが、やつぱりどんなヤツかは気になる。  
一応見ておくか。

ガララ。

そして扉を開けて最初に出てきたのは、なんとも大きい女子だった。  
……いや、まさか一発目が知り合いだと思わなかつた。

（でかい、でかいでやんす！ 190はありそつでやんす！）

荷田君が本人には聞こえないように言つ。

荷田君、その発言ものすごく失礼だぞ。あと、見た目で人を判断してるよな？

「えつと、大江和那です。よろしくお願ひします」

ペコリと頭を下げて、俺の方に歩いてくる。  
どうやら俺の左後ろの席らしい。

さて、次はどんな奴かな？

ガララ。

「神条紫杏だ。よろしく頼む」

……ドウイウコトナノ?

なんだ、この知つ合にシリーズ。こんなに世間は狭かつたのか。とりあえず神条はいつも通り白い制服を着ていた。

（監督生でやんすね。中々ちゃんとした人が来ないでやんす……）

荷田君が変な事を呟いている。

正直これが聞こえた俺は、荷田君に対する評価を下げた。

そして神条は大江の席の前に座る。……またなんとも近い席だ。

ガララ。

「高科奈桜です。面白い事があつたらあたしに言つてくれださこねつ  
ー。」

（なんとも新聞部っぽいやつでやんすね。お約束としてアイツに何かバレたら明日はみんなにそのことがバレてるってオチがあつやうでやんすね）

荷田君はまたしても何か言つている。

まあ確かにその線は否定が出来ないが。

そしてまさかとは思ったが高科は俺の右隣の席に座りやがった。  
いや、なんなのこの席？絶対落ち着かないんだが。

ガララ。

「浜野朱里よ。あ、私は男子が嫌いだから、近寄らないでね？」

（……おこりに春はこないでやんすか）

どうやら荷田君は諦めたようだ。

にしても、何か作為を感じるぜ。さすがにこれは酷い。  
この様子じゃ浜野も俺の席の近くに座るんだろうなあ。

予感は見事に的中。

今の俺の席の周りは、右隣に高科。左前に浜野、左隣に神条、左後  
に大江。

さて、次は誰かな……

ガララ。

「天月五十鈴。よろしくお願ひします」

あ、あれは前に夜の森であつた子か。

そしてふと荷田君を見てみると、ガツツポーズをしていた。  
どうやら気にいつたらしい。

そして天月は高科の前の席へ座つた。

まあ予想はしていたが、なんともまあ……すごい席だ。  
一応全員美少女ではあるが、正確になんともクセがある。  
荷田君が席を代わる、というような田つきをしていたがやめといった  
方がいいと俺は思う。

まあ、兎に角、1年目より大変な2年目が始まることとなつた。  
無事にこの1年間を俺は生き残れるのか？

## 第28話 「新しいクラス」（後書き）

念願の100000hitまであと……2週間くらいかな?  
とりあえず誤字脱字、文法の間違いがあつたらよろしくお願いします。

## 第29話 「槍使いVS拳法」

俺が2年生になつてから数日後。

特に休み時間にやることもなく、廊下でプログララしていた俺に大江が話しかけてきた。

「なあ、西園寺君。今ちょっとええ?」

「何?」

「あのせ、同じクラスになれたやん。あたしは結構嬉しかったけど。西園寺君はどうなん?」

微妙にはにかみながら訊いてきた。

俺としても大江が一緒に悪くは無いんだけども。ただ、他の奴らがなあ。

とりあえず質問に返答しようと思つたが、休み時間もやうやく終わるのと、周りに生徒

がいっぱいいたので、後で広場で返事をすることにした。

別に生徒に聞かれること自体はいいんだが、そこから高科とかに聞かれるとなつかいな

りそうだ。

「まあ、あとで広場で」

「あ、うん……」

放課後。

俺たちは大江が普段朝練をしている広場の方へ向かった。

こいつと一緒にいると警備犬が来ないから楽だ。

実は周りでガサガサという音はしたんだが、その音は俺らが近づくの分かるどどんと

遠くに行く。

ちらり、と横を見ると苦笑いで返された。

……こいつ。

やめてあげればいいのに、と考えていたら広場へ着いた。

「なあ、女子と同じクラスになつてどう思つた？」

大江が訊いてきた。

まあ男ばっかの教室よりは……いいんだが。俺の周りの席が濃いの多過ぎだろ、と思う。

「ずいぶんと華やかになつたな。なんというか花が咲いた、とい  
うか」

「あー、つまりウチはしそうめひまわつか?」

「いや、杉か松かと」

うん、よく的を射てこると思つ。

……仮にも女子にこれを言つたら不味かつたか?

「あー、なるほど。って、それ花とちやうがなー。」

一応軽く受け流してくれた。

殴られそうで少しビクビクしてた。

さすがに190cmの松に殴られたらひとたまりもない。

「あー、ともかく本題や。これから話をするとやせなこの広場でする」と元せえへん?「

「ん、何でだ? 別に教室でもいいだろ」

「ま、ひ、監督生や教師やが男女一緒にいたりひがめこやが?」

なるほど。

だが、まだ一つ質問が残つている。

「別に俺たち付き合つてゐるわけじゃないよな?」

「うん。それやけどひつと野球部じゃ疲れるや。だから、話をす  
る関係でええがな」

……それならいいけど。

「まああんたは何かとモテそつやから、すぐてウチが必要無くなる  
かもしれんけどな」

そ、そんなに俺見た目良かつたっけな?

とつあえず彼女はいないことは確かだが。

「前も言つたる、俺彼女いないつて」

「まあまあ、すぐ出来るようにならぬ」

ホントかね？

「ま、それじゃあ今後は日時を指定してハンドルの運転するわが  
だな」

「うん、わうやね……」

大江が急に後ろを振り向いた。

俺もその方向を見てみるが誰もいない。

……一体なんだ？

「……やこに誰かあるやう。出できこ」

そつと大江は草むらの方を睨む。

すると、その辺りからガサガサという音がした。

「キリ、気配を消していったワタシによく気づいたでシね」

びつやから俺たちの後をつけていたらしい。

いつのまに？

薔先生だった。

「いや、あのひ……たまたま影が見えたんで  
「隠さずとも言ひでシ。それにさつきの田つきといへ、朝の修練の  
ことも見たことがあ

るでシ」

ストーカーじゃないのか。

「大江さん。今日はキミにお願いがあつてきました」  
「えと、何ですか？」

困つたような顔をしながら、大江は善先生に聞いかける。  
「どうやつたら身長が伸びるかとか？」  
「組み手をお願いしてもいいでシか？」

……はあ？

「え、善先生。か弱い女子高生にそれはないんとちやいますか？」  
「さつき言った通り、朝の修練を見ていました。それに、このち  
ぎり取られた葉。ま  
るで壁のようにちぎり取られていますね」  
「あ、あれえ？ そんな風にも見えますね」

この感じ。俺場違いなんじゃないか？  
どつかに避難した方がよさそつかな

「お山を下りて10年。久しぶりに格闘家の血が騒ぐでシ！」

そんなものの騒ぐなよ……と思つていたら、いきなり善先生が近付いてきた。  
「ちよ、俺まだ退避してない……

「西園寺君、危ないから下がつといて！」

そういうて大江は先生に近付く。

いや、こういう時は男の俺が行くべきじゃないのか？  
とりあえず下がつてはみるけど。

離れた瞬間、なんかとんでもない攻防が繰り広げられた。

（ガガガガガガガガ！）

おお、大江の奴先生の攻撃を防いでるじゃないか。  
……！ うして見ると、まったく俺の入る場所が無いな。

しばらくすると大江が一回ちぢつとこつちを見た。  
ふうん、意外と余裕あるのかな。

ただ、そう思つた矢先に大江の腹に先生の拳が入つた。

「！！」

俺は大江に駆け寄る。

「ゴホッ……ゴホッ……ちょっと……シャレになりまへんわ、先生  
「いや、もうしわけないでシ……」

大江が苦しそうに咳き込む。

「先生は拳法の達人なのに、女の子の腹を殴るなんて！」  
「いやいや、別にいいから。こちこち先生の本気に答えられなくてすみませんでした。」

ほな、これで～「

そう言つて大江はどつかへ行つてしまつた。

いや、結構深く入つてたよな。  
大丈夫なのかな？追つてみるか。

「おーい、大丈夫か？」

タタタタタタ……

そして善先生だけが残つた。

「つうむ、わざと隙を見せて殴らせる場所を誘導するとは……なか  
なかやりまシね！」

そして、善先生と大江の戦いはしばらく続くのであった……

### 第30話 「新入部員」

ついに俺たちは後輩を持った。

その前から新入生はいたのだが、ここでは『部活で』と言つ意味だ。

今はみんな監督の挨拶を聞いている。

俺たちが入ってきたときにも聞いた、あの学校の方針と矛盾する挨拶だ。

「ビシバシいくから覚悟しておけー！」

「はーー！」

どうやら終わつたようだ。

ただ、俺はそこである人物に目がいった。

監督も同じ方を見ている。俺と同じことを考えただけだ。

そいつは、ただぼうっと立つていて、監督に返事もしていなかつた。

……なんとも態度が悪い。よくあの監督相手に出来るな。

さすがに今日初めて会つたとしてもどんな感じの人かは分かるだろう。

「おー、そこ。じつして黙つている？」

「すいません。長い話はひとつも苦手で、途中から寝てました

「！？」

命知らずだな、と思ひ。

それが単に大物なのか。後者なら野球部として嬉しいのだが……

「西園寺君。立つたまま寝れる人つておいら初めて見たでやんす！」

「突つ込むところはそこじやないだろ……」

まあ確かに珍しいのだが。

……つて俺も流されてる場合じやない。

「ひきた 足田 光司か。ふん、その口に見合つ実力があるか見ものだな」

「任せて下さいよ」

ふうん。足田……か。どつかで聞いたことがあるな。

そうだ、確かに中学で乱闘事件を起こして星英高校の進学を取り消されたハズ つて、

それってつまり、そういう実力はあるつてことか。

そして、実力を試すことになつた。

「今から10球投げるぞ」

どうやら足田は外野手のようで、打撃テストを受けることになつた。個人的にはピッチャージやなくて少しほつとしたが、もしあいつがピッチャードとして

も、もちろん俺は負ける気は微塵もない。

「にしても、中々生意氣そうでやんすね」

「生意氣そ、じゃなくて実際生意氣なんだろ。監督の話をあんな態度で聞いてる時点で分かってることだけどな」

俺と荷田君が話しているうちにテストが始まっていた。

カキーン！カキーン！

「へえ、結構やるな」

「きっと、中学生から硬式の練習をしていたんでやんすね。ま、あの星英高校にスカウトされるくらいでやんすからねえ」

ん、荷田君知つていたのか。

結局10球中5本がヒット性の当たりだった。

そのうち1本はホームラン性。

他の1年と比べると実力は全然違うのが分かる。こいつはめちゃくちゃ上手い。

「どうです、監督」

「ああ、正直がっかりした」

えつー？

「お前もなかなかなものだが、俺は前に天道を見た。アレと比べればお前の実力はそんなにたいしたものじゃない」

そりやアイツと比べたら誰でも霞む気がするが。ま、俺はあいつに勝つてみせるけどなー！

「天道？ああ、アイツなら中学の時1回試合しましたけどその時の印象なら俺の方が上

でしたね

「なるほど。ならその大口に見合ひ程度の成長を期待しておへか  
「ええ、任せせて下さー」

そうこうして俺たちは普段の練習に戻った。

「そういえば、今日から新入生の部活もちゃんと決まつたでやんす  
から、おいらたちの

部屋に新入生がやつてくるでやんすねー」

「おーおー……いへり雑用をやつてもううつて言つてもムチャクチ  
ヤしたりするなよ?」

「それへりには分かつてゐでやんすよ

……なんだか信用できなーい。

ちなみに、俺と荷田君は今年も一緒に部屋だった。

3年生はいなかつたので、俺たちとしてはすこく楽だが、あとの一  
年生に頑張つてもら

うしかない。その一年生、御愁傷様。

しばらくして練習が終わり、俺は荷田君と自分の部屋を戻つて行つ  
た。

前までは寮の1階だったが、今年からは2階になつた。

おかげで毎日階段を上り下りの手間は増えたが、なんとなく景色の  
いい部屋になつた。

とくに部屋で何もすることのなかつた俺たちは、たわいもないビデ  
でもいい会話をして

時間をつぶす。

どんな会話かと言つと、蛇みたいに進む変化球を作つ、とか、遠

心力をフルに使い回

転しながら球を打てないか、などとこゝ本当にいい会話だつた。

そのまま話を続いていると、

「ンンン。

と、突然ドアをノックする音が聞こえた。  
きっと新しい新入生がきたのだろう。

ガチャ。

「ちーっす！」

「え？ お前が同室の一年生なのか？」

「ええ、そうみたいですね。一年間よろしくお願ひします」

なんとやつてきたのは問題児の疋田だった。  
どうでもいいが『疋田だった』って言いにくいいな。早口言葉に使え  
そうだ。

（西園寺君、こゝは同室の先輩として一発ガツンとかますでやんす  
！）

荷田君がこゝそりと話しかけてきた。  
と、言われても……どうするべきか。

（せひ、早くするでやんす！）

自分でやつやあここのに。

「よし、今から俺が先輩としてお前に社会勉強をさせてやるわー。」

「よしがない、一応やつてみるか。

（うわ、本当に言つたでやんすー。）

荷田君が何か言つてるが、それは後回しにする。

本来ならすでに殴りかかつてやろうつかと思つてゐるといひだが、今は  
そうはいかない。

足田の「」とをなんとかするのが先だ。

「いや、今は別にいいです」

「え、あ、そう?」

「はい。それじゃあ今から俺はランニングに行つてきまますんで

「ランニング? 今から?」

「もちろんです先輩。すでに甲子園への戦いは始まつてゐるんですよ

！」

そう言つと、足田は外へ行つてしまつた。

……一年間あいつと一緒になのか。

「前途多難でやんすね」

「だな……」

「よしがないので俺たちは先に寝ることにした。

翌日。

「もうこえは、クラスでペラヒツのむらひたんですナビ」

足田が話しかけてきた。

やつこえは俺たちも昔北乃先輩に取られたな。  
こつこつ時にとつておけ、といつことなんだろ。ひ。  
足田には悪いが、餌食となつてもいねつが。

(なんか悪役っぽいでやんすよ)

……最近荷田君がウザキヤリになつてゐる氣がするが、そひはまたも  
や置いておく。

「やうか。それじゃあ部費として

「あげませんよ」

え?

「同じクラスの奴が同室の先輩からペラを巻き上げられたって言つ  
から、俺、調べてみ  
たんです。そしたら、監督がそんなもの必要ない、と」

「……」

本当に生意氣だな。

「ああ、それと。俺、雑用はやりませんので。自分のことは自分で  
お願ひします」

「ふ、ふざかる感じがないでやんすー。」

荷田君が怒るのはもつともだ。

疋田のこの行為は俺たちの努力と苦労の1年間を無のあらへんと  
だからな。

「ふざけてませんよ。それじゃあ、俺行きますんで」

スタスタ……

荷田君の話を軽く受け流し、疋田はそのままじかく行つた。

「西園寺君、昨日と会わせて一度田にならでやんすけど……前途多  
難でやんすね

「……ああ」

教室ではじけんなつてつな感じだったから、寮では、ヒートしたのこ  
……  
ビツヤーハ、俺は運が悪いのかもしれない。

### 第30話 「新入部員」（後書き）

いつも通り誤字、脱字があつたら宜しくお願ひします。  
あ、ついでに評価も……なんて欲張りなことは言えないけれど。

### 第31話 「それはとある紙切れから」

「ふあ～あ……」

新しいクラスになり、だいたい1ヶ月がたつた。

今日はみごとに晴れ、さらに暖かいのでとても眠い。  
まあ眠いのは他にも理由があるのだが。

例えば、1時間目に寝ていたら、起きた時に顔に落書きがあつたと  
かだ。

ほかにも授業中に寝よつと思つたら神経が起きてきたり、邪魔が  
いつも入るのでいつ  
ものよつに寝ることができない。

向ひひでぐつすり寝ていた越後が羨ましい。

そして今日は部活が無い。

本来なら寮に戻つて昼寝といきたいのだが、残念なことに用事が入  
つた。

すつぽぬかしてもいいのだが、面白うなのに行くことにした。

現在向かっている場所は森だ。

用事、といつても誰かと一緒に行くわけでもなく、ここに来いと指  
示されただけだ。

その場所の地図を書いただけの一枚の紙切れに。

「森の場所を普通地図で表すか？分かりにくいつたらありやしない  
……」

ぶつぶつと一人で文句を言つ。

こんなことを誰に言えばいいのか分からぬが。

獣道をじぱりく歩く。

途中で警備員さんに会いそうになつたが、なんとか切り抜けた。

そう言へば、前に高科が言つていたな。

たしかこの森には白いシカ（だつたはず）が住んでいふと。  
今から用事を無視して探してみようか。

高科によると森の守り神らしいし、会えたる御利益でもあるんじや  
ないだらうか。

そういつしてゐ間に地図に載つてゐる場所についた。

そこは、広場のような場所だつた。

なんとも不思議な感じがする。ただ、悪い感じではない。

あれか？マイナスイオンとかそんな感じか？

森の中にこんな場所があつたのか。

これは地図なじじや絶対にたどりつけないな。

でも、一体誰がこの紙を机に入れたのかが分からぬ。

学校にいる時、俺の周りの席の人にこの紙を誰が入れたのか聞いて  
も知らないと言われ

たし。

高科は知つてゐみたいだが、教えてくれなかつた。

「ふふふ、よく来ましたね。ワナと知らずに来るとは、なかなか勇

「気があるよつですか」

「……ああ、紙を入れたのはお前だつたのか。  
そりや、教えてくれない訳だな。」

「うん、きつと1時間目に俺が寝ている間に入れたんだよつ。  
俺は教科書を使わないから机に入れられたことに気づかないのを知つていたんだろう。」

それに、俺に落書きをしてる時に入れたのなら、誰も気づかない訳だ。

まあ、とりあえず。

「何を言つているんだ高科  
「呼びだしたら1回くらい言つてみたいと思ひませんか？男のロマンですよ」

お前女じやなかつたのか。

「それにしても、森にこんな場所があつたんだな。よく見つけたな  
「うん。この場所は偶然見つけたの。きれいでしょ、何もなくて」

なるほど。

偶然でこんないい場所を見つけたのか。

「じつやうじこつは俺よりラック値が高そつだ。

「あたしね、この場所がこの学校で一番好きなんですよ。ビニにだつて、何にだつて、大事なものが1つでもあれば、それを好きになることができるでしょ。だから、この場

所があるから、あたしはこの学校が好きなんですよ」

そっか。

ここいつなら教室とかの方が1番好きそうなんだが、そいつ訳じやないんだな。

「大事なものを守る為なら、あたしは何でもするつもり。自分が傷ついても、それが残るなら……」

?

「どうしてだ？」

「お」

「あ、ごめん！話がそれちゃいましたね」

「いや、いいけど。それで、ここに俺を呼びだして何の用だ？」

まさか前の続きをやるのと思つてるんじゃないかな。前、俺が森に呼び出された時、言われたセリフが

「ナオっちと行く、親切高校探検ツアーッ、ユコ 森ー。」

だつたからなあ。

その時は練習で行けなかつたけれども、まさか今日するのか？

「あ、いやあ…………そのつ……」

「どうしたんだ？突然拳動が不審だぞ？」

まさか変な事たぐらんでるんじゃないだろ？な。もしそうだとしたら俺は今から逃げるぞ。

「えっと…………ですね…………」

「はあ」

いやいや、本当に拳動不審すぎる。

ただ、なんか高科の様子がおかしい。  
頬が赤くなっている。あれが、風邪か?  
もう冬も明けたといつのに今さら風邪か。どうしようもないやつだ  
な。

「一緒に校舎になつたじゃないですか!」

「そ、そうだな」

「だから……これまでよつも一緒に居れる時間が増えたでしょ!」

「あ、ああ」

なんでそんな大声なんだ?

喉に氣をつけるよ、風邪なんだから。

「だ、だから、できたら、1年生の時よつも、あたしと一緒に元の学校を…………つて、

「ああ、もつー!」

何だかよく分からんが怒られた。

いや、怒られたのか?

怒鳴られたのは確かだが。

一体何が言いたいんだ、こいつは?

眠いんだからやつをとしてくれよ。

お前も風邪だらうから早く布団に入つた方がいいと思つんだが。

「で、何なんだよ」

「あたしは、西園寺君が好きなんですよー!」

What, s?

一気に眠気が吹き飛んだ。

「一緒に居て、楽しいんですねー!」

なるほど、頬が赤いのは風邪じゃなかつたのか。  
そういうえば来たときは特に赤くなかったもんな。

……こんなことを考へてないと平常心が持たない。

「あたしは馬鹿で、顔に落書きして、周りに迷惑ばっかりかけて、  
落ち着きが無くて、  
うるさくて、顔に落書きしたりする奴だけど、あたしと付き合つて  
下せこー!」

「……」

……ヤバイ、結構動揺してるぞ、俺。

まあこいつが俺の顔によく落書きする奴、とにかくはよく分かつ  
た。

「……」

「な、何か言つて下せこー!」

俺はしづかく黙る。

にしても、なあ。

「…………」

「「」、この沈黙が耐えられませんよ」

ナオがだんだん不安そつた表情になる。

「あ、あのう……」

「普……アハハハハ！」

「えつ？」

「そんな自分のダメな部分ばかりアピールして、普通誰が付き合つ  
んだよ」

「じゃ、じゃあ……」

普通は、な。

「いいよ」

「へつ？」

ナオがきょとんとした顔になる。

「だから、いいよ。付き合おつか」

「え…えええええーーー？」

自分から言つたくせに。成功すると思つてなかつたのか?  
にしてもつむせこな。

ナオはきょとんとした顔から一変、満面の笑みを浮かべている。

「えええええ……やつたああああー西園寺君の彼女になりましたよ

「！」

そう行ってナオは「」つちへ走つてくる。  
そして、そのまま抱きつかれた。

「2人で楽しい思い出を作つていこうねーこれからは2人だから、  
楽しい思い出が2倍  
ですよー！」

残念ながら少しだけ間違つてるな。

「嫌でもナオとなら作れそつだけ、2乗だからな。それを忘れないでくれよ?」

「うんーもちろんー！」

はあ、どうやら前に大江が言つたことは、未来の予知だつたらしい。  
これからあいつを超能力者と呼んでやろうかな。

「だけど、ナオに一つだけ言つておくことがある」

「なんですか?」

「自治会の目とかあるから、教室や人目のつぶとこではできるだけ大人しくしろよ」

目つけられたら大変だもんな。

あ、こいつはもつつけられてたな。

「わかつてますよー！」

「本当か?」

「うん……たぶんね」

その時ナオの目が光ったような感じがしたが……氣のせいだらう。うん、本人が分かつてゐる、って言つたんだ。そういうことだらう。  
……不安だが。

こうして俺は学校生活がより楽しくなることを確信した。  
ただ、ナオが何かをしないように気をつけないとな。

### 第31話 「それはとある紙切れから」（後書き）

文章を考えるのがへたくそ。

元ネタ（ゲーム）があるのに、これじゃあまだまだ駄目ですね。  
つてナオが言ってた。

## 第32話 「これこりあつました」

「……何一や一やじつむんでやんすか。気持ち悪いんでやんすよ」

「あ、そつこいめと」

「何があつたでやんすか?」

今は寮にいる。

ちなみにニヤー一やじつする理由は、わざわざ泣かれたから。

……スつた。いこととを書いたら荷田君にばれるな。

もう遅いけど。

「相手は一体誰でやんすか!早く言へ、でやんす!今ならあの新聞部つぽこやつこ言わなこでおへでやんすから」

きっとナオのことだらけ。

確かにあこつてたら「あまると聞違になしなんだが、残念だつたな。

さて、そいつの名前をまだ頭の中で覚えてないから今なら荷田君も分からないだら。

逃げとくか。

それだけ考えると、俺は行くあても決めず外へ出た。

「あつ、どこへ行くでやんすかーあの新聞部つぽこやつこ聞こつけてやんせんすー!」

……じつめい勝手に。

「しばらべ部屋に戻らない方がいいな……」

適当に寮の前を「ララララ」する。

今から越後の所へ遊びに行こうかと思つたが、あいつらは自主練していたのを思いだして、

た。

しうがない、どうか適当に歩くか。

なんとなく歩いていると、学校の中庭についた。

なんでここに来たのだろうと自分で思つたが、そこである人物を見つけた。

そいつは、俺に近づくこと無くずっと雲を見ていた。  
俺は喋りかけようと思つてそいつに近付くと、ある『音』が聞こえた。

グウ～。

……“ひっせり腹が減つているらしー。

残念ながら今俺は何か食べ物を持つていなー。

「おー、岩田。すいぶんとでかい音だつたぞ。」  
「」  
「おー、岩田。すいぶんとでかい音だつたぞ。」  
「」

「あれ、西園寺。一体いつから？」  
「さつさ来たばかりだよ」

グウ～。

2回目だ。

よほど腹が減つてゐらしー。

まあ、岩田は部活中でも授業中でも腹が鳴つてるので、そんなに珍しい訳じゃないが。

岩田は俺から視線を外し、再び雲を見る。

UFO、またはヒーローでも飛んでるのか？

俺も見てみるか。

だが、そこにはいたつて普段と変わらない雲の姿があつた。

気になつたので、岩田に聞いてみる。

「岩田。雲なんて見てどうしたんだ？」  
「こや、れ。あの雲「ロロッケ」見えないかい？」

岩田はその雲を指でさす。

なるほど、確かに「ロロッケ」見えなくも無いな。

「で、あれがクリーミーコロッケ」

「またコロッケか」

「でも、クリーミーコロッケって普通のコロッケより丸い感じするだ  
う?」

分からなくはない。

でも、もつちよつと言い例え方が無かつたのか。

「そして、あれがカニクリーミーコロッケ」

「……」

なんだ? こつは、突っ込み待ちか?

カニクリーミーコロッケとクリーミーコロッケはほとんど一緒だわ!。

「それで、あっちが牛肉コロッケ」

「分かつた分かつた、とりあえずお前はコロッケが今食べたいんだ  
な?」

「うん」

グウ~。

そして3度目の音が鳴った。

2度あることは3度あるつて言つしな。……あつてるよな?

「あああ、もう駄目だ。食堂に行つてくる  
「行つてらつしゃい」

そして柏田は早足で食堂へ向かつていった。

話す相手もいなくなつたし、俺も寮に戻るかな。

……こ?

俺は左手を見る。

すると、向こうから田島と荷田君がやつてきた。  
しかたない、隠れいやつ過いすか。

にしても、まさか荷田君田島にあの事言つてないよな。  
もつぱつてたら今度の距離で投げ込みしてやる。

「……だからあの雲がザボンガルでやんす!」

「どうやらあつちも雲の話をしていたらしい。  
盛り上がっているのは荷田君だけのようだが。  
田島は困ったような表情をしている。

実際困っているんだろ? けど。

「どうしてわからないんやんすか! あつちがザボンガルで、こいつ  
ちがゲッカマン」

「だつて俺それ見たことないもん……」

「あ、そう……」

「どうやら話は解決したらしく。  
……どうか違うところに行くか。

今度はグラウンドに来てみた。

そこでは越後が一人で素振りをしていた。  
まだやっていたんだな、あいつ。

たまたま近くにボールがあつたので、それを手に取り越後へ近づく。

「よつ

「お、西園寺じゃないか。どうしたんだ？」

「少しブラブラしてるだけだよ

「そうか、つまり暇だつてことだな？なら、その手に持つて俺の  
ボールで練習を手伝  
つてくれよ」

もとからそのつもりだったんだが。

周りにもボールが落ちていたので、それを拾い集める。  
それから俺は越後のトスバッティングを手伝う。

……やっぱりこのつのフォームはいつ見てもきれいだ。

本人は守備の方が得意らしいが、打撃面も相当なものだと思つ。  
もう少し筋力をつけたらすぐにでもホームランを量産できそうなく  
らいだ。

「なあ、俺のフォームこれでいいと思つか？」

越後はこっちを向かずに話しかけてきた。  
話している間にも練習は続ける。

「ああ。特に直すところはないと思つた。  
「なさいいんだけどな」

その後も黙々と練習を続ける。

.....

45分くらい経つただろうか。

一向に越後は休憩をはさまない。

そろそろ球を投げる俺も疲れてきた。

こいつは本当に体力があるな。先発の俺も見習わないとな。

それからさりに数十分。

「ふう。そろそろ終わりにするか

結局休憩なしだった。

あいてて、中腰でやつていたから腰が痛い。

とりあえず俺は立ちあがつて1回背伸びをする。

すると、背中の骨がボキボキと鳴る。

子供の頃は、この音で骨が折れてしまうのではないかと思った。

まあそれで骨が折れるんだつたら、ジャイ ンがの たを殴る時の

指を鳴らす動作の時

に指が大変なことになつてているが。

そういうえば前に会つたあの外人。

あの人は本当に骨が折れていたのに回復力が異常に速かつたな。

「やうだ、西園寺。すごい技ができたんだけど見てみないか？」

すごい技？

とりあえず見てみるか。

「ああ、見させてくれよ」

「よし、しつかり見てみよ」

そう言つて越後はボールを拾つた。

そして、ボールを上に投げ、落ちてきたところをヒットさせる。

……ただ打つただけじゃないのか？

「あの球が地面に着いてからを見ろよ」

地面に着いてからどうなるつていうんだ？

あれか？ 地面にでもささるのか？

ボールはセンターの方まで飛んでいき、地面にボトムと落ちる。その瞬間、ホームに立っていた俺たちの方めがけて勢いよく転がつてきた。

バウンドせずに、だ。

「す、すげえ

「これはな、打つときに特殊な回転を掛けるとバウンドせずに戻つてくるんだ」

なんともすごい技術。

だけど……

「せつかく外野に飛ばしたのに内野に戻してどうすんだ？」

「はつ、やれやれだぜ！」

「どうやら戻りてなかつたらしい。

ここ、本当に野球バカだな。

その後部屋に戻つたんだが、すごい顔して荷田君が待つていた。  
疋田はいなかつたからよかつたものの、いろいろ大変だつた。

### 第32話 「これであります」（後書き）

祝100000hit！

同時に2話掲載で行こうと思つたんですが、残念ながらテストが近いので：orz

それにもありがとうございます！

これからも頑張つていいくのでよろしくお願いします！

### 第33話 「いや、なんであなたがここにいるのですか？」

「えつと……なんであなたがここにいるんですか？」

俺は寮で洗濯をしていた。

普通ならばこういったことは同室の後輩がやるものなのだが、残念ながらこの同室の

後輩は先輩の命令をきかない。

「まあいいじゃない。それよりこのひとはまだ一年生がやるものだつたはず。しかも他の一年生たちはもう終わってるはずだけだ？」

「わざわざ時間帯をずらして洗濯やつてるんですよ。……一年生に見られたら恥ずかしいから」

そうなのだ。別に一年生じゃなくても宮取や若田など他の2年生に見つかって笑い事じゃない。

「にしても、なんだかあなたに敬語は似合わないわね。別に使わなくともいいわよ」

「ならわざするけど」

そっちのほうがこっちとしてもやりやすい。

とりあえず、本当にこの人がなんでここにいるかが不思議だ。

「……とにかくなんでここにいるんだ? エフと……お、お姉さん」

「ふうん、お姉さんとは違うのね。まあそれは置いといて、ここに私がいたら悪い事があるのね」

ひでえ。

なんでもここにいるのかを確かに聞いたが、そこから俺に確かめもせず悪い事があると決めつけやがった。

とりあえず今俺の目の前にいるのは、けつこう前に廊下で出会ったあの金髪の女性だ。

今日も黒いコートを着ていて、髪の毛を後ろで束ねている。情報屋らしいので、今日もビッグ仕事でここに来たんだろうナビ、なぜ俺の所に来るのかが分からぬ。

なんだ？俺の情報でも欲しいのか？そんなことはないだろ？が。

「悪い事があるって決めつけるのはどうかと思つや。まあ本当のことはなんだけどな」

「ふうん。何かしら？」

「俺じゃないが、お姉さんがここにいるのは不法侵入だろ」

「ちゃんと許可証はもらつてるわよ」

「まじか！？」

何それ、普通に入ってきたのかい。

なんか自分の考える情報屋のイメージと随分違つや。

ほら、目標の場所に誰にも見つからず忍び込み一瞬のうちに情報を奪い去る、みたいな。

俺の思いこみかな？

「ただの思いこみは命取りよ」

「考へてることを見抜かれた！？」

「あなた、考へてることが顔に出やすいつて言われない？」

言われない。そんなこと言われたこともない。  
ただ一人を除いて。

「で、結局あんたはここに何をしに来たんだ？」

「私の質問をスルーね。後でどうなつても知らないわよ？」

「す、すいませんでした」

何なのこの感じ。

俺この人苦手だ。どうも逆らつてはいけない感じがしてならない。

「ま、そろそろ答えてあげるわ。分かつてると思つたけど仕事よ」

「内容は？」

「普通仕事の内容を教える情報屋がいるかしら」

うん、ないな。

「じゃあ、なんで男子寮にいるんだ？こんなとこまさか情報がある訳じゃないだろ」

「そうね。確かに用事はもう済ませたからあとは依頼者に持つて帰るだけなのだけれど、

たまたまナオに会つて、彼氏さんが出来たとか言つてたから来てみたのよ」

ナオが俺のことを言つたのか？

これでこの人にさらに情報が追加された訳なのか。

こんな情報はとても安そうだが。

「どうでもいいことを考えていたら、きなりお姉さんがこいつちをまじまじと見てくる。

「一体何だ？顔に、」飯粒でもついてたか？

「ちがうわよ。もしそんなことがあつたら顔を殴つてるわよ」

「普通に事実を伝えるだけにしてくれ。それにナオから聞いたが暴走族を素手で壊滅さ

せるくらいの実力があるんだろ？普通に俺死ねるんじゃないのか」

いや、間違いなく死ぬ。

なんか感覚的に分かる。この人と戦つたら間違いなく殺されるな。

「それで結局なんで俺を見ていたんだ？」

「いや、こんな顔が残念なのがナオの彼氏なのかと思つて。ナオが勿体無いわ」

「し、失礼な」

まさかこんなことを言われるとは思わなかつた。

俺の心に120くらいのダメージを食らつたぞ。

俺の残りHPがどれくらいかは察してくれ。

とりあえずなんか話を変えないとヤバイ。

完璧に主導権を握られている。

「そうだな……あつちが恋愛関係の話を持ちだしてきてるからこいつちもそれでいいか。

「そういえばお姉さんのほうはどうなんだ？前に好きな人がいると

か言つてたよな。そ

の人とははどうなつたんだ？」

「仕事の固定客つて言つたわよね。それとも何？独身の私に対する挑戦状か、彼女がい

るつていつ、面接？もじびつちかに当てはまるならマリアナ海溝に沈めるわよ？」

「ち、違うー普通の意味でつてなんかそれもおかしいし……そ、だ、  
前言撤回で！」

そもそもマリアナ海溝ってなに？食べられるの？

沈めるつていたから海とかそつち系かな？

どうせ沈めるなら太平洋とかもつと深いところに沈めたらいいのこ。

「はあ、いいけどね。それじゃあ私はそろそろ帰るわよ

「ああ」

「あなたも何か欲しい情報があつたら遠慮なく言つていいわよ。一

応ナオの彼氏つて事

で安くしといてあげるから」

金は取るのか。

そりや仕事だからそんなんだろけど……情報ねえ。

ナオの情報とか頼んでもしようがないし、何か頼む必要もないか…

…あー

「それじゃ、またいつか

そう言つてお姉さんはくるりと校門の方へ身体を反転させる。だが、俺はあることを思い出したので、呼びとめる。

「待つてくれ

「何? 何もなにならチャレンジジャー海淵の一一番下まで行つてもひいつわよ?」

だからビーン。

「やうひじやなくて、俺も仕事を依頼していいか?」

「別にいいけど。で、何の情報が欲しいの?」

そり、俺が思いだしたあることとはミーナさんに頼まれたことだ。一応教室が一緒になつた時に神条に頼んだのだが、それだけではやつぱり情報としては不足するかもしれない。専門家にも頼んでみるとする。……あつちも専門家だと思つたが、それは置いておこう。

「ある生徒の情報が欲しいんだ」

「ナオとか言わないでよ?」

「断じて違う。で、とりあえず話すけど」

俺はミーナさんから頼まれた生徒のリストのことを行方不明者のことを話す。

ミーナさんの名前は伏せておいたが。なんとなく。

そしてその依頼を聞き終えたお姉さんはしばし考えてくる動作を見る。せむ。しまじかすむといひひひに向き直り、

「別にそのくら一の情報なりこいわよ。ただ、これから少し仕事が重なつてゐから伝えるのは少し遅れるけど」

「別にいいよ。でも、俺が学校を卒業するまでには頼むぞ」

「私は情報屋よ。そんなに遅くなるはずがないわ」

「情報屋には出来るだけ早く伝えるってことも含まれるんだな。  
ま、どうでもいいが。」

「それじゃあ今度こそ行くわよ。妹が待っているからね」

「ああ、それじゃあまた今度」

「ええ」

最後に笑みを浮かべ、俺に背を向けてどつかへ行つた。

最後に少し氣になることを言つてたな。

妹……いるんだな。

どんな妹なんだろう。同じようでケンカが強そうだけど。  
まさか、実はおとなしくて、甘えん坊とかは……ないよな。

さて、とりあえずであの人に依頼を頼んだからこれでミーナさんとの約束は果たせるな。

あ、考えたら俺に情報を教えてもらひつとじやなくて、ミーナさんこ  
直接伝えてもらつたら良かつたな。

ま、いいか。

## 第34話 「笑顔は可愛いな」

テクテク……

俺は教室を出て屋上へ向かっている。  
別段用があるわけでもないが、他にすることもないのでも屋上に休憩  
でもしようかと考え  
たのだ。

屋上へ続く階段を上がる。  
この階段で上がるのも何回目だろ？  
それくらい俺は屋上を利用している。

そういえば2年生になってからはここにくるのは初めてだ。  
3ヶ月くらい来てなかつたんじゃないかな。

階段を上がりきって、田の前のドアノブに触れた時、あることを考  
えた。

(……ナオも連れてきて一人でのんびりしたほうが良かつたかな)

なんとなくだが、ナオの事だから後ろをつけついそうな気はするが  
気がする。  
無いとは思つが……無いよな？

一日考えるのをやめて、俺はドアノブを回す。  
そして、ドアを押して外に出る。

うん、今日もいい天気だ。

風もいい感じに吹いてきてるし、空気も都会よりは随分とおいしい。そりや山とか森の中とかと比べると負けるが。

「にしてもこんないい天気に屋上に来ると、どんなに沈んでもいい。あつという間に気分爽快だな。こんな青空のもとで暗い顔をしている奴は馬鹿だな。馬鹿に違いない。きっと越後より馬鹿に違いない」

雲ひとつない晴天だしね。

俺は少し歩く。

ふと左を見ると、セリにせばベンチに座った女の子がいた。たぶんドアを開けた時にドアが邪魔で視界に入らなかつたのだろう。

別に女の子がいるのは問題じゃない。

むしろ普通にしてくれば会話をしても仲良くなひとつとも思えるのだが、俺はその女の子と会話をすると出来なかつた。

いや、厳密にいえば話すことは出来たのだが、話せるような雰囲気ではなかつた。

つまりどうとか？

その女の子は下を向いて、すいこくへりーい雰囲気を出していったのだ。

「……」

え？ どうこうこと？

こんな爽やかな屋上で騒いでる俺が場違い？

「……」

女の子は一向に喋らない。

「こっちを振り向きもしないぞ。もしかして怒っているのかな？ お邪魔しました～。」

俺は駆け足で校舎の方へ戻つて行つた。

それにしてああの女の子は一体何をしていたんだろう。ずっと下を向いていたし。

ま、もう会うこともないか。

…… IJの考えはアスパルチームより甘かつた。

それは数日後。

前回と同じように一人で俺は屋上に来ていた。

「今日もいい天気だな。こんないい天気の日に屋上に来るとどんな奴でも笑顔になるな。  
こんな青空の下で笑顔にならない奴はとことん暗い奴だな。間違いない。絶対田島より暗そうな顔をしてるに違いない」

前回と同じような事を俺は言しながら周りを見渡す。

そこには前回と同じベンチに座っている女の子の姿がいた。  
しかもずっといつもこことてる状態まで一緒に。

なに？ 実は自縛靈とかじゃないよね？  
俺呪われてるとかじゃありませんよ！」

……失礼な事考えてしまったな。

反省、反省。

「にしてもまたか！ またこの子か！」

「……」

やつぱり女の子は振り向かない。

「しかし、なんでこんな顔してるんだ。前は怒ってると思つてたけ

ど、今日はなんだか

俺の存在に気づいてないよう見えるな

「……」

じょうがない、話しかけてみるか。

俺はその女の子に一步近づく。

そして、話しかけてみようと思つた瞬間

パシャ！

カメラのシャッター音と共に、眩しいフラッシュの光でその女の子は顔を上げる。

「えっ？」

「な、なんだ？」

二人とも何が起こったか分からぬようで、俺は呆然と立ち尽くす。女の子の方はビックリした様子で、キヨロキヨロと周りを見る。

「い、今のは俺じゃないからな。さすがに俺でも目から光なんて出せないからな」

言つたものの、女の子はまたうつむいて開け放しにしていた扉の方へ走つて行つた。

「え、いや、君！」

とりあえず俺もそっちの方にいくが、女の子はもう扉の目の前にいた。

だが、そこで不思議な現象が起きる。

ギィー……バタン！

扉が閉まった。

あの子が触れてないのに、だ。

一方女の子は驚いてそこに立ち尽くしている。

何だか良く分からないうが、今がチャンスだ！

「なんで？なんで勝手に扉が閉まるの？」

俺は急いで女の子の方に駆け寄る。

「あのー」

「あ……あ……あ……」

何を言つたらいいか分からないうが、ここは適当に謝るか。

「本当にめん…よくわからないけど」めん…

「へ？」

女の子は驚く。

「とりあえず」めん…

「……」

「俺の顔が怖かつたら」めん…馬鹿で」めん…あと、生まれてきて

「

そこまで言った途端、女の子が笑い始めた。

「クスクスクス……」

h  
?

第一回

それが、せーと笑ってくられたが、よかたよかた

一  
何  
で  
主

「えつそりなの？」

しばらく沈黙が続く。

「どうかした？」

「私は芳樹さんと申します。貴方のお名前をうかがつてもよろしくですか？」

考えたらまだ自己紹介してなかつたな。

「俺の名前は西園寺。よろしく  
「あなたが?」

え、何が？

「あ、いや、何でもあつません。それより、一つ訊いていいですか？」

「別にいいけど」

「高科さんと付き合っているところのは本当ですか？」

高科……ナオのことか。

友達なのかな？

「本当だけど、何で？友達なの？」

「いえ……そんなことはないです。それにしても、恋愛禁止令の噂  
しらないんですか？」

恋愛禁止令の噂？何だそれ。

始めて聞いたぞ。

「その様子じや知らなさそうですね。実は貴方のクラスの神条さん  
が生徒会長になつた

時に、そんなことを言つてたんですよ。特別反省室に送られるつて  
「ごめん、俺神条が生徒会長をやつてることも初めて聞いたよ」

……

また沈黙が続く。

いや、なんかすみません。周りのこと一切知らなくて。

「ま、まあその話は置いておこう!」

「は、はい。にしても……ナオか

最後の方がよく聞き取れなかつた。

何て言つたんだろう?

「あ、あのっ！」

「な、何？急に大きな声出して」

いきなり声が大きくなつてビックリした。  
何だらう？

「わ、私のことさうりと呼んでいただけますか？」

「突然どうしたの？」

「い、いえ……なんとなく。ダメですか？」

「そんなこと無いよ。友達なんだからそれぐらい〇Kだよ。」

いつから友達になつたんだが、と言われそうだがそこは華麗にスル  
一。  
単なる考え方なので気にしないでね。

「あ、ありがとうございます。あ、あの、また屋上に来て下さこま  
すか？」

「もちろんんー！」

「ありがとうございます。それでは失礼いたしますね」

「ああ」

さらば扉を開けて、階段を下りていった。

そろそろ俺も戻らないと。

昼休みが終わつて次の予鈴がなるからな。

.....

「なんとなくナオと知り合いかなとも思つたけど、違うみたいだな。  
ま、性格が逆だし  
あの一人は友達になりそうもないな」

その言葉だけを屋上に残し、俺も階段を下りていった。

だが、そこで一人だけその言葉を聞いてる人がいた。

「……。友達じゃないからねえ」

ぼそつとつぶやいた高科の声は主人公には届くはずもなかつた。

第34話 「笑顔は可愛いな」（後書き）

アスパルームとは甘味料の一種。  
……あつてるよね？

### 第35話 「サッカーのルールって難しいよね」

ただいま休み時間で、チームメイトと遊んでいる。

ちなみにサッカーだ。

「おい、越後！手を使つな！反則だぞ！」

いや、サッカーやつてるのにいきなり越後がボールを持ち始めた。キーパーでもなにのに。

「なんだ知らないのか西園寺、やつぱりお前は馬鹿だな。サッカーはキーパー以外でも手を使つてもいいんだぜ？」

……何を言つてゐるんだ、こいつは。

「馬鹿、それはスローインの時だけだ！」

「な、何だつて！？ そんな馬鹿なー！」

こいつと同じチームになつたのが馬鹿だつた。

「いいから早くこひにボールを渡すでやんすー！」

やつてしまつたことはどうにもならないので、荷田君にボールを渡す。

ちなみに荷田君は敵です。

「くそつ、次からは気をつけろよ越後！」

「まさか俺に対するサッカーのルールが全部間違つてるとはな。驚いたぜ」

救いようのない馬鹿だ。

ショウがない後は俺が何とかするしかないな。

「見とけよ！この赤いカミソリの実力を！」

「なんかめちゃくちゃ危なそうな名前でやんす！？」

俺はドリブルで相手のディフェンダーを抜こうとする。  
が、抜けなかつた。

普通に官取（相手）にボールを取られてしまった。

「なんだ、その名前は伊達か」

言われてしまつた。

くそつ、次は抜く…………ん？

屋上に誰か……あれは、さら?  
こっちを見ているな。

「…………」

あれ？ビリしたんだ？

こっちと目が合つた途端顔を伏せてしまつた。

……むう。何か俺悪い事したかな？

「西園寺、そつちへ行つたぞ！」

「ああ、悪い！今度こそ見てろよーこの黄色い掃除機の実力を！」

「変わつたでやんす！？しかも弱そりでやんす！」

うつせー。

結果、2-0で負けてしまつた。

購買で勝つたチームにお菓子を買つことになつてしまつた。

まあそれは別にいいか。

今、俺は中庭に向かつている。

これからナオと昼御飯を食べる予定なんだが、俺は購買でお菓子を

買つていたので10

分ほど遅れてしまった。

怒つてなればいいんだが。

急いで俺は中庭に向かう。

そして、中庭にあるベンチを見てみると

誰もいなかつた。

あいつから誘つ といて遅れるのか。

まあいいけど。

5分経過。

.....

遅いな。

あいつ、何やつてるんだ？

早くしないと昼休みが終わるぞ。

実は俺の周りで隠れていたりしないよな？

そう思つて俺は周りを見てみる。

右には 誰もいなーいな。

左には

やらがいた。

いや、こつの間に？

実はこの子も隠密術使えるとかじゃないよな。

「みー、せーり」

「西園寺君じゃないですか。こんな所で何をやつているんですか？」

「人を待っているんだよ。中々来なくて困っているんだ。そいつが

昼を誘つてきたのに

遅いんだよ」

本当に。

これだからナオは困る。

「や、それは困つた方ですね。その方が来るまで私がここに座つても……」

最後の方がここにこよひついてよべ聞いえなかつた。  
まあだいたい分かるけど。

「ああいこよ」

「あ、ありがとひづやわこせや」

さらうが俺の横に座る。

とは言つても、特に話すことはないんだが……そうだ。

俺が越後や荷田君と遊んでいるときに屋上にこつたことを訊いてみる  
か。

あの時何やつてたか気になるし。

「みーじえぱわ」

「何ですか？」

「俺がサッカーしてる時さらば何で屋上にいたんだ?」「私はいつも屋上に居ますよ。初めて会った場所もそりだつたじやないですか」

確かにそりだつたじ。

「西園寺君は……」

それだけ言つて、そりだつたじを一回やめる。

「そりだつたんだ?」

「友達がたくさんいらっしゃいますね」

友達と言つたがチームメイト……いや、

「あじつりは仲間かな」

「やつぱり、一緒にいると楽しいと思っていますか?」

そりやなあ。

楽しくなかつたら付き合わないし。

そもそもそんなこと考へたことも無かつた。

「もちろんん」

「裏切られたらどうしようと思こませんか?」

えつ?

「仲間だと思っていた人に、大好きな人に裏切られたらどうしようつて不安に思いましたか?」

……

「無い。あこひらは仲間だから

荷田君や高取、越後に田島に田畠。それに疋田たちも。裏切られるなんて考えたこともない。

「だけ、誰だつて裏切りますよ。いくら仲間であるうど、友達であろうと、誰だつて、自分が一番大事なんです。信じられるわけ」  
「そんな心配していたら友達も出来ないだろ？」

俺はさういひの言葉を遮りて話す。

「すこません。今の話は無かったことにしてください。私と違つて友達が多う西園寺君を参考元として思つたんです」  
「……」  
「……」

言葉が見つからなかつた。

……裏切られる、か。

「そういえば、西園寺君は誰を待つていてるんですか？」

「ああ、それは

その時だ。

「『つめーん！西園寺君！先生に捕まつてしましました！』

「どうやら来たみたいだな。  
全く、なんて言つてやうつか。

と、その瞬間。

「では私はこれで。お邪魔ですし  
「別に邪魔だなんて」

さうは急に立ち上がり、俺に背を向ける。

なんだか様子がおかしいな。  
変なキノコでも食つたか？  
いやいや、畠田とかならともかくさうに限つてそれはないな。

「では、失礼します」  
「お、おー」

スタスタスタ……

急に行つてしまつた。

本当にどうしたんだ？

ナオの声が聞こえてから様子がおかしいな。

そしてさうが行つた後、入れ替わるよひにこじてナオがやつてきた。

「どうかしたの？」  
「いや、さつきまでさうがいたんだ  
「えつ？..さうりんが？」

そりつんつて……

「それで、邪魔になるからつてどつかに行つたけど」

「そつか……」

ナオは少しうつむく。

その表情はどこか悲しげで、寂しそうだった。

「どうかしたのか？」

「えつ？ 別になんでもないですよ」と

なんにも無いならいいんだが。

「そひて、お腹空いたねつ！ 購買でパンを買つてきたから森の方へ行きました！」

「くれるのか？」

「もちろんですよーーこつぱに食べて下さこですよ

そして、俺たちは森の方へ向かった。

「そりつ……」

向かう途中にナオが何か言つた気がするが、俺には何も聞こえなかつた。

### 第35話 「サッカーのルールって難しそうね」（後書き）

遅れています。

前も書いたと思うけど、テスト＆受験があるので  
更新は急に遅くなる可能性があります。

……でも見てくださいね？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9481x/>

俺と野球と奇跡（パワポケ10）

2011年11月24日19時02分発行